

青森県埋蔵文化財調査報告書 第299集

桜ヶ峰(1)遺跡

— 国道101号浪岡五所川原道路建設事業に伴う遺跡発掘調査報告 —

2001年3月

青森県教育委員会

青森県埋蔵文化財調査報告書 第299集

桜ヶ峰(1)遺跡

— 国道101号浪岡五所川原道路建設事業に伴う遺跡発掘調査報告 —

2001年3月

青森県教育委員会

序

五所川原市の南東部丘陵地帯には縄文時代から古代・中世・近世までの遺跡が数多く分布しています。

この報告書は、国道101号浪岡五所川原道路建設事業の実施に先立ち、事業地内に所在する五所川原市桜ヶ峰（1）遺跡を発掘調査した結果をまとめたものです。

調査では、縄文時代の土器・石器をはじめとして、弥生時代の土器、平安時代の須恵器等が出土しました。特に、五所川原市内では今まで見つけていなかった縄文時代草創期の爪形文土器や早期の貝殻腹縁文土器、トランシェ様石器等は、津軽地方の縄文時代を考える上でも貴重な資料になるものと思われます。また、粘土を採掘したと思われる跡も見つかっており、周辺の古代須恵器窯、或いは古代以降に作られた津軽地方の窯との関連も注目されるところです。

埋もれていた五所川原市の歴史を、より身近に感じていただくと共に、今後、この調査によって得られた成果が、地域の歴史・文化の理解に役立つことができれば幸いです。

おわりに、調査の実施及び報告書の刊行にあたって種々ご指導、ご協力をいただいた関係各位に対して、厚くお礼申し上げます。

平成13年 3 月

青森県埋蔵文化財調査センター
所 長 中 島 邦 夫

例 言

- 1 本報告書は、平成11年度に実施した五所川原市桜ヶ峰(1)遺跡の発掘調査報告書である。
- 2 本遺跡は、青森県遺跡地図に遺跡番号05009として登録されている。
- 3 本報告書の執筆者は、依頼原稿については文頭に記載し、その他は文末に記してある。
- 4 試料の分析、鑑定等については、次の方々々に依頼した(順不同、敬称略)。

石器の石質鑑定	県立八戸南高等学校教諭	佐々木 辰雄
出土土器の蛍光X線分析	奈良教育大学教授	三辻 利一

- 5 本書に掲載した地形図(遺跡の位置・周辺の遺跡)は、国土地理院発行の5万分の1の地形図「青森西部」を複製したものである。
- 6 挿図の縮尺は、各図ごとにスケールを付してある。なお、写真の縮尺は統一していない。
- 7 遺構・遺物の文・図中での表現は、原則として次の様式・基準によった。

(1) 検出遺構については次の略号を使用し、発見順に番号を付した。

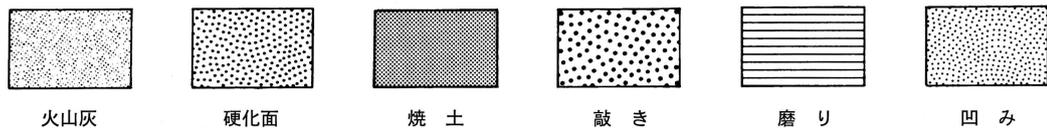
S R = 土器埋設遺構 S V = 溝状土坑 S K = 土坑 S D = 溝跡 S S = 道跡
S X = 性格不明遺構

(2) 遺構内外堆積土の注記には、「新版標準土色帖」(小山、竹原;1994)を用いた。

(3) 層位名は基本層位を「I・II・III…」などのローマ数字、遺構内堆積土層位を「1・2・3…」などの算用数字で表記し、細分層についてはその後にアルファベットの小文字を付けている。

(4) 遺物には観察表・計測値を付した。計測値の単位は土器類はcm、石器類はmm、重量はgである。

(5) 遺構・遺物実測図で使用したスクリーントーンの表示は次のとおりである。



(6) 遺構の遺物分布図の記号は、以下のとおりである。

●土器 ▲礫・石器

グリッド別及び調査区内の遺物分布図の記号は図中に付してある。

(7) 白頭山・苫小牧火山灰の呼称は、白頭山火山灰とB-Tmを併用している。

- 8 引用・参考文献については本文末に納めた。
- 9 発掘調査における出土遺物・実測図・写真等は、現在、青森県埋蔵文化財調査センターで保管している。
- 10 発掘調査及び本報告書作成にあたって、下記の諸氏・機関から御協力・御助言を得た(順不同、敬称略)。

三宅徹也、日下和寿、児玉準、工藤竹久、手塚孝、菊地政信、角張淳一、藤原弘明、新岡巖、下山信昭、本田泰貴、飯島伸一、宇留野主税、相澤治、盛田英人、秋田県埋蔵文化財センター

目 次

序	
例 言	
目 次	
図版目次・写真目次	
第Ⅰ章 調査要項	1
第Ⅱ章 調査方法と調査経過	2
第1節 調査方法	2
第2節 調査経過	5
第Ⅲ章 遺跡周辺の環境	7
第1節 遺跡周辺の地形と地質	7
第2節 周辺の遺跡	13
第Ⅳ章 検出遺構と出土遺物	15
第1節 検出遺構	15
1 土器埋設遺構	15
2 溝状土坑	16
3 土坑	18
4 溝跡	21
5 道跡	28
6 性格不明遺構	29
第2節 出土遺物	36
1 土器	36
2 須恵器	49
3 石器・石製品	49
4 金属製品	59
第3節 遺物出土状況	66
1 土器・金属製品	66
2 石器・石製品	73
第Ⅴ章 出土土器の蛍光X線分析	奈良教育大学教授 三辻 利一 81
第Ⅵ章 まとめ	83
付 編 桜ヶ峰窯跡調査概要	県立五所川原農林高等学校教諭 新谷 武 84
桜ヶ峰窯跡出土参考資料	87
引用・参考文献	88
報告書抄録	
写真図版	

図版目次

- | | | | |
|-----|-----------------|-----|-----------------------|
| 図1 | 遺跡の位置 | 図21 | 出土遺物 縄文土器1 (第I～II群) |
| 図2 | 遺跡周辺及び調査区地形図 | 図22 | 出土遺物 縄文土器2 (第II～III群) |
| 図3 | 調査行程及びグリッド配置図 | 図23 | 出土遺物 縄文土器3 (第III群) |
| 図4 | 五所川原市七和地域の地形分類図 | 図24 | 出土遺物 縄文土器4 (第III～V群) |
| 図5 | 桜ヶ峰(1)遺跡内土層実測図 | 図25 | 出土遺物 弥生土器(第VI群)・須恵器 |
| 図6 | 周辺の遺跡 | 図26 | 出土遺物 時期不明土器(第VII群) |
| 図7 | 遺構配置図 | 図27 | 出土遺物 石器1 |
| 図8 | 第1号土器埋設遺構 | 図28 | 出土遺物 石器2 |
| 図9 | 第1・2号溝状土坑 | 図29 | 出土遺物 石器3 |
| 図10 | 第1～3・5・6号土坑 | 図30 | 出土遺物 石器4 |
| 図11 | 第1・3・4号溝跡 | 図31 | 出土遺物 石器5・石製品 |
| 図12 | 第2号溝跡1 | 図32 | 出土遺物 金属製品 |
| 図13 | 第2号溝跡2 | 図33 | 土器出土分布状況 |
| 図14 | 第2・5・6号溝跡 | 図34 | 遺物集中地点 第I～II群土器出土状況 |
| 図15 | 道跡1 | 図35 | 遺物集中地点 第III～V群土器出土状況 |
| 図16 | 道跡2 | 図36 | 遺物集中地点 第VI群土器・須恵器出土状況 |
| 図17 | 第1・2号性格不明遺構 | 図37 | 遺物集中地点 第VII群土器出土状況 |
| 図18 | 第5号性格不明遺構 | 図38 | 遺物出土状況 石器1 |
| 図19 | 第6号性格不明遺構 | 図39 | 遺物出土状況 石器2 |
| 図20 | 第7号性格不明遺構 | 図40 | グリッド別遺物分布図 石器等 |

第V章 第1図 デンドログラム

付 編 第2図 桜ヶ峰窯跡実測図

第3図 桜ヶ峰窯跡関連資料実測図・写真

写真目次

- | | | | |
|-----|------------------------|------|-----------------------|
| 写真1 | 調査前風景・基本層序・第1号土器埋設遺構 | 写真10 | 出土遺物 縄文土器2 |
| 写真2 | 第1・2号溝状土坑・第1・2号土坑 | 写真11 | 出土遺物 縄文土器3・弥生土器 |
| 写真3 | 第1・2号溝跡 | 写真12 | 出土遺物 弥生土器・時期不明土器・金属製品 |
| 写真4 | 第1～6号溝跡 | 写真13 | 出土遺物 石器1 |
| 写真5 | 道跡・第1号性格不明遺構 | 写真14 | 出土遺物 石器2 |
| 写真6 | 第1・2・5号性格不明遺構 | 写真15 | 出土石器の使用痕1 |
| 写真7 | 第6・7号性格不明遺構・遺物集中地点出土状況 | 写真16 | 出土石器の使用痕2 |
| 写真8 | 遺物集中地点出土状況・作業風景・調査終了 | | |
| 写真9 | 出土遺物 縄文土器1 | | |

第 I 章 調査要項

1 調査目的

国道101号浪岡五所川原道路建設事業の実施に先立ち、当該地区に所在する五所川原市桜ヶ峰（1）遺跡の埋蔵文化財の発掘調査を行い、その記録保存を図り、地域社会の文化財の活用に資する。

2 発掘調査期間

平成11年4月19日から同年8月31日まで

3 遺跡名及び所在地

桜ヶ峰（1）遺跡（青森県遺跡番号 05009）五所川原市大字前田野目字桜ヶ峰86-23、外

4 調査対象面積

6,650平方メートル

5 調査委託者

国土交通省東北地方整備局青森工事事務所

6 調査受託者

青森県教育委員会

7 調査担当機関

青森県埋蔵文化財調査センター

8 調査協力機関

五所川原市教育委員会

9 調査体制

調査指導員	村越 潔	青森大学教授（考古学）
調査協力員	岩見 貞夫	五所川原市教育委員会教育長
調査員	工藤 清泰	浪岡町史編纂室主幹（現生涯学習課文化班長）（考古学）
	伊藤 昭雄	県立木造高等学校車力分校教諭（地質学）
調査担当者	青森県埋蔵文化財調査センター	
	所 長	中島 邦夫
	次 長	成田 誠治
	総務課長	成田 孝夫（現工業振興課課長補佐）
	調査第三課長	木村 鐵次郎
	調査第三課文化財保護主査	相馬 良仁（現青森市立油川小学校教諭）
	“ 文化財保護主事	浅田 智晴
	“ 調査補助員	小山 朋子
		竹内 真紀子
		浅利 康子
		相馬 誠

第Ⅱ章 調査方法と調査経過

第1節 調査方法

1 調査区域の設定

今回調査した桜ヶ峰（1）遺跡は、平成7年度に青森県埋蔵文化財調査センターが調査した桜ヶ峰（2）遺跡と農道を挟んだ西側の丘陵部に位置している。調査区域のグリッドは、桜ヶ峰（2）遺跡が工事のため既に消滅していることもあり、調査区内の工事用センター杭No.133とNo.134を結んだ線に直交するようにメッシュを組み、それらの杭を基準（No.133=K-110、No.134=K-105）にして独自に設定した。工事用センター杭を基準としたため、本調査区の基準（南北）軸は国土座標軸から東へ6°ずれている。従って真北は本調査区基準（南北）軸より西へ6°ずれることとなる。なお、グリッドの呼称は北西隅としている。また、調査で使用した標高原点は、道路建設用地内にある工事用測量原点からレベル移動を行い、調査区域内に9ヶ所設置した。

2 発掘調査

- 1) グリッド単位で発掘区を拡張する方法を採ったが、前半期は緊急調査区である工事用センター杭南側道路部を優先した調査となった。
- 2) 粗掘りは、層位的に進め、遺物・遺構を確認してから、下層の掘り下げについて判断した。また、りんご園造成に伴う盛土が確認された部分では、一部重機による表土除去を行った。

3 実測図の作成

- 1) 遺構については、大きさによって4分法、或いは2分法によって土層観察用のベルトを設定し、精査した。
- 2) 遺構の実測図（平面図・断面図）の縮尺は20分の1を原則として作成した。
- 3) 土器埋設遺構は縮尺10分の1、その他、遺構内出土遺物については、必要に応じて同縮尺の微細図或いは分布図を作成した。
- 4) 遺構外出土遺物については、原則としてポイント・レベルを記録して取り上げた。
- 5) 調査区の基本層序については、必要に応じて縮尺20分の1の実測図を作成した。

4 写真撮影

- 1) 遺構については、確認状況・土層断面・遺物出土状況・完掘状況等を中心に撮影した。
- 2) その他必要に応じて、基本層序、遺跡の状況・調査状況についても記録した。
- 3) 使用カメラは35ミリカメラで、フィルムはモノクロームとカラーリバーサル（スライド）及びネガカラーの3種類のフィルムを主に使用した。

（相馬良仁・浅田智晴）

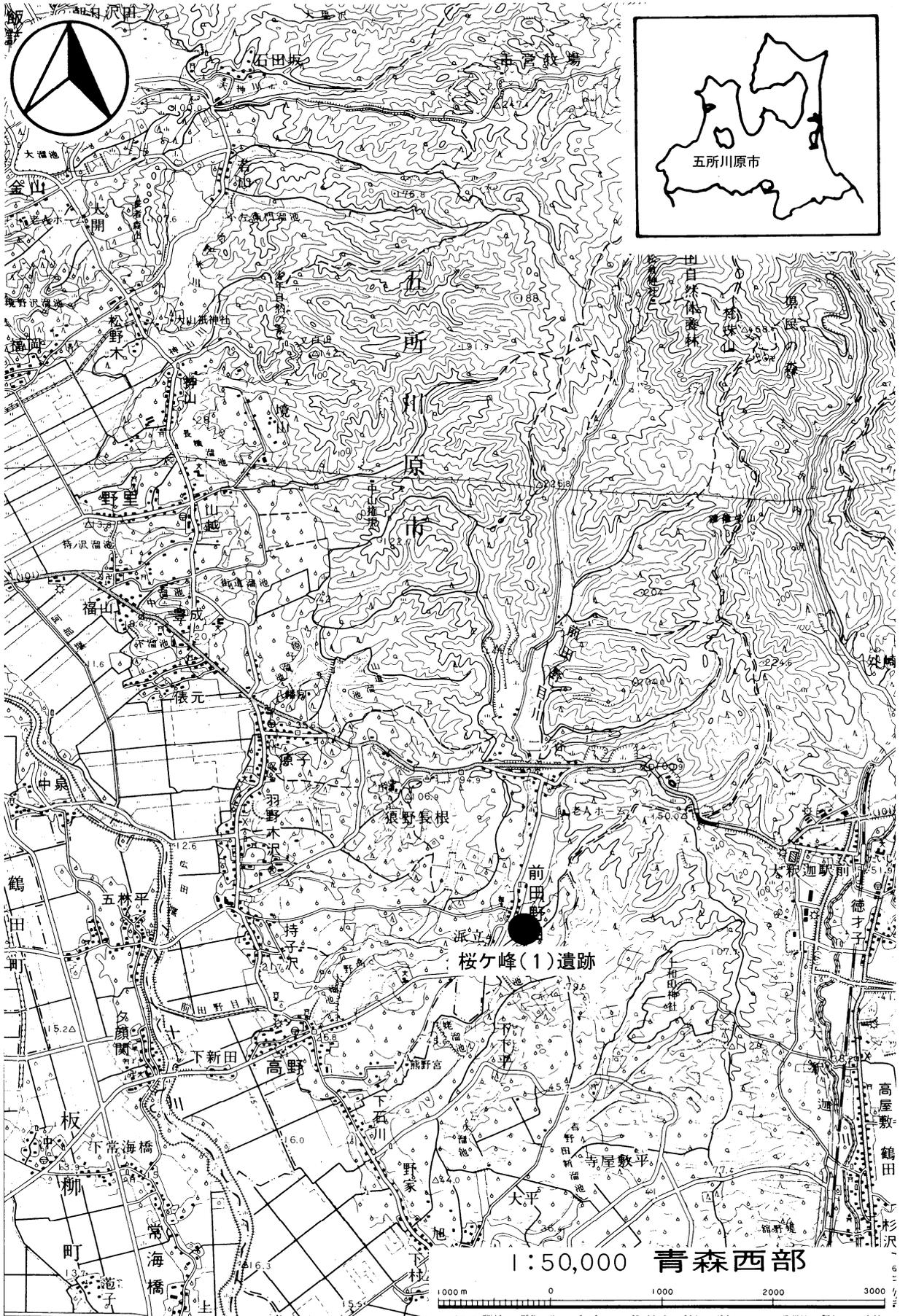


図1 遺跡の位置

桜ヶ峰(1)遺跡

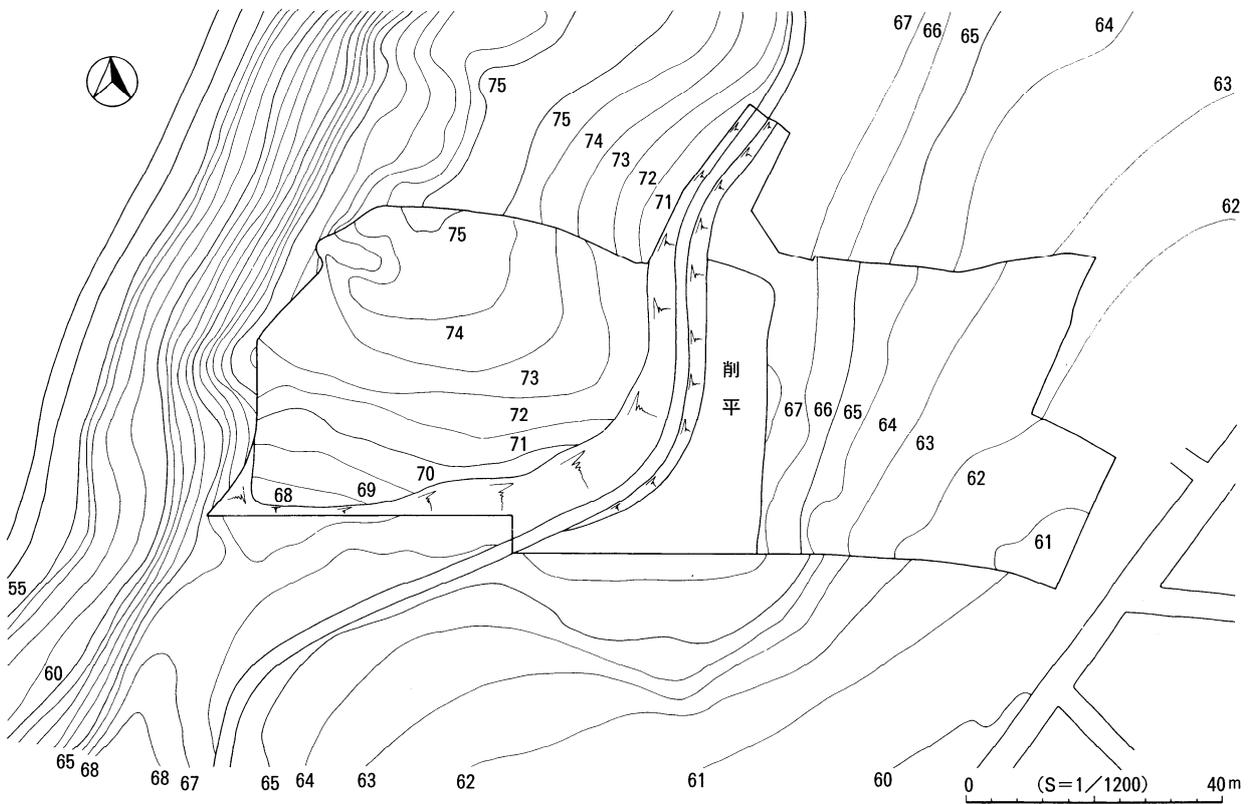
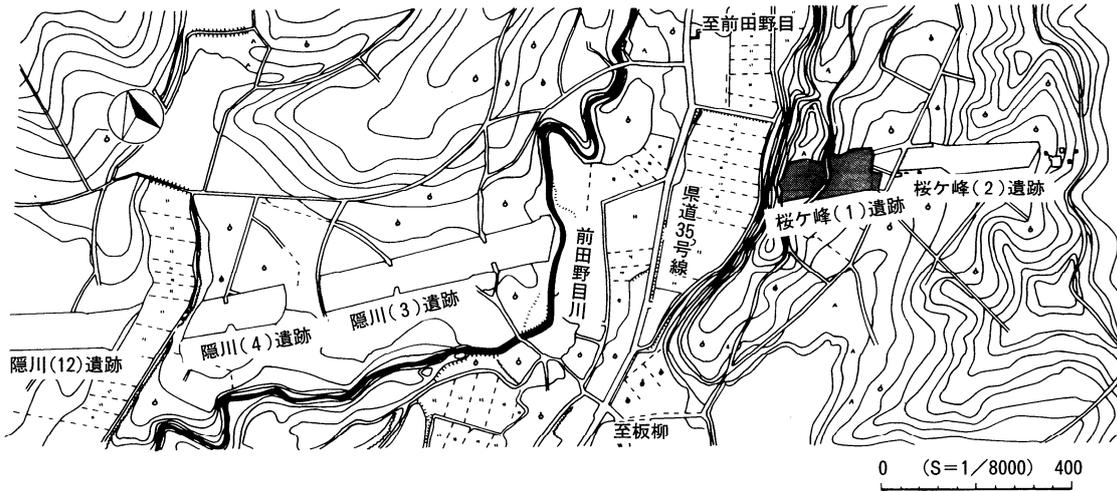


図2 遺跡周辺及び調査区地形図

第2節 調査経過

平成11年4月19日、発掘調査器材等を現地に搬入し、調査区内の環境整備を行うとともに、グリッド設定の杭打ち、レベル原点移動を行いながら、調査区の中でもセンター杭から南側の工事用道路部分が特に急を要するという事なのでこの部分にトレンチを設定し、掘り下げを開始した。

4月下旬、調査区中央部を南北に走る浜街道と呼ばれている小径を境に、西側の丘陵部からは溝状の遺構が十数条検出された。さらに、溝状遺構の西側では不整な落ち込みが確認され、精査を行った。東側の緩斜面部からは溝跡が4条、土坑が2基検出された。

5月中旬、丘陵部で検出された不整な落ち込みは、水場に関連する遺構であることが判明した。また、溝状の遺構は底面がかなり硬化している様子が顕著に認められた。丘陵部では一部で遺物が集中する区域が見つかり、ポイント・レベルを記録し、取り上げを行った。緩斜面部では遺構の精査を引き続き行った。

5月31日、天候に恵まれたこともあり、遺構精査、遺物取り上げ、地形測量を完了し、緊急調査区である工事用道路部分の調査を終了した。

6月1日、引き続き道路センター杭北側の調査を開始した。工事用の重機、車両が行き交う中での調査のため、特に法面となる近接部分では慎重に調査を進めた。

6月上旬、農道西側の丘陵部では、緊急調査区から検出された硬化面を有する溝跡が検出され、北側及び調査区外まで延びることが判明した。丘陵頂部からは、縄文時代の土器・石器類が多量に出土したのでこの取り上げを行った。

6月中旬、溝跡の精査及び丘陵頂部の遺物集中地点での遺物取り上げを行った。また、土器埋設遺構や礫が集中する箇所が検出され、精査を行った。

6月下旬、天候にも恵まれ、調査は順調に進んだ。丘陵部から溝状土坑が2基検出されたので、その精査を行った。農道東側の緩斜面部からは、緊急調査区から検出された溝跡の延長部分が確認された。

7月上旬、遺物集中地点からは、依然多量の遺物が出土したので、その取り上げを行った。遺物集中地点西側で確認された落ち込みの精査を開始した。溝跡の精査も引き続き行った。

7月中旬、引き続き丘陵部での遺物取り上げ、及び遺物集中地点下層での遺構確認を行った。

7月下旬、丘陵部の遺物集中地点下層からは、硬化面及び焼土を確認したので精査を行った。

8月上旬、緩斜面部の遺構確認、遺構精査を行った。遺物は土器片等が遺構外から散漫に出土していた。丘陵部は地形測量を行い、一部を残して調査を終了した。

8月中旬、引き続き緩斜面部の遺構精査、遺物取り上げを行った。

8月下旬、緩斜面部の遺物取り上げ、遺構精査終了後、同地点の地形測量を行った。

8月31日、調査区内の清掃、器材の撤収、出土遺物の搬出等を行い、調査の全日程を終了した。

(相馬)

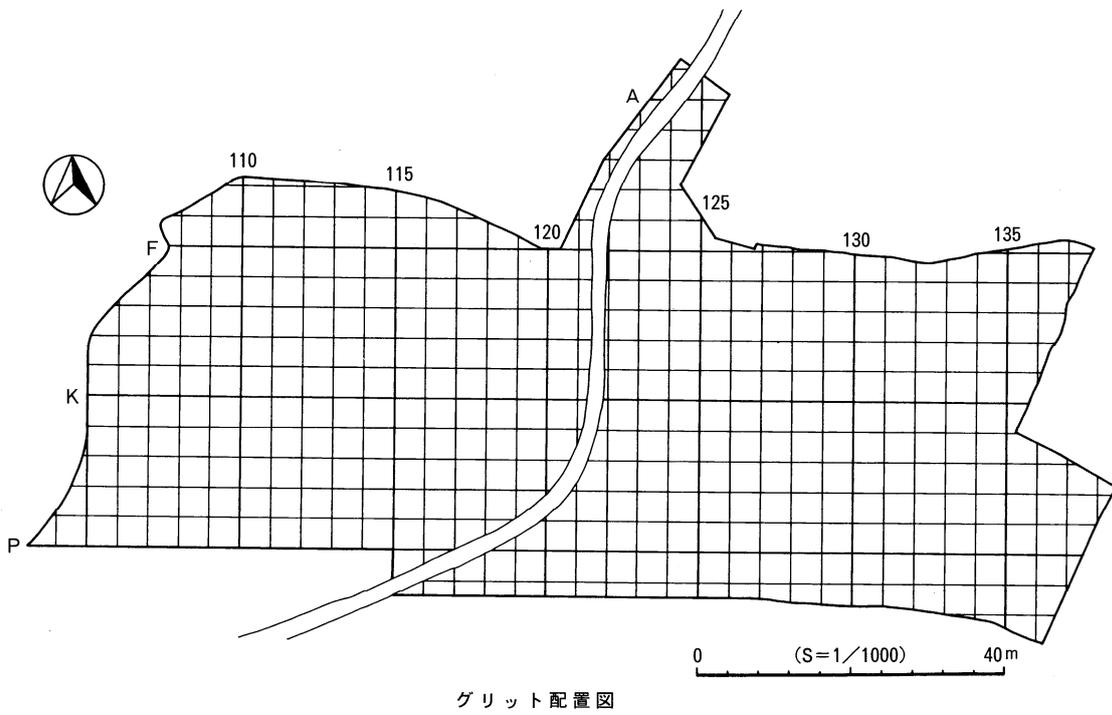
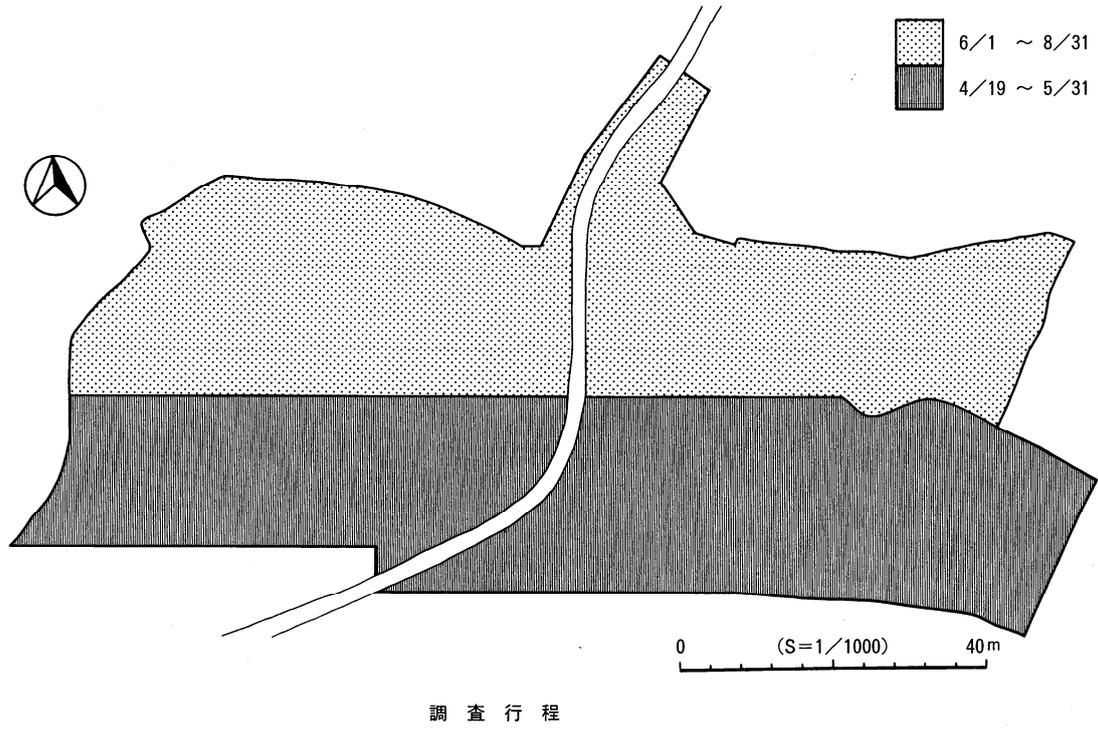


図3 調査行程及びグリッド配置図

第三章 遺跡周辺の環境

第1節 遺跡周辺の地形と地質

県立木造高等学校車力分校教諭 伊藤 昭雄

1 地理的位置と周辺の地形

桜ヶ峰（1）遺跡は、標高が54～66mの前田野目台地上に位置する。調査区域は、東側が緩やかに傾斜し（傾斜角 15° ～ 5° ）、西側は崖（傾斜角約 45° ）になっている。東側の緩斜面はりんご園による削平を受けている。500mほど西には、十川の支流の一つ前田野目川が南南西（派立付近からは西南西）へ流れている。南西400mほどのところには、本遺跡に係る谷を利用した笹溜池が水を湛えている。本遺跡はもとはりんご畑であり、この辺一带の平地～緩斜面には、りんご畑が広がっている。なお、調査区域の東には平成7年度に発掘調査の行われた桜ヶ峰（2）遺跡（青埋報第208集で既報告）があった。

本遺跡からは、西南西に標高1625mの岩木山山頂を、西南に白神山地等県境の山々を見ることができ、外は、尾根や、それに根を張る赤松・落葉松・杉等の針葉樹のため、展望は望めない。

水野・堀田（1983）は、本遺跡に係る5万分の1図幅「青森西部」地域において、津軽平野と大釈迦丘陵の間に分布する、海成段丘を中心とした砂礫台地を前田野目台地と呼び、標高・傾斜・開析状態・構成物等をもとに、Gt I面・Gt II面・Gt III面の3段に細分している。図4はその地形分類図である。Gt I面（上位面）は標高50～70mで、大釈迦丘陵の縁辺に分布し、表面は浸食により波状を呈する。Gt II面（中位面）は標高30～40m、地形面は平坦で、寺屋敷平・羽野木沢周辺で広く、開析谷には多くの溜池が見られる。Gt III面（下位面）は標高20～30mで、Gt II面の前面に断片的に分布する。本遺跡はGt I面に載る。

吾妻（1995）は、津軽半島に分布する地形面を、その分布形態と高度により、I面～V面の5段の段丘と沖積面に区分している。このうち、海成段丘は、高位よりI m面・III m面・V m面の3段である。III m面・V m面は、それぞれ小貫ほか（1963）の山田野段丘・出来島段丘に対比される。本遺跡の西方約1.6kmに位置する隠川（12）遺跡付近（発掘調査は平成8年）より、その西北西隈無（2）遺跡まで分布する。水野・堀田（1983）のGt I面は、I m面に対比される。なお、吾妻（1995）は本遺跡付近についてはI m面を認めていない。中川（1972）は、県下の段丘を、最高位、高位、中位、低位の4群に大別し、山田野段丘を中位段丘としている。山田野段丘は、岩木川と日本海岸に挟まれた地域および岩木川東岸に主に分布し、面はほぼ水平、高さは15～20mである。中位段丘は、下北では田名部段丘、県南東部では高館段丘で、県下の海岸地域に最も普遍的に分布し、古くは海岸平野であったとみられている。

吾妻（1995）はI m面について、砂・シルトを構成層とし、III m面との間にほかの海成面がないことから、最終間氷期よりも1つ前の間氷期（約20～22万年前）に形成されたと考えるが、より古い可能性もあるとしている。箕浦・中谷（1990）も山田野段丘の形成時期は最終間氷期と推定できるとしており、整合性を持つ。最終間氷期は、欧州ではリス・ウルム間氷期、その1つ前はミンデル・リス間氷期と呼ばれている。

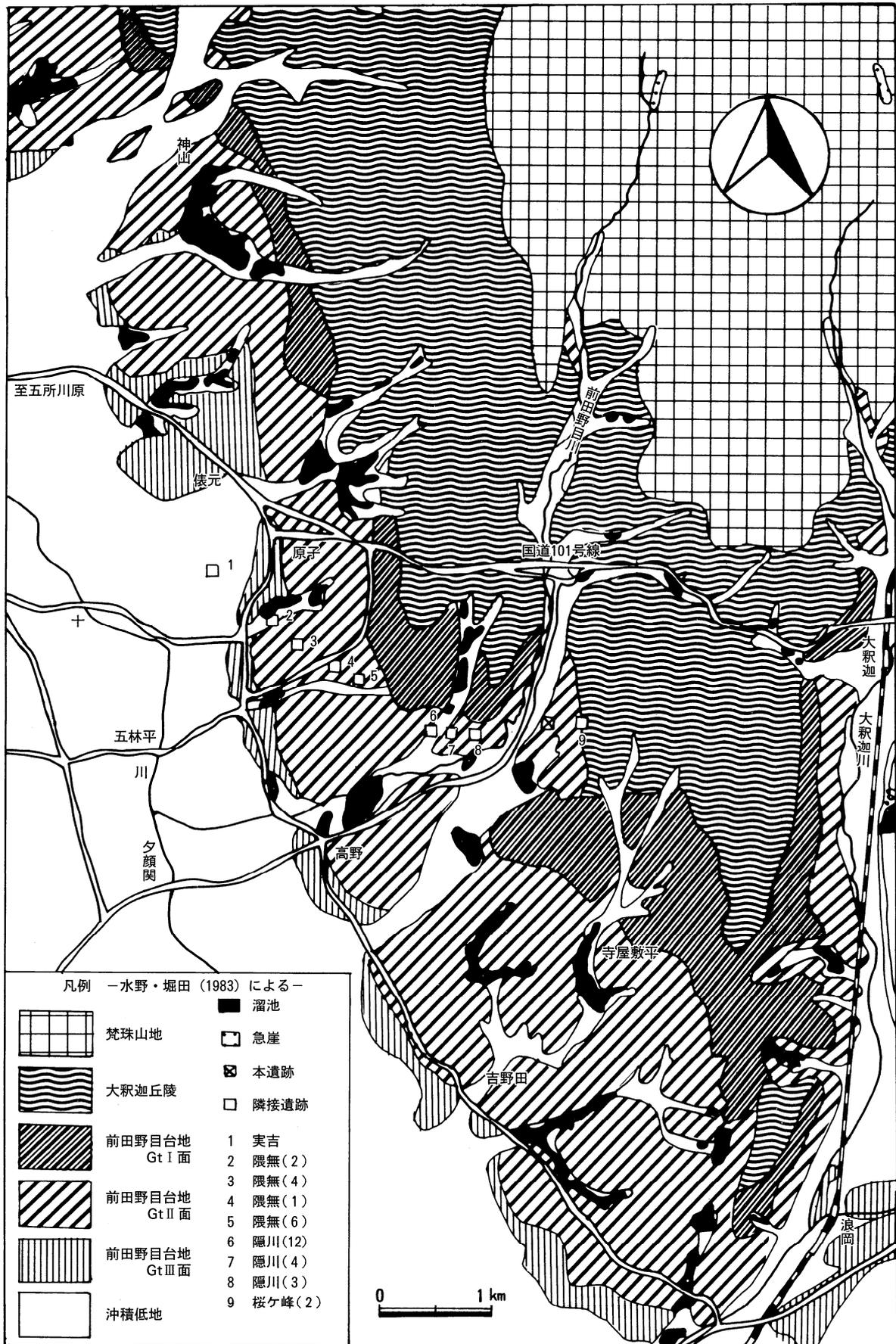


図4 五所川原市七和地域の地形分類図

2 周辺の地質及び遺跡の土層

本遺跡を含む津軽山地南部の地質構造は、馬ノ神山ドームに大きく影響されている。従って、堆積岩では馬ノ神山付近に見られる新第三系中新統の長根層が最も古く、ここから周囲へ離れるにつれ、順次新しい新生界が出現する。すなわち、中新統の馬ノ神山層・源八森層・不動ノ滝層、更新統の大釈迦層・鶴ヶ坂層・前田野目層である。なお、馬ノ神山ドームの東半3分の1ほどは、津軽山地分水嶺のすぐ東側にあつて、それとほぼ並行して延びる津軽断層によって切られており、これより東には更新世以降の新しい地層が堆積している。岩佐（1962）によれば、津軽断層は、三厩湾より大釈迦に抜ける延長約50kmの衝状性逆断層で、その最大落差は津軽山地中央部付近で1000mにも及ぶという。

本遺跡の基盤層は、分布が前田野目台地のそれと概ね重なる前田野目層である。本層の模式地は前田野目川下流一帯で、岩井（1965）によれば、模式地付近では鶴ヶ坂層を不整合におおい、灰色の浮石質砂岩、青灰色シルト岩及び細円礫等からなり、最上部は黄褐色の浮石質火山灰および同色のローム質粘土よりなるという。シルト岩層中には泥炭の薄層（30～50cm）を2枚挟在している。全体的に津軽盆地の中心に向かって3°前後の傾斜をなしているが、最下部のものは局部的だが、10～5°傾斜しているのも見られるという。

本遺跡周辺に分布する、前田野目層以外の新生界の層相等は下の通りである（岩井，1965；北村・岩井・多田，1972；岩井・沢田・大久保，1983；箕浦・小菅・柴・根本・山口，1998）。

沖積低地堆積物（泥・砂）……十川・浪岡川等によって供給された泥や砂で、津軽平野を構成する完新統である。

沖積低地堆積物（砂・礫）……前田野目川・大釈迦川等、津軽山地の山間部を流れる小河川によって供給された砂や礫で、それら小河川沿いの谷底平野や前田野目台地周縁の津軽平野を構成する完新統である。

段丘堆積物……細～中円礫で、前田野目台地のGtⅢ面を構成する更新統である。

鶴ヶ坂層……中礫大の浮石を含んだ、淡灰色～紫灰色の浮石質～砂質凝灰岩である。全体的に塊状無層理で、主に火山砕屑流によって形成された鮮新統である。なお、村岡・高倉（1988）は、八甲田カルデラの形成に伴って噴出した2つの主な火砕流堆積物のうち、古い方を八甲田第1期とし、従来、鶴ヶ坂層と呼ばれた海底火砕流堆積物に対比し、その形成年代を、K-Ar法より65万年前の更新世としている。岩井（1965）も、本層からは化石が発見されず、時代決定は困難で、下位の大釈迦層と同じ構造運動に支配されることから、一応第三系として取扱っているにすぎない。

大釈迦層……主として中～粗粒砂岩からなり、細円礫岩およびシルト岩をしばしば挟在する。一般に下部はシルト岩が、上部では砂岩が優勢である。本層には軟体動物や有孔虫等の浅海性海棲動物化石が豊富に含まれ、大釈迦動物化石群として一般に知られている。従来は鮮新統であったが、根本ほか（1994）による浮遊性有孔虫の研究によれば中期更新統である。

不動ノ滝層……主として、塊状～微層理を示す暗灰色珪藻土質シルト岩からなり、前田野目川流域では葉理を示す細粒砂岩の斑点を含む。全体的に貧化石帯となっているが、珪質海綿のサガリテスがほとんど全ての部分に含まれていることから、中新統である。サガリテスは日本の中新統上部、特に油田地域の泥岩中に多産する。

源八森層……板状層理を示す黒色頁岩からなり、下位の馬ノ神山層より漸移する。サガリテスを普

遍的に含む中新統である。

馬ノ神山層…主として、硬質頁岩・縞状頁岩からなり、層厚変化の著しい凝灰岩（太田凝灰岩部層）を挟在する。この部層は、淡青緑色～白色ベントナイト質細粒～火山礫凝灰岩からなり、泥岩を挟む。また、金属鉱業事業団（1990）によって13.8±0.5及び13.9±1.2Ma、須崎・箕浦（1992）によって13.9±1.1Maの各K-Ar年代が報告されている。サガリテスを含む中新統である。

長根層……馬ノ神山山頂一帯に分布し、淡緑色～灰褐色凝灰質砂岩・凝灰角礫岩からなる。流紋岩の熔岩を挟在する中新統である。

前田野目層・鶴ヶ坂層及び大釈迦層は、国道101号線沿い二ツ谷東方のメイプルビレッジ(南)北の露頭において、詳細に観察することができる。ここでは、大釈迦層がみかけ上西に30度前後傾斜しており、この上に塊状無層理の鶴ヶ坂層が不整合に重なっている。鶴ヶ坂層の上には前田野目層がほぼ水平な層理を有して重なり、層厚は数メートルで、この上にローム層を載せている。

桜ヶ峰（1）遺跡では、比高が12mに及ぶこと、東側の緩斜面がりんご園による削平を受けていること等により、平地のような一元的な堆積は見られない。ここでは、現場担当者が3箇所で層序を調べている。層序Aは調査区域のほぼ中間の丘陵斜面で、上部が現道によって削平されているため、ローム層からの確認である。層序Bは道路中央線の西端で、丘陵頂部の遺構・遺物集中部分の層序と基本的に対応するものとみられる。層序Cは調査区域西南端の斜面下で、ほとんどは丘陵上部からの土砂の流入による再堆積層である。これらを総合的に見て、下のような基本層序を設定した。

第Ⅰ層 黒褐色土 10YR2/3 密度やや密、硬度やや硬質、粘性弱。表土・耕作土。植物根多量。

第Ⅱ層 褐色土 10YR4/4 密度密、硬度中、粘性強。腐植土。B-Tm混入。炭化物（～φ5mm）微量混入。

第Ⅲ層 明褐色ローム 7.5YR5/6 密度密、硬度極めて硬質、粘性弱。淡黄色粒（2.5Y8/3）（～φ1mm）が下層になるほど多く混入。乾燥するとクラックが縦方向に入る。本層の上面が確認面となる。

第Ⅳ層 濃い黄粘土 2.5YR6/4 密度密、硬度硬質、粘性強。酸化鉄、マンガンが層状に堆積している部分あり。第Ⅲ層に近づくにつれ、細礫（～φ10mm）少量混入。

吾妻(1995)は、I m面には、上より黄褐色軽石質火山灰・褐色ローム・暗褐色シルト質火山灰（以上上部火山灰）、洞爺火山灰（Toya）および下部火山灰の5層が模式的に載るとしている。このうち、津軽半島南部によく分布する黄褐色軽石質火山灰は、火山ガラスの屈折率から十和田八戸テフラ（To-HP）に対比される可能性が大きいという。To-HPは、いわゆる八戸火山灰であり、その降下年代は12000～13000年前である。また、上部火山灰と下部火山灰を区切る、白色で細粒のToyaは、北海道の洞爺湖を給源とする広域火山灰で、層厚は20cm前後である。町田・新井（1992）は、Toyaの噴出年代を10～13万年前としている。

本遺跡一帯はI m面に相当するとみられることから、それら5層の火山灰等を基本的に載せていることになる。第Ⅲ層は径1mm以下の淡黄色粒を下ほど多く含み、To-HPに対比されるとみられる。褐色ローム・暗褐色シルト質火山灰、洞爺火山灰および下部火山灰の4層は確認できなかった。なお、第Ⅳ層は、層相から基盤の更新統前田野目層に比定されるとみられる。

引用・参考文献

- 岩佐三郎（1962）青森県津軽地方の含油第三系とその構造発達史について．石油技術協会誌，27，p. 197-231.
- 小貫義男・三位秀夫・島田昱郎・竹内貞子・石田琢二・齋藤常正（1963）青森県津軽十三湖地域の沖積層．東北大地質古生物研邦報，58，p. 1-36.
- 岩井武彦（1965）青森県津軽盆地周辺に発達する新生界の地質学的並びに古生物学的研究．弘大教育学部紀要，14，p. 85-155.
- 北村信・岩井武彦・多田元彦（1972）青森県の新第三系．青森県の地質，p. 5-70，青森県．
- 中川久夫（1972）青森県の第四系．青森県の地質，p. 71-120，青森県．
- 梅津正倫（1976）津軽平野の沖積世における地形発達史．地理学評論，49，p. 714-735.
- 角田清美（1978）津軽屏風山砂丘地帯の地形について．東北地理，30，p. 15-23.
- 青森県農林部土地改良第一課（1983）土地分類基本調査「青森西部」．
- 日本の地質『東北地方』編集委員会（1989）日本の地質2 東北地方．共立出版，338p.
- 箕浦幸治・中谷周（1990）津軽十三湖及び周辺湖沼の成り立ち．地質学論集，36，p. 71-87.
- 須崎俊秋・箕浦幸治（1992）青森地域上部新世界の層序と古地理．地質学論集，37，p. 25-37.
- 町田 洋・新井房夫（1992）火山灰アトラス-日本列島とその周辺．東大出版会，210p.
- 梅津正倫（1994）沖積低地の古環境学．古今書院，270p.
- 吾妻 崇（1995）変動地形からみた津軽半島の地形発達史．第四紀研究，34，p. 75-89.
- 日本第四紀学会第四紀露頭集編集委員会（1996）第四紀露頭集-日本のテフラ．日本第四紀学会，352 p.
- 青森県教育委員会（1997）桜ヶ峰（2）遺跡．青森県埋蔵文化財調査報告書第208集，47p.
- 箕浦幸治・小菅正裕・柴 正敏・根本直樹・山口義伸（1998）青森県の地質．青森県，207p.
- 犬走須恵器窯跡発掘調査団・五所川原市教育委員会（1998）犬走須恵器窯跡発掘調査報告書．五所川原市埋蔵文化財調査報告書第21集，170p.

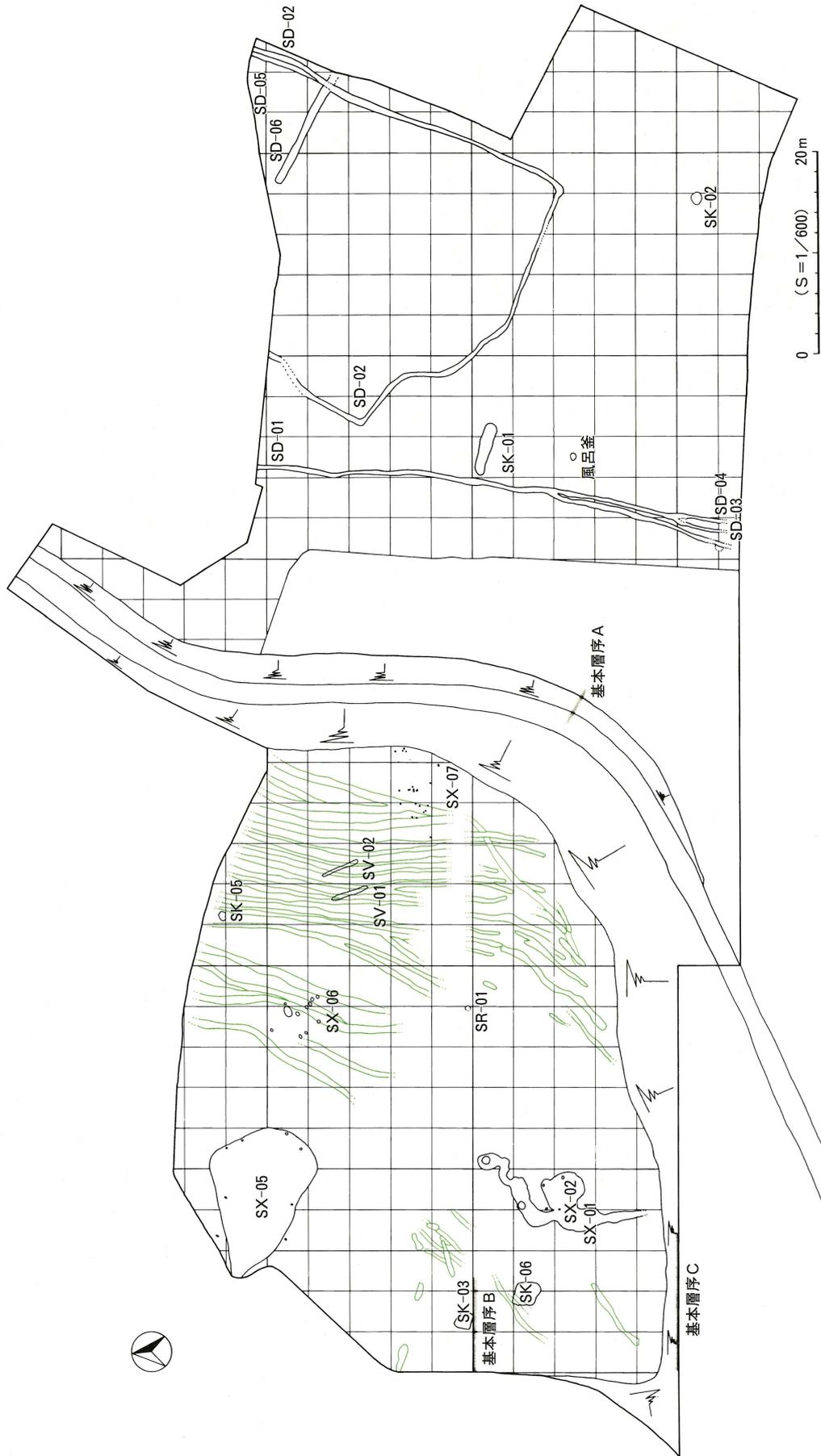


図7 遺構配置図

第IV章 検出遺構と出土遺物

第1節 検出遺構

今回の調査で検出された遺構は、土器埋設遺構1基、溝状土坑2基、土坑5基、溝跡6条、道跡、性格不明遺構5基で、縄文時代、古代～近世に属するものである。その他、縄文時代の遺物集中地点が1箇所検出されているが、第2・3節で述べることとする。以下各遺構毎に概要を記述する。

1 土器埋設遺構

第1号土器埋設遺構 (SR-01) (図8)

〔位置・確認〕 J-113・114グリッドの緩斜面上に位置する。第Ⅲ層上面で一部折り重なる土器の輪郭を確認した。

〔重複〕 なし。

〔規模と形状〕 掘り方は長径50cm、短径35cmの楕円形を呈し、基本層序第Ⅲ層内に、土器より大きめに掘り込まれている。掘り方底面はほぼ平坦で、最低面は標高72.57m、土器の最低面は同72.67mである。

〔堆積土〕 土器内堆積土は3層に分層されたが、土器自体が南側斜面下方に流れるように検出されているため、判然としない。掘り方内部は1層である。

〔出土土器〕 出土した土器は、口縁部から底部まで存在するが、欠失部分もあるため推定復元に留まった。口縁部は結節回転文が横位に施文される。口縁下部に深めの側面圧痕を有する隆帯が巡らされている。胴部には節の粗い縄文が器面全体に縦・斜位に施文される。原体は単節RLか？。底部は上げ底気味に作られている。胎土には繊維が多量に混入されている。焼成はやや軟質で器壁は表面が比較的脆いが、内面はよく磨かれている。器厚は1.5～2cmと比較的厚い。器高は少なくとも50cmを越えるものと思われる。口縁下部に補修孔を有する。

〔小結〕 円筒下層b式に比定される土器と思われる。前述したように、土器破片が斜面下方に流れるように検出されているため、正立か斜位に埋設されていたかについては不明な点が多い。底部はやや傾いた状態で出土している。

本調査区からは縄文時代前期と特定できる遺構は、他には検出されていない。農道を挟んで対峙する桜ヶ峰(2)遺跡からも同時期の遺構は検出されておらず、土器埋設遺構を墓域として捉えれば、居住域は調査区外北側の丘陵付近にあったものと推察される。

(笹森)

2 溝状土坑

溝状土坑は2基検出された。以下遺構番号順に記述する。

第1号溝状土坑（SV-01）（図9）

〔位置・確認〕 G・H-116グリッドに位置する。第Ⅲ層上面で褐色土の落ち込みとして確認した。

〔重複〕 なし。

〔平面形・規模〕 平面形はほぼ直線的で、両端部がやや狭まる溝状を呈する。規模は開口部で長軸3m80cm、短軸28cm、底面で長軸4m08cm、短軸7cm、確認面からの深さは最大1m19cmを計測する。基本層序第Ⅲ・Ⅳ層を掘り込んで構築されている。長軸断面形態は開口部から底部にかけて南側がオーバーハングし、北側が壁面中位で最大の膨らみを持つ箱形を呈する。底部はほぼ平坦であるが、両端部に向かって緩やかな傾斜を持ち、浅い掘り込みを有する。長軸方向はN-10°-Wで、等高線となす角度は78°である。

〔堆積土〕 4層に分層された。覆土第1層は基本層序第Ⅱb層に相当する。ほぼ自然堆積の様相を呈する。

〔出土遺物〕 遺物は出土していない。

〔時期〕 詳細な時期は不明であるが、形状・堆積土の状況から縄文時代の所産と思われる。

第2号溝状土坑（SV-02）（図9）

〔位置・確認〕 G・H-117グリッドに位置する。第Ⅲ層上面で暗褐色土の落ち込みとして確認した。

〔重複〕 なし。

〔平面形・規模〕 平面形はほぼ直線的で、両端部がやや丸みを帯びる溝状を呈する。規模は開口部で長軸3m80cm、短軸30cm、底面で長軸4m34cm、短軸20cm、確認面からの深さは最大93cmを計測する。基本層序第Ⅲ・Ⅳ層を掘り込んで構築されている。長軸断面形態は開口部から底部にかけて両端がオーバーハングする箱形を呈する。底部は起伏が認められ、中央部から両端部に向かって傾斜を有する。長軸方向はN-16°-Wで、等高線となす角度は82°である。

〔堆積土〕 3層に分層された。ほぼ自然堆積の様相を呈する。

〔出土遺物〕 遺物は出土していない。

〔時期〕 詳細な時期は不明であるが、形状・堆積土の状況から縄文時代の所産と思われる。

第1・2号溝状土坑は、ほぼ等高線に直交するように平行して2基検出されている。遺構間の距離は確認面で2m10cm～2m32cmを測る。前述したように両端部以外、平面形態に大きな差異は認められない。深さや堆積土の状況も類似しており、同時期に構築・使用・廃棄されたものと考えられる。機能としては縄文時代の陥し穴の可能性が高い。本調査区は縄文時代の一時期、狩猟域として利用されていたものと推察される。

（笹森）

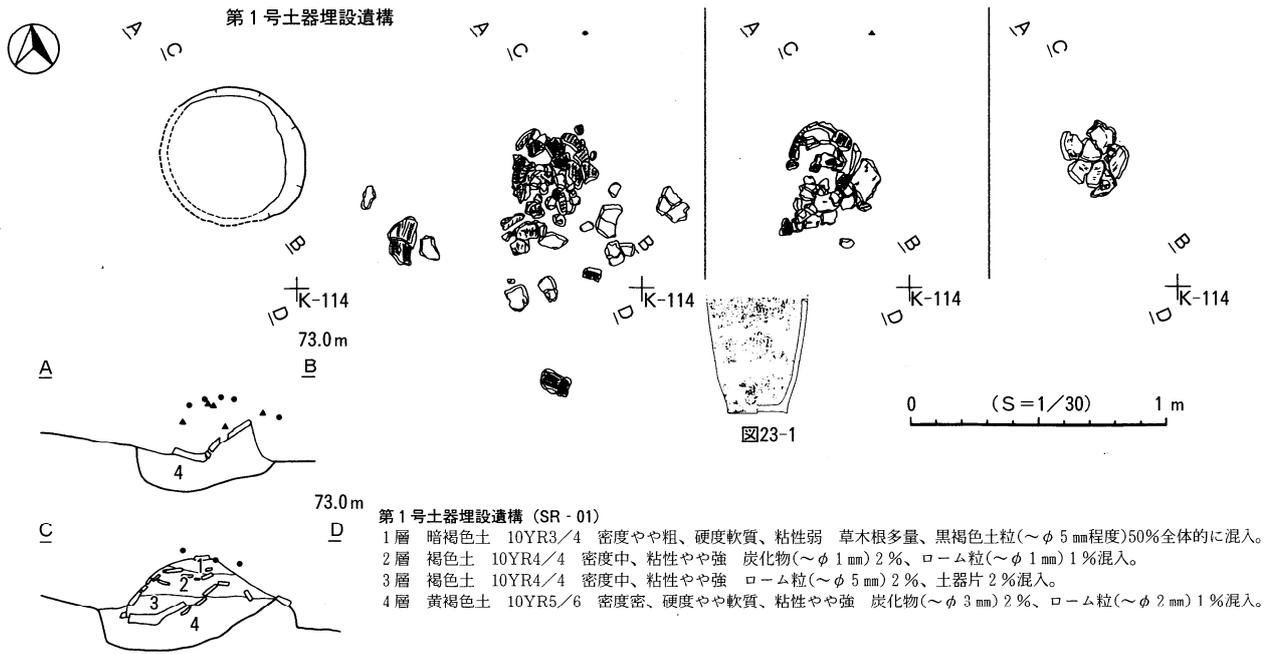
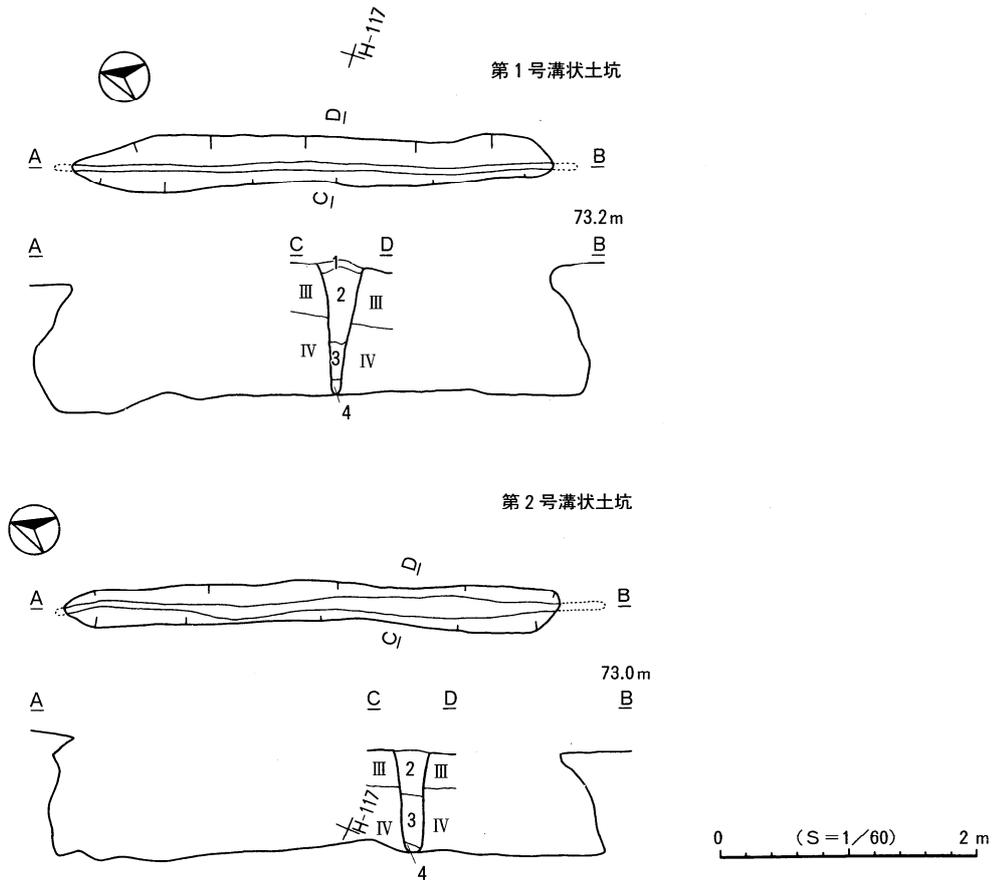


図8 第1号土器埋設遺構



第1・2号溝状土坑 (SV-01・02)

- 1層 基本層序第II b層に相当。
- 2層 暗褐色土 10YR3/3 基本層序第III層に伴う浮石(〜φ 10mm)中量混入。しまりなく脆い。ブロック状に堆積。
- 3層 黒褐色土 10YR3/2 基本層序第III層に伴う浮石(〜φ 10mm)微量混入。しまりやや有、粘性やや有。層状に堆積。
- 4層 黄褐色土 10YR5/6 壁面(基本層序第III層)の崩落土と考えられる。

図9 第1・2号溝状土坑

3 土坑

土坑は計5基検出された。以下遺構番号順に記述するが、第4号土坑は倒木痕と思われるため欠番とした。

第1号土坑（SK-01）（図10）

〔位置・確認〕 K-127・128グリッドに位置する。第Ⅲ層上面で黒色及び褐色土の落ち込みとして確認した。

〔重複〕 なし。

〔平面形・規模〕 平面形は細長い楕円形を呈する。長軸5 m23cm、短軸1 m26cm、確認面からの深さは38cmを計測する。

〔壁・底面〕 壁は底面より緩やかな傾斜を持ちながら立ち上がる。底面は全体的にやや丸みを帯びる。

〔堆積土〕 3層に分層された。覆土第1層中に部分的に白頭山火山灰（B-Tm）を含んでいる。

〔出土遺物〕 東端覆土第1層より炭化材とB-Tmが、西側覆土第2層よりB-Tmがブロック状に出土している。

〔小結〕 覆土中の火山灰より、10世紀初頭以前に構築された土坑と思われるが、用途・性格等については不明である。

第2号土坑（SK-02）（図10）

〔位置・確認〕 P-133・134グリッドに位置する。第Ⅲ層上面で黒色土の落ち込みとして確認した。

〔重複〕 なし。

〔平面形・規模〕 平面形は円形を呈する。長径1 m22cm、短径1 m02cm、確認面からの深さは63cmを計測する。

〔壁・底面〕 壁は底面からやや急に立ち上がる。底面はやや起伏が認められ、中央部から端部にかけて傾斜を有する。

〔堆積土〕 3層に分層された。

〔出土遺物〕 遺物は出土していない。

〔小結〕 時期決定の根拠に欠け不明である。

第3号土坑（SK-03）（図10）

〔位置・確認〕 J・K-106グリッドに位置する。第Ⅲ層上面で暗褐色土の落ち込みとして確認した。

〔重複〕 なし。

〔平面形・規模〕 平面形は不整形を呈する。長軸1 m68cm、短軸1 m50cm、確認面からの深さは57cmを計測する。

〔壁・底面〕 壁は底面から緩やかに立ち上がる。底面はほぼ平坦であるが、中央部がやや盛り上がり、端部に向けて緩やかに傾斜している。

〔堆積土〕 8層に分層された。人為堆積の様相を呈する。

[出土遺物] 覆土中より礫が1点出土している。

[小結] 時期決定の根拠に欠け不明である。

第5号土坑 (SK-05) (図10)

[位置・確認] D-116グリッドに位置する。第層Ⅲ上面で暗褐色土の落ち込みとして確認した。

[重複] なし。

[平面形・規模] 平面形は不整楕円形を呈する。長軸95cm、短軸69cm、確認面からの深さは34cmを計測する。

[壁・底面] 南北壁はやや急に、東西壁は緩やかに底面から立ち上がる。底面は中央部がやや盛り上がり、東側に傾斜している。

[堆積土] 3層に分層された。自然堆積の様相を呈する。

[出土遺物] 遺物は出土していない。

[小結] 時期決定の根拠に欠け不明である。遺物集中地点に近接しており、縄文時代の土坑の可能性もあるが判然としない。

第6号土坑 (SK-06) (図10)

[位置・確認] K・L-106・107グリッドに位置する。第Ⅲ層上面で褐色土の落ち込みとして確認した。

[重複] なし。

[平面形・規模] 平面形は不整方形を呈する。長軸250cm、短軸232cm、確認面からの深さは最大42cmを計測する。

[壁・底面] 壁は底面からどの方向にも膨らみを持ちながらやや急に立ち上がる。底面は中央に向けて緩やかに傾斜している。

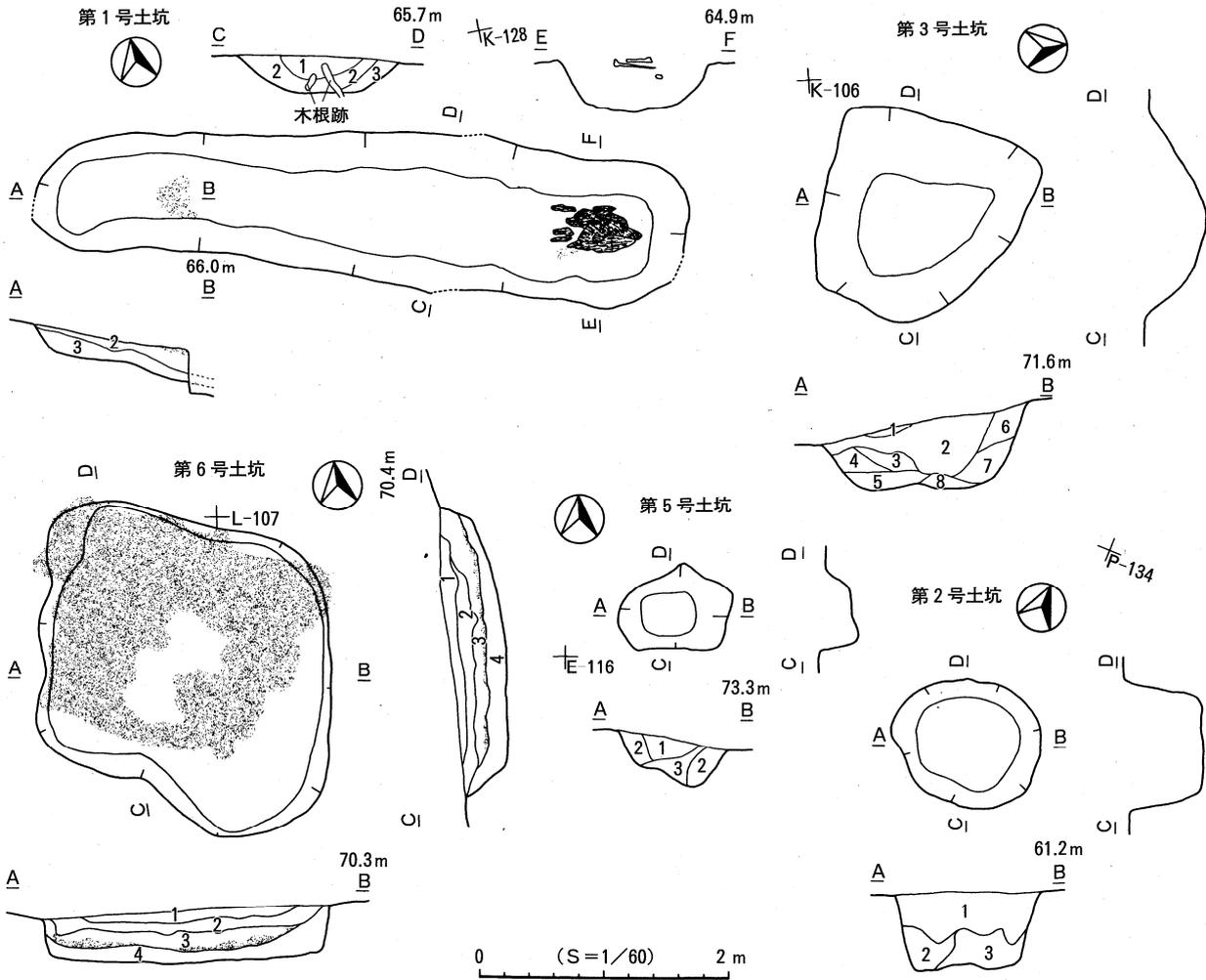
[堆積土] 4層に分層された。どの層にも炭化物を含み、下層に行くほど粒が大きくなる。第3層下部に白頭山火山灰 (B-Tm) をレンズ状に含んでいる。

[出土遺物] 覆土中より土師器の細片が出土しているが、図示できるものは皆無であった。

[小結] 覆土中の火山灰より、B-Tm降下前、9世紀末～10世紀初頭に構築・使用・廃棄された土坑と思われる。壁や底面に明確に焼けた痕跡は確認できないが、平面形状及び覆土の状況より、焼成遺構の可能性も考えられる。

(笹森)

桜ヶ峰(1)遺跡



第1号土坑 (SK - 01)

- 1層 黒色土 10YR1.7/1 密度中、硬度やや軟質、粘性やや強 炭化物(φ 3mm) 2%、ローム粒(φ 2mm) 1%混入。
- 2層 褐色土 10YR4/4 密度中、硬度やや軟質、粘性やや強 炭化物(φ 3mm) 2%、ローム粒(φ 3mm) 2%混入。下方ほど暗褐色土(10YR3/4)に漸移する。
- 3層 黒褐色土 10YR2/3 密度やや密、硬度中、粘性やや強 炭化物(φ 4mm) 1%、ローム粒(φ 15mm) 2%混入。

第2号土坑 (SK - 02)

- 1層 黒色土 10YR2/1 密度やや密、硬度やや硬質、粘性やや強 ローム粒(φ 2mm) 1%混入。砂質シルト。
- 2層 黒褐色土 10YR3/2 密度極めて密、硬度極めて硬質、粘性やや強 ローム粒(φ 2mm) 1%、焼土粒(φ 2mm) 1%混入。
- 3層 黒褐色土 10YR2/3 密度極めて密、硬度極めて硬質、粘性やや強 ローム粒(φ 4mm) 3%混入。

第3号土坑 (SK - 03)

- 1層 暗褐色土 10YR3/4 密度中、硬度やや硬質、粘性やや強 炭化物(φ 5mm) 3%、炭化物(φ 3mm) 2%混入。黒褐色土(10YR2/2)50%混入。
- 2層 褐色土 10YR4/6 密度中、硬度中、粘性やや強 炭化物(φ 5mm) 3%混入。
- 3層 褐色土 10YR4/4 密度中、酵素やや硬質、粘性強 炭化物(φ 2mm) 1%混入。
- 4層 黄褐色土 10YR5/6 密度中、硬度中、粘性やや強 炭化物(φ 1mm) 1%混入。
- 5層 黄褐色土 10YR5/8 密度やや密、硬度硬質、粘性弱 ローム粒(φ 2mm) 1%混入。
- 6層 褐色土 10YR4/4 密度やや密、硬度中、粘性強 炭化物(φ 5mm) 1%混入。3層よりやや明るい。
- 7層 褐色土 10YR4/6 密度やや密、硬度中、粘性強 炭化物(φ 5mm) 1%混入。2層よりやや暗い。
- 8層 褐色土 10YR4/6 密度中、硬度軟質、粘性強 ローム粒(φ 1mm) 1%混入。2層よりやや暗い。

第5号土坑 (SK - 05)

- 1層 暗褐色土 10YR3/4 密度やや密、硬度やや硬質、粘性弱 炭化物(φ 3mm) 2%、ローム粒(φ 10mm) 3%混入。
- 2層 褐色土 10YR4/6 密度やや粗、粘性やや強 炭化物(φ 2mm) 1%、ローム粒(φ 5mm) 3%混入。
- 3層 褐色土 10YR4/4 密度中、粘性やや強 炭化物(φ 2mm) 1%、ローム粒(φ 5mm) 5%混入。

第6号土坑 (SK - 06)

- 1層 褐色土 10YR4/4 密度密、粘性やや強 炭化物(φ 5mm) 2%、ローム粒(φ 1mm) 4%が全体に均質に混入。
- 2層 暗褐色土 10YR3/3 密度密、粘性やや強 炭化物(φ 1mm) 2%、ローム粒(φ 1mm) 4%混入。
- 3層 黒褐色土 10YR2/2 密度密、粘性強 炭化物(φ 12mm、下方ほど径が大きくなる) 4%、ローム粒(φ 1mm)全体に均質に混入。下層にB-Tm堆積。
- 4層 黒色土 10YR2/1 密度密、硬度中、粘性強 炭化物(φ 5mm) 5%、ローム粒(φ 2mm) 1%混入。暗褐色土(10YR3/3)が漸移的に混入。

図10 第1～3・5・6号土坑

4 溝跡

溝跡は計6条、全て調査区東側の緩斜面上から検出されている。以下遺構番号順に記述する。

第1号溝跡 (SD-01) (図11)

[位置] 調査区東部の緩斜面、E-127～Q-125グリッドにかけて位置する。

[確認] 第Ⅲ層上面で黒色～黒褐色土の落ち込みとして確認した。

[重複] L・M-126・127グリッドで第3号溝跡と重複している。新旧関係は土層断面の観察より、本遺構が新しい。

[規模] 上面幅40～60cm、底面幅20～38cm、深さ14～60cmで、遺存状態は比較的良好。確認面は第Ⅲ層であるが、調査区際の土層断面から、基本層序第Ⅱ～Ⅲ層に掘り込まれていることがうかがえる。北側はE-127グリッド、南側はQ-125グリッドで調査区外に延びている。

[堆積土] 2～6層に分層された。ほぼ自然堆積の様相を呈する。

[壁断面・底面] 断面形態は逆台形状を呈する。壁は底面より80～85°の傾斜で全体的に急に立ち上がっている。溝底はほぼ平坦に作られている。I-127グリッドで溝底から深さ12cmの小ピットが1基検出されているが、本遺構に伴うものかどうかは不明である。

[出土遺物] 覆土中より土器片や礫が出土しているが、図示し得るものは皆無であった。

[小結] 時期決定の根拠に欠け不明な点が多いが、基本層序第Ⅱ層を掘り込んで構築されており、古代以降の所産と考えられる。

第2号溝跡 (SD-02) (図12・13・14)

[位置] 調査区中央部、F-129～M-133～E-136グリッドにかけて位置する。

[確認] 第Ⅲ層上面で黒色～暗褐色土の落ち込みとして確認した。

[重複] G-135グリッド付近で第5号溝跡と重複する。土層断面の観察から、新旧関係は本遺構が新しい。また、G-136グリッドで第6号溝跡と重複しており、新旧関係は土層断面から本遺構が新しい。

[規模] 上面幅50～80cm、底面幅28～62cm、深さ16～44cmで、遺存状態は比較的良好。一部蛇行しながらも、H-128及びM-134グリッドではほぼ直角に曲がり、区画を意識するように構築されている様子がうかがえる。F-130及びE-137グリッドで各々北側調査区外に延びている。

[堆積土] 1～2層に分層された。自然堆積の様相を呈する。

[壁断面・底面] 断面形態は地点により様々で、箱形・逆蒲鉾形・逆台形状を呈する。壁は底面より75～80°傾斜で立ち上がる。溝底はほぼ平坦に作られ、M-133グリッドで溝底から深さ16cmの小ピットが1基検出されている。

[出土遺物] 覆土中から土器片や礫が出土しているが、図示し得るものは皆無であった。

[小結] 時期決定の根拠に欠け不明な点が多いが、古代以降の所産と考えられる。

第3号溝跡 (SD-03) (図11)

[位置] L-126～Q-125グリッドにかけて位置する。

[確認] 第Ⅲ層上面で暗褐色～黒褐色土の落ち込みとして確認した。

[重複] L・M-126グリッドで第1号溝跡と、P-125・126グリッドで第4号溝跡と重複している。土層断面の観察から第1号溝跡より古く、第4号溝跡との関係は不明である。

[規模] 上面幅20～52cm、底面幅12～40cm、深さ15～35cmで、遺存状態は比較的良好。Q-125グリッドで南側調査区外に延びる。

[堆積土] 1～3層に分層された。ほぼ自然堆積の様相を呈する。

[壁断面・底面] 壁は底面より65～80°の傾斜で立ち上がる。溝底には全体的に起伏が認められるが、溝内にピット等の付帯施設は検出されなかった。

[出土遺物] 土器片が出土しているが、細片のため図示することは出来なかった。

[小結] 時期決定の根拠に欠け不明な点が多いが、古代以降の所産と考えられる。

第4号溝跡（SD-04）（図11）

[位置] O・P-125・126グリッドにかけて位置する。

[確認] 第Ⅲ層上面で黒褐色土の落ち込みとして確認した。

[重複] P・Q-125・126グリッドで第3号溝跡と重複している。新旧関係は不明である。

[規模] 上面幅30～50cm、底面幅8～22cm、深さ25～32cmで、遺存状態は比較的良好。Q-125グリッドで南側調査区外に延びる。

[堆積土] 1層である。自然堆積の様相を呈する。

[壁断面・底面] 断面形態は鍋状を呈し、壁は底面より60～70°の傾斜で立ち上がる。溝底はほぼ平坦に作られ、溝内にピット等の付帯施設は検出されなかった。

[出土遺物] 覆土中より土器片や剥片が出土しているが、図示し得る遺物は皆無であった。

[小結] 時期決定の根拠に欠け不明な点が多いが、古代以降の所産と考えられる。

第5号溝跡（SD-05）（図14）

[位置] 調査区東部、E～G-136・137グリッドに位置する。第2号溝跡に平行して検出されている。

[確認] 第Ⅲ層上面でいぶい黄褐色土の落ち込みとして確認した。

[重複] E～G-136・137グリッドにかけて第2号溝跡と重複する。土層断面の観察から、新旧関係は本遺構が古い。

[規模] 東側が第2号溝跡に切られている。推定上面幅62cm、底面幅44cm、深さ20cmで、残存部については遺存状態は比較的良好。E-137グリッドで北側調査区外に延びている。

[堆積土] 3層に分層された。自然堆積の様相を呈する。

[壁断面・底面] 断面形態は鍋状を呈し、西壁は底面より75～80°の傾斜で立ち上がる。溝底はほぼ平坦に作られ、溝内にピット等の付帯施設は検出されなかった。

[出土遺物] 覆土中より土器の細片が数点、礫が7点出土している。図示し得るような遺物は皆無である。

[小結] 時期決定の根拠に欠け不明な点が多いが、構築時期は古代以降と考えられる。

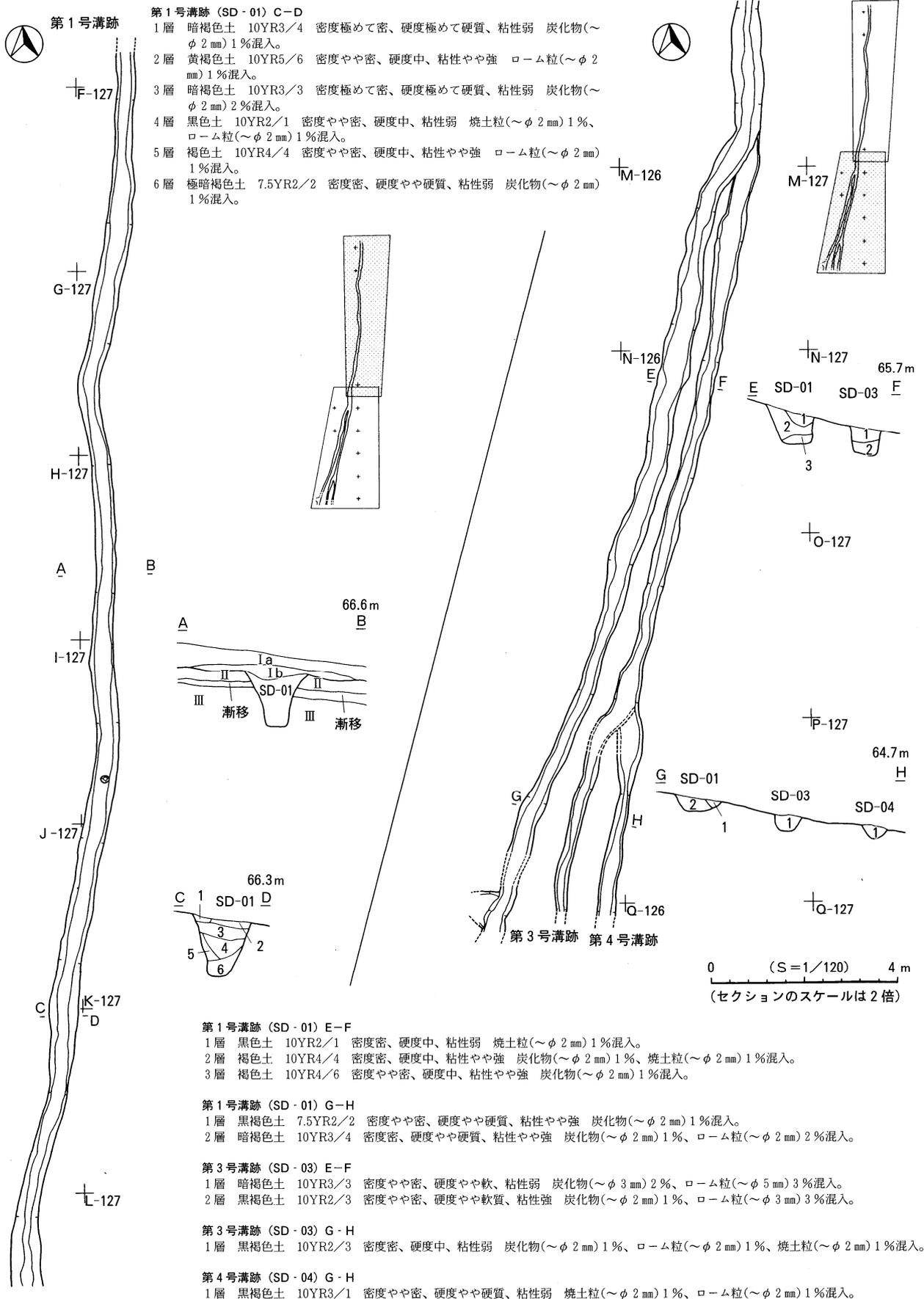
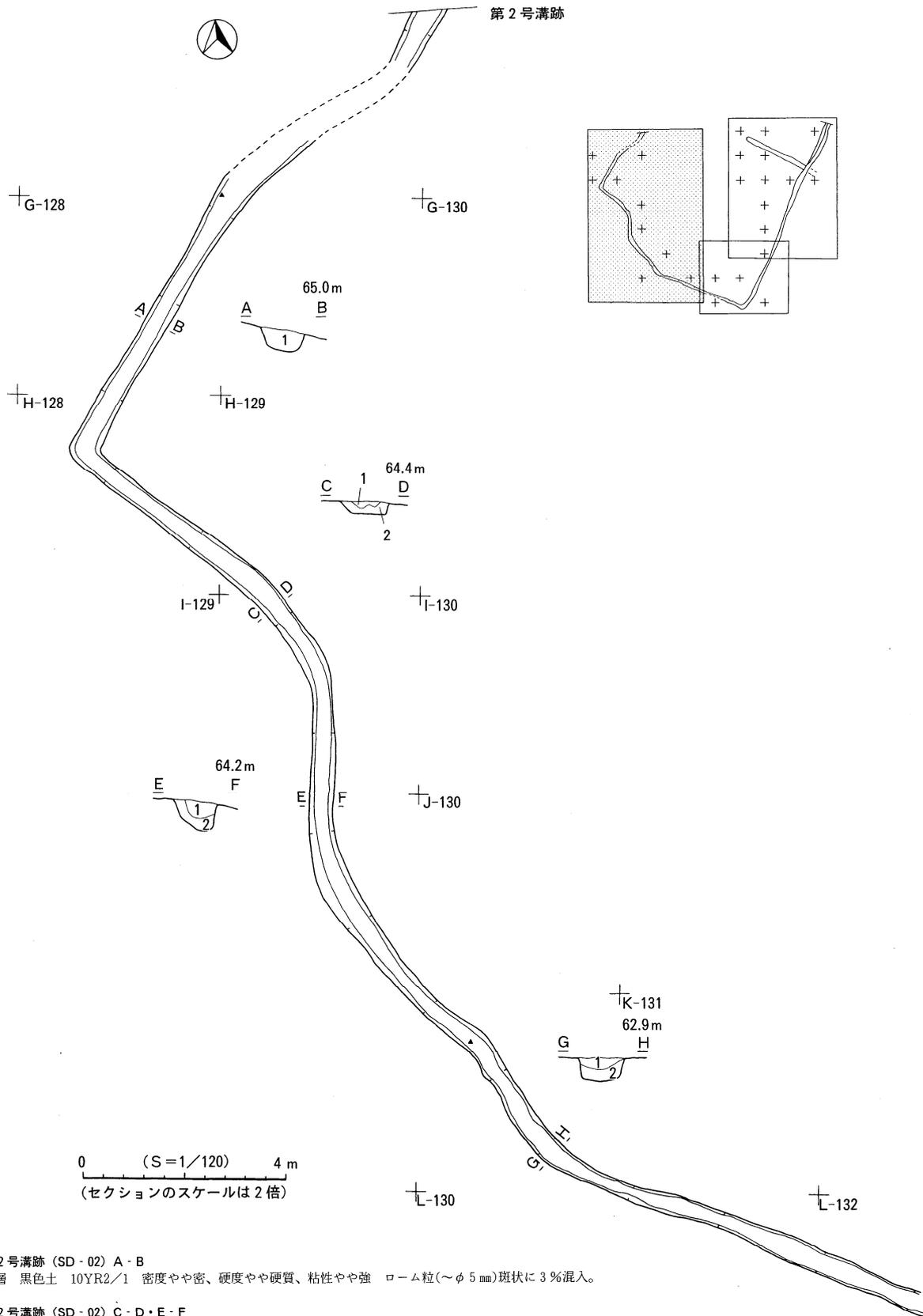


図11 第1・3・4号溝跡



第2号溝跡 (SD-02) A-B

1層 黒色土 10YR2/1 密度やや密、硬度やや硬質、粘性やや強 ローム粒(～φ 5mm)斑状に3%混入。

第2号溝跡 (SD-02) C-D・E-F

1層 黒褐色土 10YR3/2 密度密、硬度やや硬質、粘性やや強 炭化物粒(～φ 3mm)1%、ローム粒(～φ 2mm)2%混入。
 2層 褐色土 10YR3/4 密度中、硬度やや軟質、粘性やや強 1層の黒褐色土との混合土。

第2号溝跡 (SD-02) G-H

1層 黒褐色土 10YR3/2 密度密、硬度やや硬質、粘性やや強 炭化物(～φ 3mm)1%、ローム粒(～φ 4mm)1%混入。
 2層 黒褐色土 10YR2/3 密度密、硬度やや硬質、粘性やや強 炭化物(～φ 3mm)1%、ローム粒(～φ 10mm)5%混入。

図12 第2号溝跡1

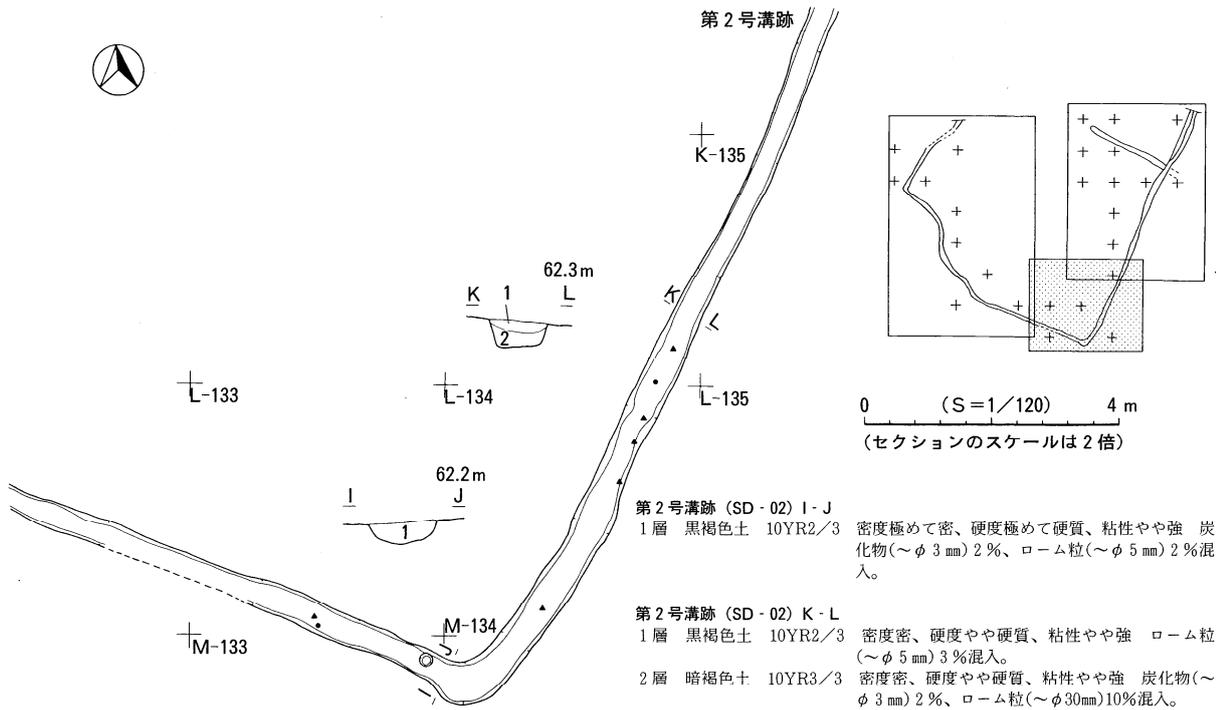


図13 第2号溝跡2

第6号溝跡 (SD-06) (図14)

[位置] 調査区東部、F-134〜G-137グリッドにかけて位置する。

[確認] 第Ⅲ層上面で黒色土の落ち込みとして確認した。

[重複] G-136グリッドで第2号溝跡とほぼ直交する形で重複している。土層断面の観察から、新旧関係は本遺構が古い。

[規模] 上面幅58〜80cm、底面幅50〜68cm、深さ17〜20cmで、遺存状態は比較的良好。西側はF-134グリッドで終結し、東側はG-137グリッドで調査区外に延びている。

[堆積土] 2層に分層された。自然堆積の様相を呈する。

[壁断面・底面] 断面形態は箱形を呈し、壁は底面より70〜80°の傾斜で立ち上がる。溝底は一部起伏が認められるが、溝内にピット等の付帯施設は検出されなかった。

[出土遺物] 覆土中より礫が出土しているが、図示し得るような遺物ではない。

[小結] 時期決定の根拠に欠け不明な点が多いが、構築時期は古代以降と考えられる。

いずれの溝跡も重複しているが、土層断面の観察から、第3・4号溝跡は作り替えにより最終的に第1号溝跡になったものと、また、第5号溝跡も作り替えにより最終的に第2号溝跡になったものと考えられる。検出状況からは、一部に手を加えただけで、大々的な改修は行っていないことがうかがえる。溝跡の周辺からは建物跡などの施設は検出されなかったため、これらがどのような機能を有していたかについては不明である。また、堆積土の状況からは水が流れていた痕跡は明瞭には確認できなかったため、排水施設ということも積極的には考えられない。

(笹森)

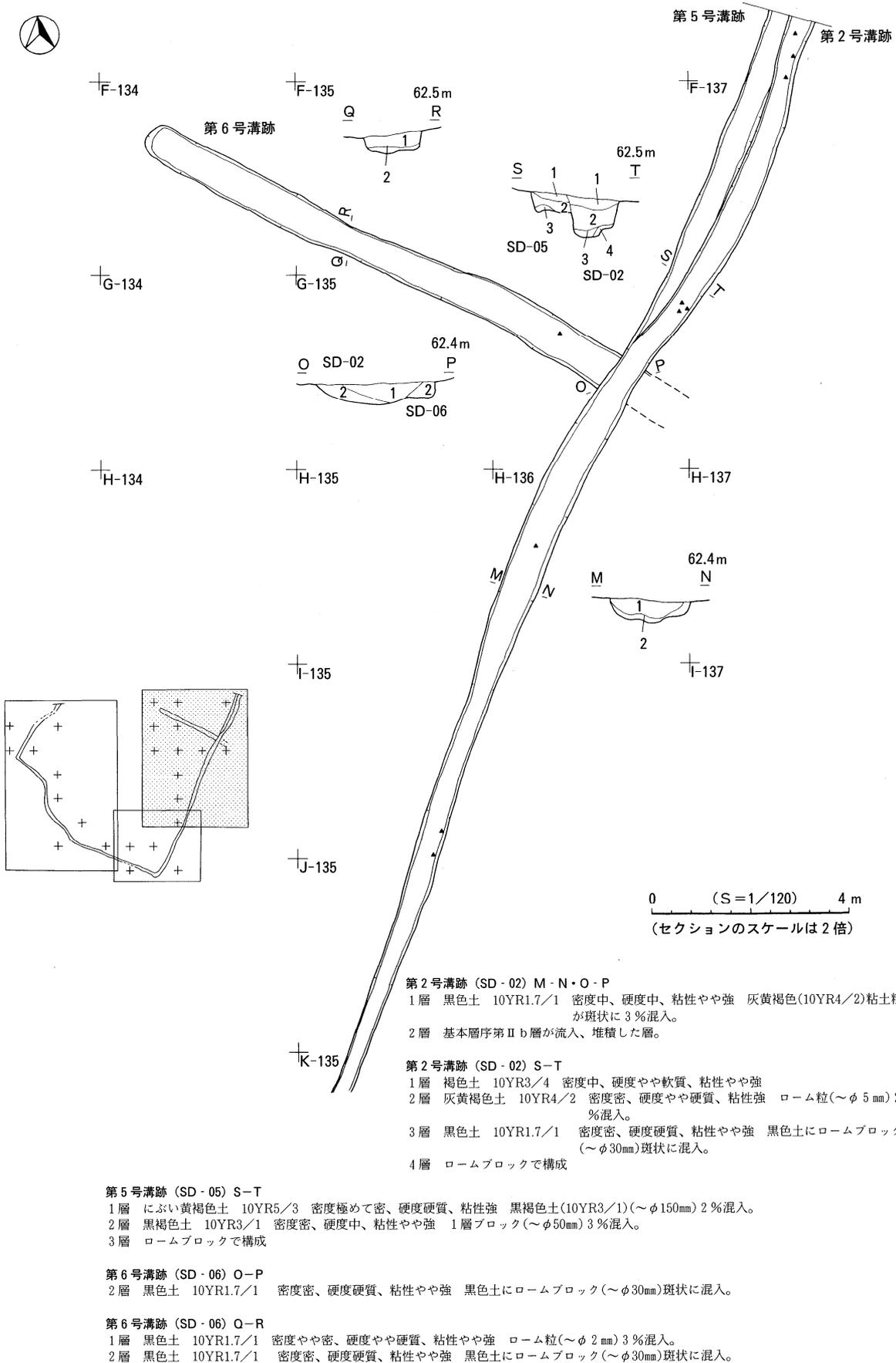
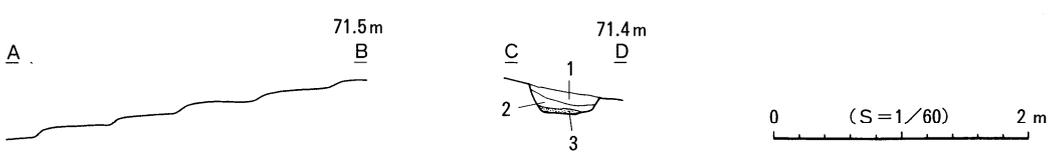
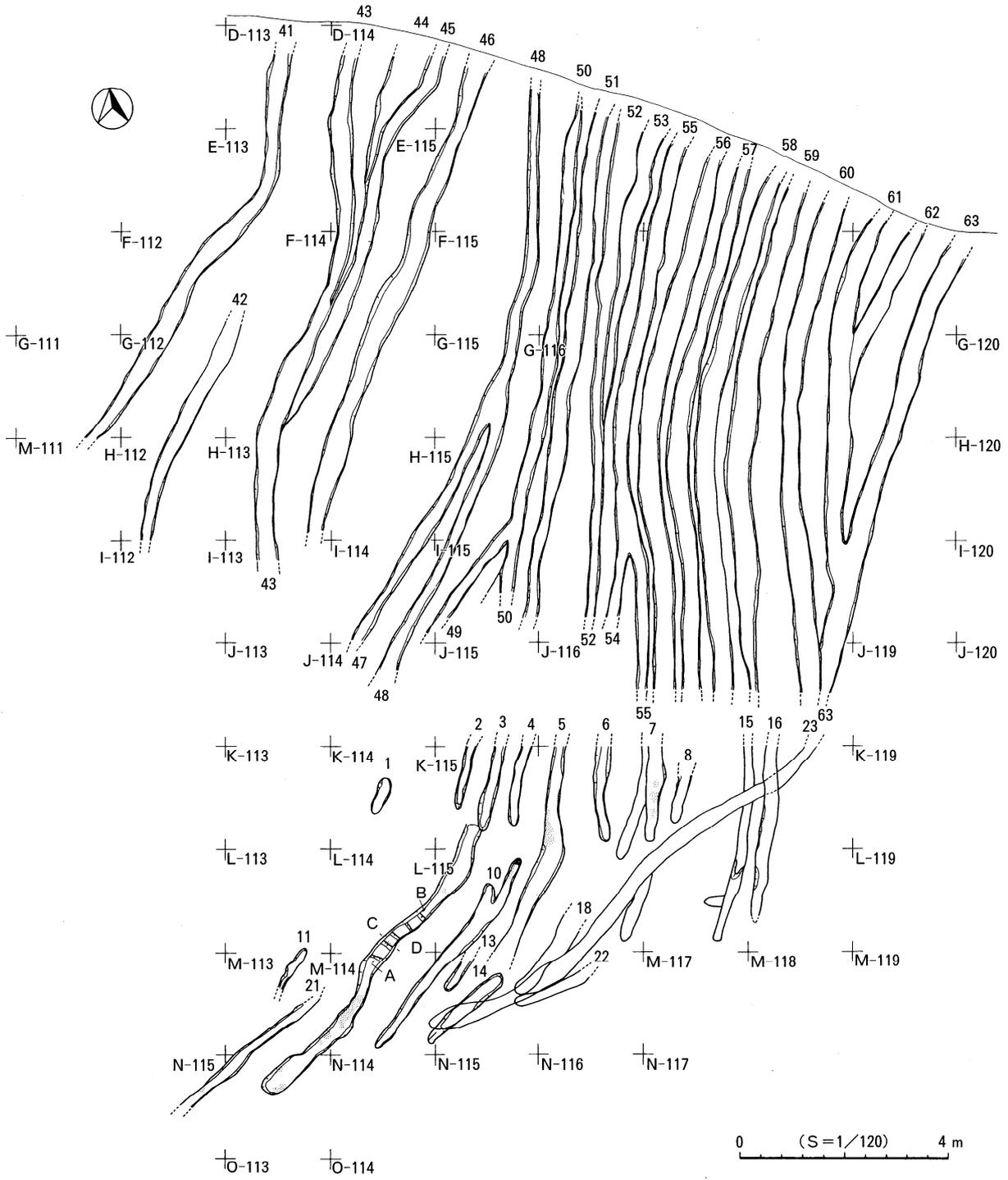


図14 第2・5・6号溝跡



第9号道跡 (SS-09)
 1層 黒褐色土 10YR2/2 密度やや密、硬度中、粘性やや弱
 2層 におい黄褐色土 10YR4/3 密度やや粗、硬度中、粘性中 ローム粒(〜φ30mm) 3%混入。
 3層 褐色土 10YR4/4 密度密、硬度極めて硬質、粘性弱 ローム粒(〜φ10mm) 2%、炭化物(〜φ1mm) 2%混入。硬化面

図15 道跡1

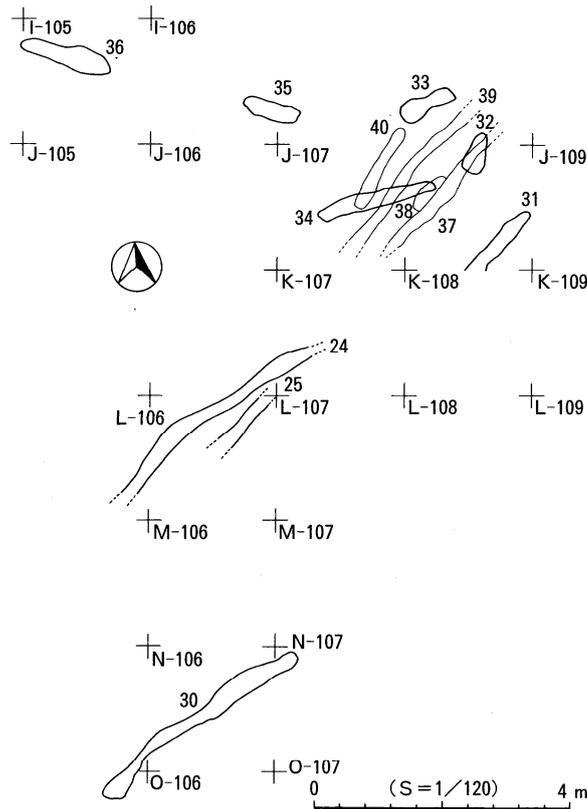


図16 道跡 2

5 道跡 (SS-01~63)(図15・16)

[位置] D～N-111～120・I～P-104～109グリッドに位置する。丘陵形態に沿うように存在する。

[確認] 表土除去の段階、基本層序第Ⅱ層上面で確認された。調査当初は畑に関連するものとして捉えていたが、調査が進むにつれ底面に硬化面が検出されるようになった。また第9号道跡のように階段状の底面が確認されたことから、掘り返されること無くなりかなりの期間この形態のまま存在したか、相当数の人の往来があったものと判断した。遺構の性格としては畑跡である可能性は残るが、確認された遺構自体は道跡として扱うこととした。隣接する桜ヶ峰（2）遺跡でも道跡が3条確認されている。

[重複] 道跡同士の重複は多く確認され、作り替えによるものと考えられる。また1面調査終了後、もう1面確認される個所も存在する。その際、軸方向は上面と異なる方向を示す場合が多い。

[規模] 最も長く確認されたもので直線距離23m、上面幅20～90cm、深さ1～18cmを測る。

[堆積土] 斜面上方に位置する北側では単一層だが、逆に下方では2層堆積している部分も存在する。

[壁断面・底面] 確認面からの掘り込みが少ないものは把握が困難であるが、断面形態は浅い皿形、もしくは逆台形を呈する。底面はほぼ平坦に構築されている。

[小結] 遺物の出土は見られなかったが、構築、廃絶時期は基本層序第Ⅱ層内に堆積している白頭山火山灰（B-Tm）の上面に硬化面が形成されていることから、少なくともB-Tm降下以降の構築と判断できる。なお、桜ヶ峰（2）遺跡では硬化面に蹄鉄痕が確認され、明治時代以降の所産とされている。

（浅田）

6 性格不明遺構

ここでは本調査区で確認された遺構の内、遺構の性格が判断困難であったものをまとめた。なお、SX-03はSK-06へ名称変更を行い、SX-04は遺物集中地点であることから、後述する「第3節 遺物出土状況」で記述しており欠番となっている。

第1号性格不明遺構 (SX-01) (図17)

〔位置〕 K～O-108～110グリッドに位置する。斜面上部のK-110グリッドから南西方向に緩やかに蛇行する。第2号性格不明遺構の北側から西側に回りこみ、M-109グリッドで接する。そのまま南側の斜面下方にはほぼ直線的に伸び、O-108グリッドで確認できなくなった。

〔確認〕 調査前の段階で既に現地表面の落ち込みが存在し、雪解けによる湧水のため地表面に水が染み出している状況であった。その後の降雨時も斜面上方からの水が流れる筋となっていたため、排水用に表土除去の段階で結果的に覆土の掘り下げを行った。その際ピットの掘り込みを確認し、遺構として認定した。

〔重複〕 第2号性格不明遺構と接する状態にあるが、覆土が水の影響を受けて軟質になっており、重複関係を捉える事はできなかった。

〔規模〕 全長は直線距離で14m80cm、底面幅28～170cm、深さ1～50cm、比高差は280cmを測る。

〔堆積土〕 現地表面の段階で水による影響を受けていたため、表土から非常に軟質であった。表土を除去したところ、すぐに基本層序第IV層が確認される部分も存在したことから、基本的に表土層によって覆われていたものと思われる。

〔壁断面・底面〕 断面形態は浅い皿形を呈する。壁の立ち上がりが確認できない箇所も存在する。底面は比較的平坦で、斜面下方に向かって傾斜している。

〔ピット〕 斜面最上方に1基と、そこから第2号性格不明遺構との中間に1基、計2基確認された。確認作業の際、表土除去と同時に掘り下げたことと、湧水のため確認が困難であったことから、覆土の堆積状況は記録できなかった。形状は2基とも円形に掘り込まれ、ピット1が直径80cm、底面径50cm、深さ52cm、ピット2は長径88cm、短径68cm、底面径34cm、深さ44cmを計る。掘り込まれた位置や形状から、湧水を利用するために掘り込まれたものと思われる。また確認は出来なかったが、桶が設置されるような施設が存在した可能性も考えられる。

〔出土遺物〕 遺物の出土は見られなかった。

〔小結〕 本遺跡は丘陵上に立地するため、周辺から水を得にくい環境にある。今回の調査区では不透水層である基本層序第IV層によって地下水位が比較的高い位置にある。本遺構はその地下水を利用した水場遺構である可能性が考えられる。構築、廃絶時期は決定の根拠に欠け不明である。

(浅田)

第2号性格不明遺構 (SX-02) (図17)

〔位置〕 L～M-109グリッドに位置する。第1号性格不明遺構が北側から西側に回りこみ、M-109グリッドで接する。

[確認] 表土除去作業によって黒褐色土の不整形のプランが検出された。当初は風倒木痕の可能性があると調査を行ったが、周辺にピットが確認されたことから、不整形ではあるが人為的に掘り込まれたものと判断し、遺構として認定した。

[重複] 第1号性格不明遺構と接する状態にあるが、重複関係は確認できなかった。

[規模] 不整形を呈し、長径4m、短径3m、深さ28cmを測る。

[堆積土] 7層に分層された。水の影響を受けているため全層粘土質となっている。

[ピット] 遺構北側に4基確認された。形状は楕円形と不整形に掘り込まれている。規模はピット3が長径32cm、短径26cm、深さ21cm、ピット4が長径28cm、短径24cm、深さ42cm、ピット5は長径34cm、短径24cm、深さ28cm、ピット6は直径16cm、深さ32cmを測る。掘り込まれた位置や形状から柱穴と思われる。何らかの施設が存在した可能性がある。

[壁断面・底面] 断面形態は浅い皿形を呈し、壁面として明瞭に捉えられる部分は少ない。底面は若干の凹凸が見られる。

[出土遺物] 遺物の出土は見られなかった。

[小結] 構築、廃絶時期は決定の根拠に欠け不明である。新旧関係が掴めなかったため第1号性格不明遺構との関係も不明であるが、同時期存在していたのであれば、湧水を利用した何らかの施設である可能性が考えられる。

(浅田)

第5号性格不明遺構 (SX-05) (図18)

[位置] D～G-107～111グリッドに位置する。

[確認] 調査前の段階で既に崖線に向かって開口した大きな落ち込みとして確認された。当初は本遺構の西側が大きな崖線となっており、土砂崩れ等自然作用によるものと捉えていた。調査段階で念のため掘り下げを行ったところ、基本層序第IV層がすぐに露出する状況であったが、上端にあたる部分でこの落ち込みを取り囲むようにピットが8基確認された。このことからこの落ち込み全体が何らかの人為的行為によるものである可能性が高まったため、遺構として扱った。

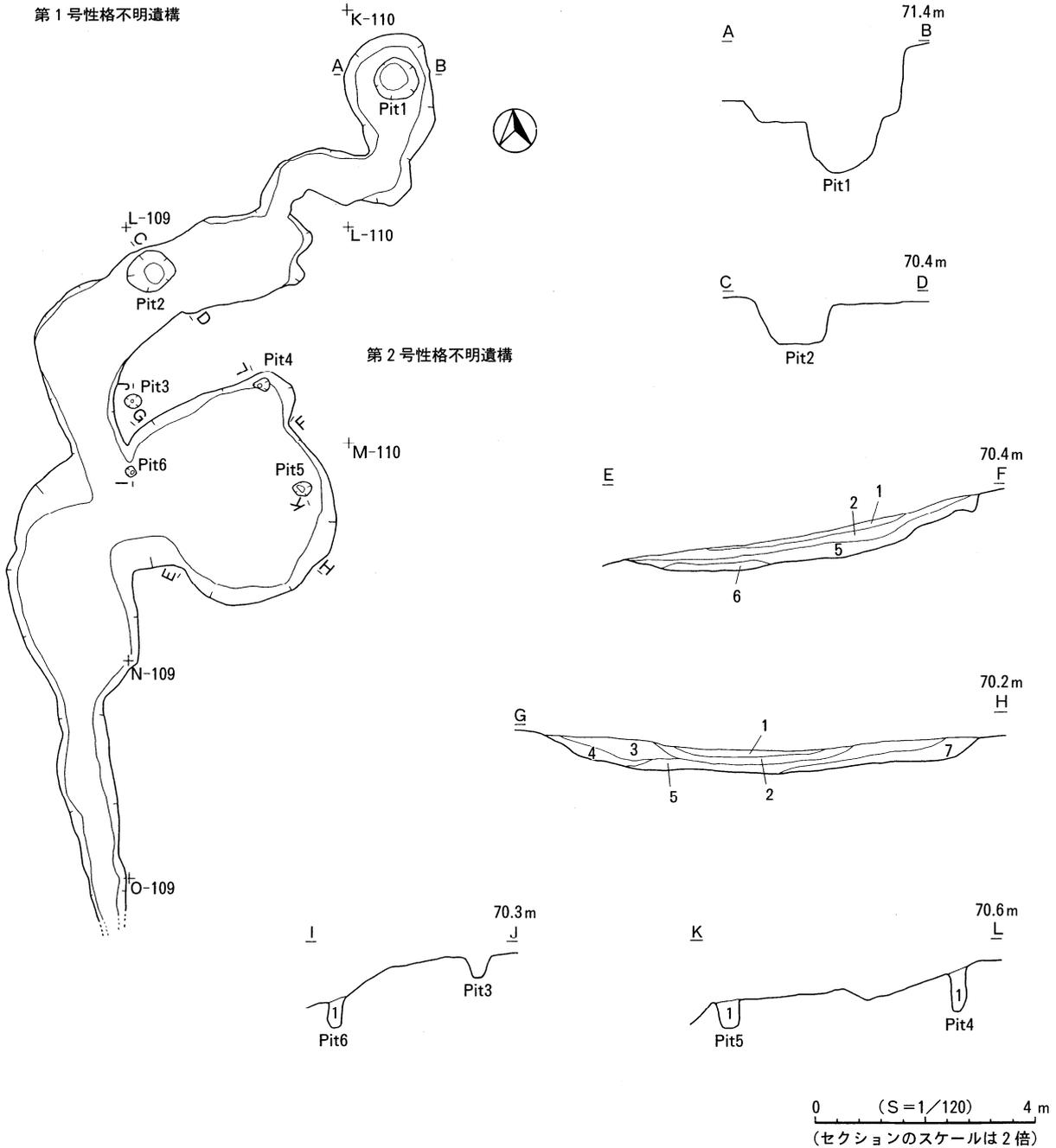
[重複] 重複は認められなかった。

[形状・規模] 平面形態はイチジク状で、崖線にせり出す方が狭くなっている。断面形態は半円形を呈する。底面には純粋な平坦面は少ない。上面長軸16m60cm、短軸10m40cm、底面幅50～180cm、比高差約2mを測る。

[堆積土] 基本層序第III層が母材と考えられる黄褐色土の単一層であった。酸化鉄粒の堆積が縞状に堆積していることから水の影響を受けて流入した可能性が考えられる。

[ピット] ピットは総数8基確認されており、全て遺構上端周辺に存在する。平面形は円形、楕円形、隅丸方形等が見られ、特に規則性は見られない。しかし上面最大径は20～32cm、平均24cmと似たような大きさとなる。深さ26～72cm、平均44cmを計る。覆土も黄褐色土の単一層である。以上のことからほぼ同時期に廃絶された柱穴と考えられる。

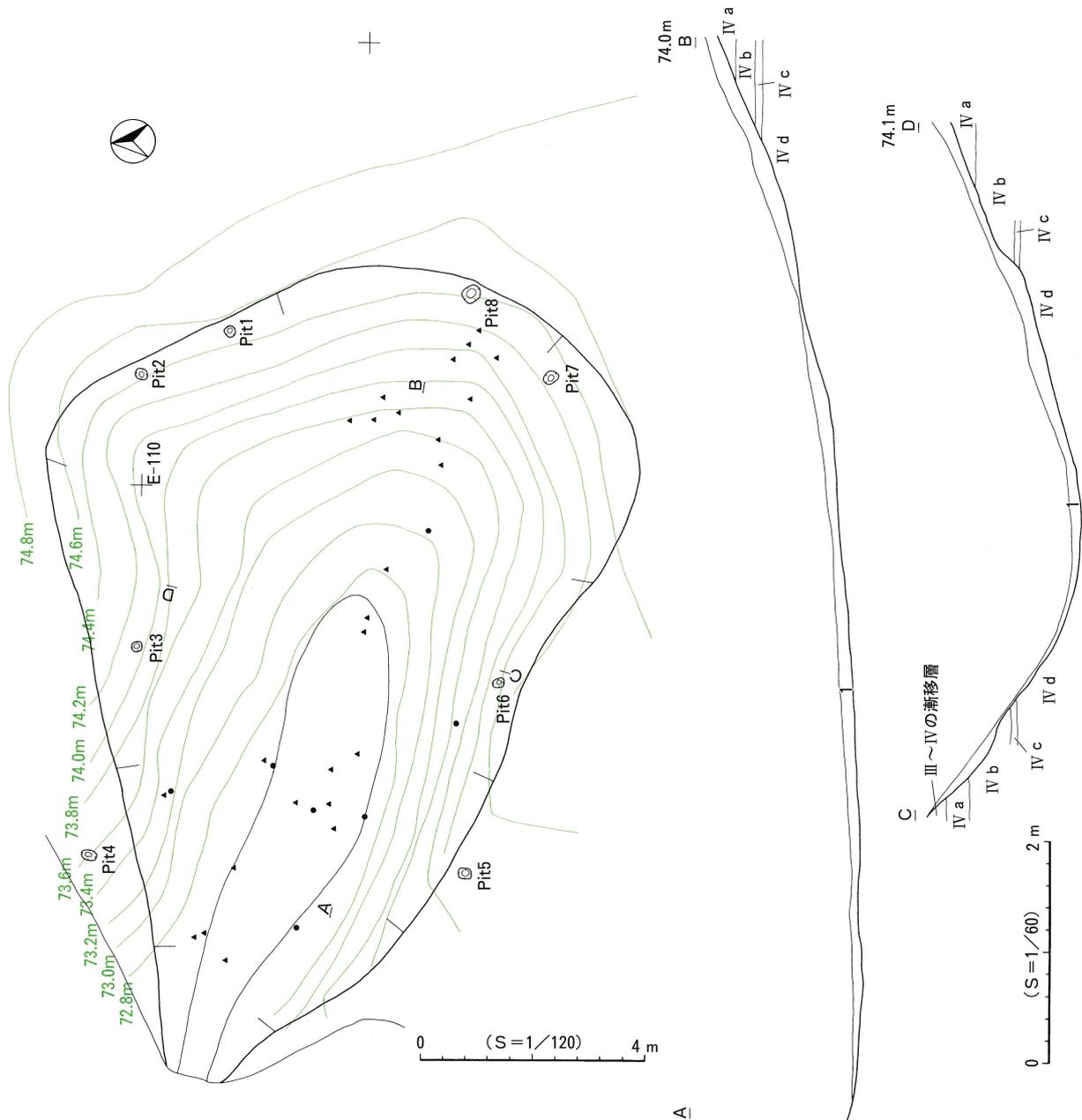
[出土遺物] 縄文土器、礫の出土が確認されているが、全て覆土内からの出土であり、本遺構の廃絶後、覆土形成時に上方から流入したと思われる。



第2号性格不明遺構 (SX-02)

- 1層 黒褐色土 10YR2/2 密度極めて密、硬度中、粘性やや強 炭化物(〜φ2mm)1%、焼土粒(〜φ2mm)1%混入。粘土質。
- 2層 暗褐色土 10YR3/4 密度極めて密、硬度中、粘性強 焼土粒(〜φ3mm)1%混入。粘土質。
- 3層 褐色土 10YR4/4 密度極めて密、硬度中、粘性やや強 焼土粒(〜φ3mm)1%混入。粘土質。
- 4層 暗褐色土 10YR3/4 密度極めて密、硬度中、粘性やや強 焼土粒(〜φ3mm)1%混入。粘土質。
- 5層 暗褐色土 10YR3/3 密度極めて密、硬度中、粘性やや強 焼土粒(〜φ2mm)1%混入。粘土質。
- 6層 暗褐色土 10YR3/4 密度極めて密、硬度中、粘性強 炭化物(〜φ2mm)1%、焼土粒(〜φ2mm)1%混入。粘土質。
- 7層 黄褐色土 10YR5/6 密度極めて密、硬度中、粘性強 焼土粒(〜φ3mm)1%混入。粘土質。
- Pit 4
 - 1層 暗褐色土 10YR3/4 密度やや密、硬度やや硬い、粘性強 ローム粒(φ3〜5mm)5%混入。
- Pit 5
 - 1層 褐色土 10YR4/4 密度密、硬度硬い、粘性やや強 ローム粒(φ3〜5mm)2%混入。
- Pit 6
 - 1層 暗褐色土 10YR3/4 密度中、硬度中、粘性強

図17 第1・2号性格不明遺構



第5号性格不明遺構 (SX - 05)

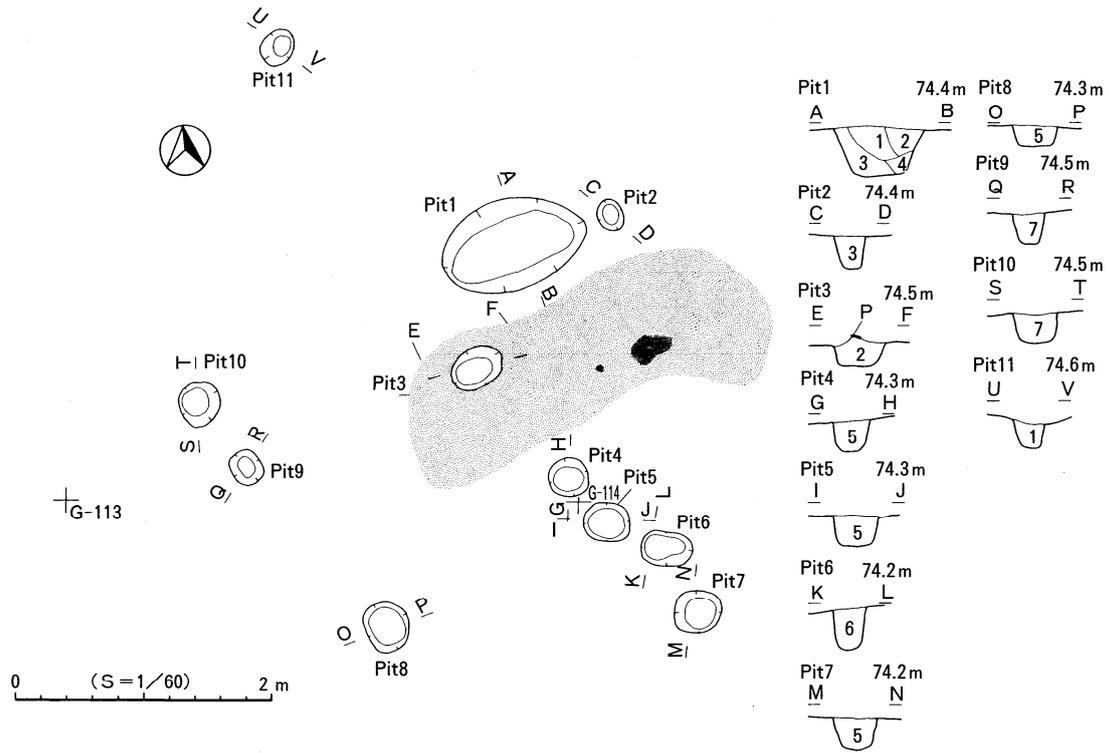
1層 黄褐色土 10YR5/6 密度密、硬度やや硬質、粘性強 ローム粒(～φ 1mm) 2%、酸化鉄粒(～φ 1mm)縞状に40%程度、
黒褐色土粒(10YR2/3)(～φ 3mm)斑状に10%混入。

Pit 黄褐色土 10YR5/6 しまり弱、粘性強 炭化物(～φ 1mm)微量、脆いローム粒中量混入。

図18 第5号性格不明遺構

[小結] 本遺構の性格であるが、基本層序第IV層が広く露出するように掘り込まれていることから、第IV層を狙って崖線側から掘り込まれているものと思われる。第IV層は焼物作りに適した粘土である事から、露天掘りによる粘土採掘跡の可能性はある。掘り込まれた時期は決定の根拠に欠け不明であるが、丘陵頂部に存在する遺物集中地点が大きく抉られるような状況になっていることから、少なくとも遺物集中地点の形成後に掘り込まれたものと考えられる。本遺構に類似した地形が調査区北側にも確認できることから、崖線沿いに粘土採掘跡が広がっている可能性がある。

(浅田)



第6号性格不明遺構 (SX-06)

- 1層 しぶい黄褐色土 10YR4/3 密度やや密、硬度やや硬質、粘性やや強 ローム粒(～φ 5mm) 2%、炭化物粒(～φ 2mm) 1%、暗褐色土(10YR3/3)斑状に30%混入。
- 2層 褐色土 10YR4/6 密度やや密、硬度やや硬質、粘性弱 ローム粒(～φ 5mm) 2%、炭化物粒(～φ 3mm) 1%混入。
- 3層 黄褐色土 10YR5/6 密度密、硬度硬質、粘性弱 ロームブロック(～φ 100mm)50%斑状に混入。
- 4層 褐色土 10YR4/6 密度密、硬度硬質、粘性弱 ローム粒(～φ 5mm) 1%混入。
- 5層 褐色土 10YR4/4 密度やや密、硬度硬質、粘性弱 ローム粒(～φ 5mm) 1%、炭化物粒(～φ 5mm) 2%混入。
- 6層 黄褐色土 10YR5/6 密度密、硬度やや硬質、粘性弱 ローム粒40%混入。
- 7層 黄褐色土 10YR5/6 密度やや密、硬度硬質、粘性弱 ローム粒(～φ 3mm) 1%、炭化物粒(～φ 3mm) 1%混入。

図19 第6号性格不明遺構

第6号性格不明遺構 (SX-06) (図19)

〔位置〕 F～G-113～114グリッドに位置する。

〔確認〕 本遺構は上面に存在する遺物集中地点の遺物取上げが完了し、遺構確認面とした基本層序第Ⅲ層まで掘り下げた段階で、硬化面と焼土、ピットが検出された。

〔重複〕 重複は認められなかった。

〔規模〕 硬化面は不整形長方形を呈し長軸3m、短軸1m10cmを測る。その中央やや東寄りに焼土が2箇所検出された。形態は不整形で長軸35cm、短軸20cm、もう一方は小さく直径8cm程である。

〔堆積土〕 硬化面、焼土上の覆土を捉える事はできなかった。また硬化面、焼土ともに非常に薄く、地面への掘り込みは確認できなかった。

〔ピット〕 ピットは総数11基確認された。ピット1は楕円形を呈し、長軸115cm、短軸74cm、深さ40cmを測る。覆土は4層に分層される。ピット2は楕円形を呈し、長軸25cm、短軸20cm、深さ26cmを測る。覆土は黄褐色土の単一層であった。ピット3は楕円形を呈し、長軸45cm、短軸31cm、深さ16cmを測る。ピット4は円形を呈し、直径32cm、深さ25cmを測る。ピット5は楕円形を呈し、長軸37cm、短軸31cm、深さ25cmを測る。ピット6は隅丸方形を呈し、長軸42cm、短軸25cm、深さ32cmを測る。ピッ

ト7は不整形円形を呈し、長軸38cm、短軸34cm、深さ26cmを測る。ピット8は不整形隅丸方形を呈し、長軸39cm、短軸34cm、深さ16cmを測る。ピット9は隅丸方形を呈し、長軸28cm、短軸25cm、深さ26cmを測る。ピット10は不整形隅丸方形を呈し、長軸35cm、短軸32cm、深さ24cmを測る。ピット11は楕円形を呈し、長軸30cm、短軸25cm、深さ20cmを測る。

ピット1は他と比べ規模が大きく、覆土の状況も異なる。硬化面と軸方向もほぼ一致していることから、硬化面との関連性が強いものと考えられる。その他のピットは形状、堆積状況から柱穴と判断される。ピット3～7、ピット8～10はそれぞれ同一軸上に存在している。

〔出土遺物〕遺構内からの出土遺物としては確認されていない。本遺構確認前に存在した遺物集中地点との関連は残念ながら現場中に捉える事はできなかった。

〔小結〕硬化面と焼土の存在は、何らかの人間活動が行われていたことを示すものである。しかしこの場所が居住空間であったのかどうかは、今回は硬化面・焼土と柱穴との関連を明確に関連付けることができなかったこともあり不明である。また構築、廃絶時期は明確に伴う遺物が存在しないことから断定は困難である。少なくとも上面に遺物集中地点が形成中、もしくはそれ以前に形成された可能性が高い。

（浅田）

第7号性格不明遺構（SX-07）（図20）

〔位置〕I～J-118～120グリッドに位置する。東側は道路造成時に削平されており、本遺構もその際に一部壊された可能性がある。

〔確認〕基本層序第Ⅱ層中で確認した。明瞭な掘り込みを持って設置されたものは存在しない。

〔重複〕重複は見られなかった。

〔規模〕上記したグリッド内に散在するように存在する。比高差は約1mある。

〔小結〕調査時点では配石遺構(SQ-01)として扱っていた。ある程度のまとまりは確認できるが、調査後に検討した結果、特に規則性や何らかの意図を持った配置として捉える事は困難と判断し、本遺構名に名称変更を行った。しかし、本遺跡が存在する丘陵部分に礫層は存在せず、これらの礫を入手するには少なくとも本遺跡西方を流れる前田野目川まで行かなければならない。従って当丘陵上で何らかの使用後に廃棄された可能性が考えられる。構築時期に関しては決定の根拠に欠け不明である。

（浅田）

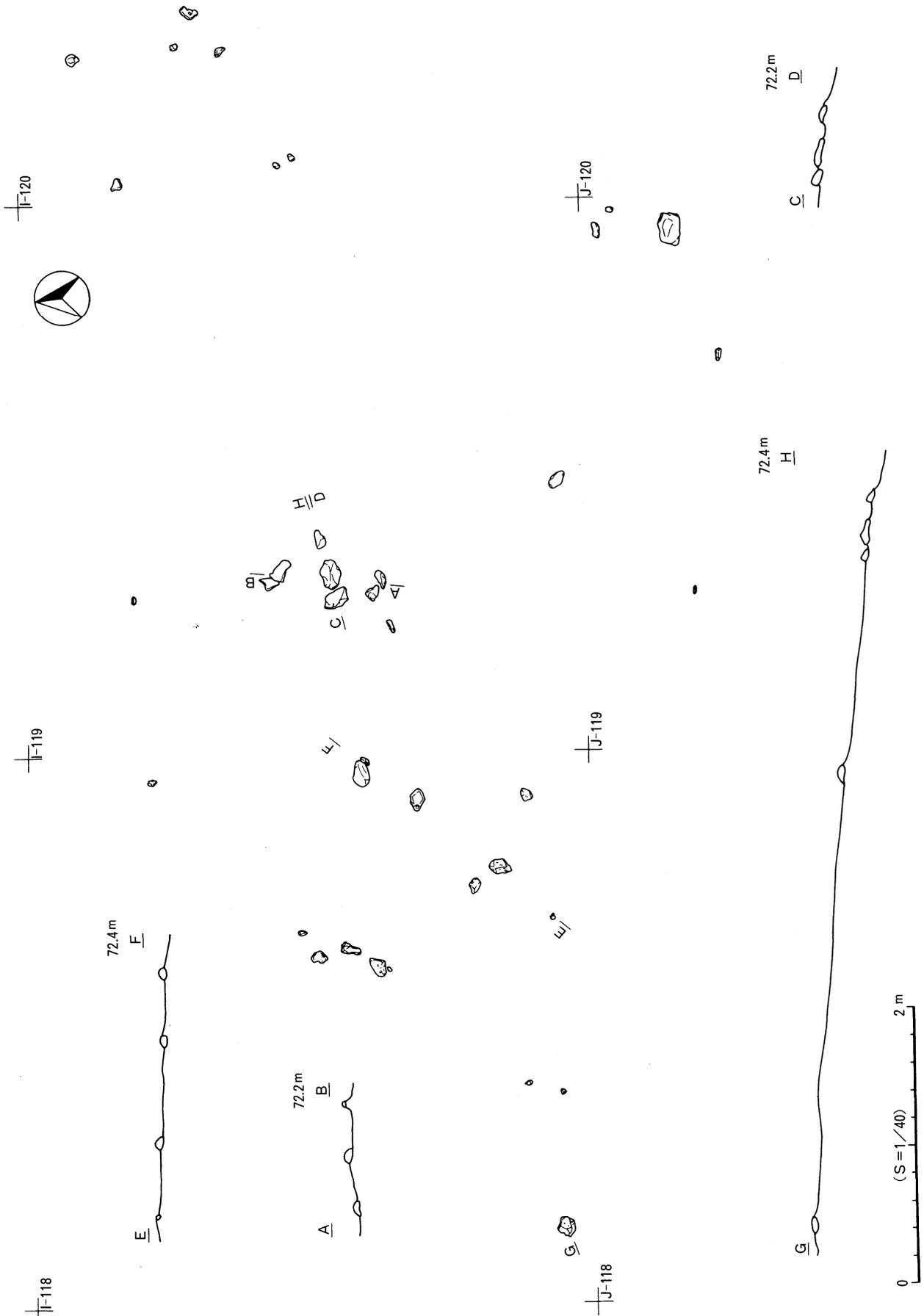


図20 第7号性格不明遺構

第2節 出土遺物

今回の調査で出土した遺物は、大半が遺構外から出土している。その中でも、丘陵頂部（D～F-112～114グリッド付近）の遺物集中地点からは縄文時代の土器、石器、弥生土器、須恵器等がまとまって出土している。ここでは、出土遺物毎に概要について述べる。

1 土器

今回出土した土器は縄文時代草創期から弥生時代後期までと幅広い。遺構からの出土は少なく、図示可能な資料は皆無であった。従って提示している土器は遺構外出土遺物のみである。その中でも遺物集中地点（SX-04）からは比較的纏まった出土が見られたため、その資料を中心に、諸特徴がつかみやすい復元個体と口縁部破片を主に図示した。分類は以下の基準で行った。

第Ⅰ群土器	縄文時代草創期	爪形文を施文する土器	第Ⅲ群土器	縄文時代前期
第Ⅱ群土器	縄文時代早期		第1類	円筒下層b式に比定される土器
第1類	貝殻腹縁圧痕文を施文する土器		第2類	円筒下層d式に比定される土器
第2類	単軸絡条体圧痕文を施文する土器	第Ⅳ群土器	縄文時代中期	
第3類	貝殻を用いて押し引き施文する土器	第1類	円筒上層a式に比定される土器	
第4類	口縁部に横走沈線文を施文する土器	第2類	中期末に位置付けられる土器	
第5類	底部資料	第Ⅴ群土器	縄文時代晩期	
第6類	爪形刺突文を施文する土器	第1類	晩期に比定される土器	
第7類	表裏に縄文を施文する土器	第2類	粗製土器	
第8類	無文の土器	第Ⅵ群土器	弥生時代後期	
第9類	貝殻条痕を用いる土器	第Ⅶ群土器	時期比定困難な土器	

第Ⅰ群土器（図21-1）

口縁部破片が1点出土している。口唇部は鋭角に伸び、口縁部は緩やかに外反する。外面口唇部直下から右上がりの爪形文が横位に連続して施文され、残存部分では5列確認される。刺突の幅は5～8mmを測る。後述する早期所産の資料にも爪形刺突文がみられるが、整然と施文する点や刺突に用いる工具の使用に若干の差異が認められる。器厚は7mm程で、胎土は砂粒、石英粒を多量に含み、軟質で脆い焼成となっている。県内出土の爪形文土器と比較すると、軟質で脆い点では鴨平（2）遺跡出土土器の胎土に似るが、本資料では金雲母は観察できない。調整は器表面の摩滅により不明である。

第Ⅱ群土器（図21-2～28、図22-1～19）

第1類（図21-2～19・図22-1～9） 外面に貝殻腹縁圧痕文を施文する一群である。今回の調査において最も多く出土している。口縁部形態は大半が平口縁と思われるが、図21-2、3、6は特徴的な、左右不均等の波状口縁が形成されている。口唇部形態は3形態に分類できる。A：平坦面を作出する（6、7、10、11）、B：外側に向かってそぎ落とす（外削ぎ、2～5、9、15～18）、C：丸みを持つ（8、13、14、19）。また口唇部文様には主に斜方向に押圧が施されるが、これも工具の差に

より3種類に分類できる。a：貝殻腹縁圧痕文、b：単軸絡条体圧痕文、c：棒状工具による押圧と変化に富む。図21-8の口唇部施文はcであるが、外面と内面から角度を換えて矢羽状に押圧している。図21-2～12までは口唇下を中心に2～3列の連続刺突列が施文される。この施文は隠川(11)遺跡に同様のものが見られる。図22-1～9は胴部資料である。胴部の文様は大きく4種類に分類できそうである。①ほぼ全面縦方向に施文する。(図22-1)。②縦と横方向を組み合わせ幾何学文様を構成する。(図22-4)。③横方向施文で区画された部分を菱形、もしくは鋸歯状に施文する。(図22-2、3)。④斜方向にほぼ全面施文する。(図21-6)。以上ようになるが、提示できなかった資料が小片だったことを考慮すると、この他にも様々な文様が施文されていた可能性がある。また、図22-6～8は胴部破片であるが、貝殻腹縁圧痕文にも押圧の力の強弱により文様に変化に富んでいる。図22-5、9は底部に近い部分の資料である。5は横方向の施文であるが、押し引きに近い状態となっている。9は1と異なり、胴部が横方向で、底部に向かって縦方向の施文に変化する。これらの諸特徴は根井沼式から寺の沢式にかけて見られるものである。本類の所産時期は同時期に比定されるものと思われる。

第2類(図21-20～22) 外面施文に単軸絡条体の側面圧痕が施文されるものをまとめている。単軸絡条体側面圧痕のみを用いたものは少なく、単軸絡条体と貝殻腹縁圧痕を併用するものが多い。口唇部形態は全て外削ぎとなっている。口唇部文様も全て斜方向の単軸絡条体側面圧痕が施文されている。単軸絡条体側面圧痕を施文する例は根井沼式から寺の沢式にかけて見られることから、本類の所産時期も同時期に比定されるものと思われる。

第3類(図21-23～27) 貝殻腹縁を用いた押し引き文が施文される。貝殻の波状の文様は確認されず、引いた方向が隅丸になる方形の列文様になる。23は横方向と縦方向を交互に施文しており、貝殻腹縁圧痕文を用いた第1類と文様構成は同じと考えられる。24～26は同じように横方向に施文されているが口唇部形態は23、24、26のように外削ぎのもの、25は丸く、27は鋭角に伸びるという点で異なっている。27は貝殻の幅が1cm程の小さなものを使用している。貝を意図的に割って使用していることも考えられる。押し引き施文する例は根井沼式から寺の沢式にかけて見られることから、本類の所産時期も同時期に比定されるものと思われる。

第4類(図21-28) 1点のみ出土している。鋭角に伸びる口唇部直下に2条の横走細沈線文が施文されている。その下部には貝殻腹縁圧痕文が横方向に施文されている。貝殻腹縁圧痕文を用いることから、所産時期は第1～3類の資料に前後する時期と推定される。

第5類(図22-10～12) 底部資料は3点出土している。全て尖底を呈する。10は尖底先端まで貝殻腹縁圧痕が施文される。先端付近は縦方向、胴部では横方向に施文している。11は無文で10より若干小型である。12は無文であるが、前者と比べ胎土が精選されており硬質堅緻な焼成となっている。また、外面は荒いケズリ調整がそのまま観察できる。隠川(11)遺跡でも同様の資料が出土しており、肉眼観察では胎土が大きく2種類の系統が存在していることになる。所産時期は10が貝殻腹縁による押し引き文を全面に施文することから、寺の沢式に比定される可能性が高い。11、12に関しては決め手に欠け、不明である。

第6類(図21-13、14) 爪形刺突文が施文されるが、第I群土器と刺突の状況や胎土が異なることから本類に分類した。13は肥厚する口縁部をもち、横方向に比較的細い爪形刺突文を連続施文する。

またその下部は縦方向に施文している。粗雑に刺突しており、横方向の刺突は一応5列にとらえたが、意図的に列を作ったものとは考えにくい。14は胴部破片で、少なくとも2列の右上がり爪形刺突文が整然と施文されている。他の刺突に比べると小さく、薄手で、小型の土器になる事が考えられるため、器形に合わせた施文となっているかもしれない。爪形刺突文は白浜式に顕著に見られ、根井沼式、寺の沢式にも存在するが、それらによく見られる半月状刺突後の粘土のめくれが観察されないことから、工具の使用方法は若干異なるものと思われる。詳細な所産時期は不明である。

第7類（図21-15） 表裏に縄文を施文する土器である。1点のみの出土である。比較的堅緻に焼成されており、単節RLの施文が明瞭に観察できる。小片であるため器形等の詳細は不明である。表裏に縄文施文する土器は早期後葉の赤御堂式に見られることから、本資料も赤御堂式に比定される可能性が高い。なお、掲載していないが、外面にのみ縄文が確認されるものも小片で出土している。

第8類（図21-16、17） 縄文時代早期に比定されるが、現状で外面に何も施文されていない土器をまとめた。従って本来は施文されているが、偶然無文部分のみの破片である可能性も含まれている。16は胎土が精選され硬質に焼成されている。17は胴下半部で、16とは対照的に胎土が非常に軟質である。器表面の摩滅はそれほど顕著ではないため、調整が消えたものではないと思われる。所産時期に関しては、資料自体に有効な属性が少ないため現時点では不明としておき、今後の資料増加に期待したい。

第9類（図21-18、19） 貝殻条痕が用いられる一群である。18は小型で薄手である。図22-14に胎土の類似が認められる。口唇部は指頭圧痕と思われる連続押圧によって小破状を呈する。外面は斜方向に軽い条痕が観察される。19は胴部破片で、外面の調整は粗いナデであるが、内面は貝殻腹縁によると思われる条痕が観察される。その他にも表裏に条痕文が施されるものも出土しているが、小破片であるため提示は行っていない。貝殻条痕が用いられる例は白浜式から見られるが、表裏に条痕が施文される例は吹切沢式に多く見られることから、この時期の所産である可能性が考えられる。

第Ⅲ群土器

第1類（図22-20～21・図23-1～6） 概ね前期中葉の円筒下層b式に比定される。図23-1～6は第1号土器埋設遺構出土資料である。詳細は遺構文章を参照していただきたい。その他図22-20、21は遺物集中地点から出土している。横方向に結節回転文が施文されている。隆帯は粘土紐貼付で、ナデ調整後結節回転文が施文されている。21は胴部破片で、20と同一個体と思われる。その他遺構外からも出土が見られるが、摩滅が激しく図示は行っていない。

第2類（図22-24～29・図24-1～3） 前期末の円筒下層d式に比定される。図22-22～26は口縁部資料である。22、24、26は口縁部に横方向の単軸絡条体と縄の側面圧痕が、23、25は結節第1種羽状縄文、単軸絡条体第1A類の横方向回転施文である。27は縦方向に結節回転文が観察される。結節回転文の脇は単節RL施文のように見えるが、詳細は不明である。内面はナデ調整となっている。28、29は深鉢の胴部破片で、縦方向に単軸絡条体第5類が施文されている。内面は丁寧なミガキとなっている。図24-1～3は同一個体と思われる。胎土分析結果も同様の結果が出ている。また、接合しなかったが同一個体と思われるものが多数出土している。口唇部は斜方向に、口縁部には横方向に縄側面圧痕が施文される。口縁部と胴部の区画には角棒状工具による連続刺突が施される。波状口縁の頂部から粘土紐貼付の隆帯が垂下し、隆帯上も棒状工具による押圧が施される。胴部は多軸絡条体が縦

方向に底部直前まで施文される。隆帯の延長上には結節部分が強く施文される。底面はナデ調整で、角を丸く落としている、内面は横方向のナデ調整となっている。

第IV群土器

第1類 (図24-4、5) 円筒上層a式に比定される。4は波状口縁の頂部で、口唇部に縄側面圧痕が施されている。口縁部の中心にボタン状の粘土貼付が行われている。その周囲には横方向の縄側面圧痕が施されている。5は胴部破片である。結束第1種羽状縄文が横方向に施文されている。内面はミガキが施される。

第2類 (図24-6～8) 縄文時代中期末に位置付けられると思われる一群である。6、7は同一個体である。6は胴部破片で縦方向の単節LRが施文される。内面はナデ調整と思われるが方向は不明である。7は胴部から底部にかけての破片で、胴部は底面からほぼ垂直に立ち上がる。内面の底部と胴部の接合部分で、ナデが不十分なために隙間が開いている部分がある。内面調整は斜方向のナデである。いずれも胎土は軟質で、小礫を多量に含む。8は胴部破片で、横方向の単節RLが施文される。本項に分類した根拠は縄文の節が他に比べ大きいことだけで、それ以外は薄手で、胎土の質感は図26-1～5に似る等の諸特徴から、時期不明土器に限りなく近いものと思われる。

第V群土器

第1類 (図24-9～15、26) 概ね縄文時代晩期の精製土器と思われる。図24-9は横方向沈線間に単節LRを充填する。10、11はいずれも鉢の胴部と思われる。11は内面に赤彩が施されている。12、13は壺の口縁部破片と思われるが、胎土等から所産時期が縄文時代後期まで遡る可能性がある。14は晩期中葉の台付鉢の口縁部である。口唇部内面と外面全面に横走沈線が巡る。外面中央部には粘土貼付による突起が作出される。色調は黒色を呈する。15は台付鉢になるとと思われる。内外面とも丁寧なナデ調整であるが、工具痕が台部内面だけでなく外面にも確認される。台部と胴部の接合面から綺麗に剥離している。26は胴部から底部まで残存している。胴下部に2条の横走沈線が巡り、縄文も節が小さいことから本類に分類した。底面はナデ調整が施される。

第2類 (図24-16～25、27、28) 縄文時代晩期の粗製土器をまとめた。しかし、22～25、27、28は時期比定に必要な要素が少なく、所産時期が後期まで遡る可能性がある。図26-16～18は外面口唇下に横走沈線を巡らせる半精製土器である。16、18は横方向単節LRが施文され、同一個体の可能性がある。17は平坦に作り出された口唇部に、恐らく横走沈線を施文したと思われる半截竹管状の工具により連続押圧が施される。19～21は深鉢の胴部破片と思われる。外面は縦方向に条痕が観察される。22は粗製深鉢の胴部であるが、本遺跡出土資料内で最も厚い。23は横方向単節LRを施文する粗製深鉢であるが、外面に粘土粒の瘤が存在する。意図的なものは感じられず、製作時に偶然付着した粘土粒の角が落ちたものと思われる。24、25は粗製深鉢の口縁部である。口唇部は平坦で、24はほぼ直立、25は若干内傾する。26～28は底部資料である。27、28は粗製深鉢の底部と思われる。底面はナデ調整が施されている。

第VI群土器 (図25-1～14)

本群資料に、弥生時代後期天王山式の特徴である交互刺突文は見られないが、その他の諸特徴から天王山式に並行するものと思われる。図25-1は比較的大型の甕である。口縁部から胴部まで残存しているが、遺存状況は悪く、すべて小破片に壊れている状況である。接合面の摩滅により接合しない

資料も多かった。口唇部上と胴部に0段多条と思われる縄文が施文されている。口縁部は比較的均一に施文されているが、胴部との屈曲部では無文部分が多くなる。その部分に細沈線で粗雑な鋸歯状の文様が施文されている。この沈線から岩手県では天王山式に後続する赤穴式として分類されると日下和寿氏からご教示を得た。胎土は砂粒を比較的多く含み、焼成はかなり赤焼けになっている。外面にはスガが付着している。器厚は他の資料と比較すれば若干厚い。内面は横方向のヘラナデが施される。2は甕の胴部下半から底部にかけて残存している。器厚が厚めで、胴部に施文される縄文原体が異なるが、後述する図26-1～5に似た雰囲気を持つ。胴部では単節RLが縦走するが、底部付近では横走に変化する。胴部の最下部で縄文の施文方向が変わるのは天王山式以降に見られる。底部はミガキが施され光沢を持つ。内面は底面に向かって縦方向のヘラナデが施され、砂粒の動きが顕著に観察される。3、4は同一個体と思われる。比較的細かい波状口縁が作出され、口唇部には棒状工具による押圧が施される。頂部には強い押圧が施され、頂部と頂部の間には内外面から交互に押圧が繰り返される。上面から観察すると交互刺突文が施された沈線間文様のように、口唇部が小波状を呈する。口縁部内面には2条の横走沈線が施され、波頂部直下のみ沈線間に山形沈線が施文される。外面は口唇下に1条の横走沈線が巡り、口縁部は0段多条と思われる原体を横～斜方向に施文する。屈曲部から下は沈線により重菱形文が施文される。重菱形文は弥生時代中期後半から後期にかけて日本海側で多く見られる要素で、本遺跡の南側に位置する真言館跡から類似する資料が出土している。菱形の頂部には強い刺突が施される。胴部との境界の屈曲部からは多条の横走沈線が施文される。装飾性が高く、器種を甕と分類したが、壺である可能性も考えられる。5～7は同一個体と思われる甕である。5の口唇部は指頭押圧により小波状を呈する。0段多条が外面全面に施文される。口唇部では比較的均一な施文であるが、6や7の胴部では比較的粗く、無文部分が存在する。9、10は小型の壺の底部で、胎土、調整の類似から同一個体と思われる。丸底に近い底部で、底面中央部は円形に窪んでいる。これは底面作成の際、円盤状の粘土板に外側から巻き込むように成形が行われているためと考えられる。胴部から底部まで横～斜方向の単節RLが施文される。このような資料は天王山式には類例が無く、青森市小牧野遺跡に比較的類似した資料が報告されているが詳細な記載が無いため不明である。しかし、小牧野遺跡では続縄文式土器が多数出土していることから、本資料も続縄文式土器と関連する可能性がある。11～13は縄文時代後～晩期の壺の胎土に似ているが、口径が非常に大きく、甕であると判断した。同一個体と思われる。折返口縁で口唇部は平坦に整えられている。口縁部はナデ調整により無文で、屈曲下の胴部には横～斜方向の単節RLが施文される。胎土は非常に精選されており、薄く仕上がっている。14は2と同様、底部付近の資料と思われる。縦走する単節RLが下部で横走に変化する。薄く焼成は良好で硬質に仕上がっている。8は胴部破片で縦走する縄文が間隔を空けて施文されている。胎土は6～8に類似している。

（浅田）

図25-3、4の口唇部の内面と外面には、それぞれ棒状工具（の側面？）による押捺列が巡らされているが、上面実測図で分かるとおり、この押捺列により、口唇部の上面ラインは整った小波状を呈している。この整った「小波状ライン」は、この押捺列が極めて計画的に内外交互に施された結果、形成されたものである。本資料には、口唇部の内外面に交互に押捺が加えられているものの、あくまでも典型的な交互刺突文（2条の平行沈線間に上下交互に刺突）を持つものではないことから、類交

互刺突文、交互刺突文類似、疑似交互刺突、交互刺突文風等の属性をもつ資料（以下、本資料にみられるこの属性を「疑似交互刺突文」と述べる）としか言えないが、問題となる点は、やはり天王山式土器との関連、そして典型的な天王山式土器との時間的關係である。

本資料にあるような口唇部の内外面に交互に押捺を加えるタイプの疑似交互刺突文の類例は、富山県高岡市頭川遺跡（上野章 1974）の資料などに散見され、重菱形文は日本海側に顕著である。また、交互になるか否かを別とすると、口唇部内外面に押捺を加える手法自体も日本海側に目立つ。

ところで、ここで桜ヶ峰（1）遺跡から南西約500mという近距離に所在する真言館跡から出土している類似資料（五所川原市教委 1996）との関連で以下に述べてみたい。真言館跡資料は口縁部が大ぶりの「く」の字に外反屈曲する平口縁の甕で、頸部には重菱形文が施され、屈曲部には典型的と言って良い交互刺突文（ポジ部分は小波状を呈す）がみられる。これらの文様要素より、この真言館跡資料は、現状では問題なく天王山式土器に比定できる。なお、この資料にも口唇部内外面に押捺列が巡らされているが、交互には全くなっておらず、口唇部の上面ラインは非常に不規則である。

以上のように、図25-3、4と真言館跡資料はいずれも日本海側に一般的な文様要素を持っていることから、両資料の間に系譜差を考慮する必要はあまりないと考えられる。また当然、地域差を考慮する必要も無い。とすると、残る問題は両資料間に時間差があるか否かである。

両資料を比較した場合、最も大きな差として、図25-3、4の疑似交互刺突文は口唇部の装飾として生かされている要素と考えられるが、一方で真言館跡資料の交互刺突文は文様帯を区画する位置に施されているという点が挙げられる。両資料は器形が異なっていることから、この問題を単純に扱うことは当然できないが、仮にこの差を時間差と捉えて考えた場合、時間の経過とともに体部にあった典型的交互刺突文が口唇部に移動し、そして図25-3、4の上面実測図にあるような、整った文様を構成する内面の沈線文と同居する、という変化はやや想定し難い。なぜなら、図25-3、4にみられる、波状口縁、波頂部上面への押捺、内面の沈線文の状態、そして重菱形文の存在という要素を総合的に捉えると、秋田県大曲市宇津ノ台遺跡出土資料（須藤隆 1970）等との類似性がうかがえ、弥生時代中期に一般的な要素を多く含んでいるからである。よってむしろ、口唇部上面にあった疑似交互刺突文は、体部へ移動しつつ文様帯を区画し、整った文様を構成する内面沈線文は消失した、と考えるほうが自然ではないかと考える。以上まとめると、仮にこれら両資料に時間差を認めて解釈した場合、図25-3、4→真言館跡という変遷を考えるべきと思う。ただし、これら両資料の共通した属性（口唇部内外面押捺列、重菱形文）から、時間差はあったとしても非常に短いものとしてとらえられ、その場合、図25-3、4にある疑似交互刺突文は、交互刺突文の初源的なものである可能性も想定できよう。

しかし捉え方を変え、上述のように、両資料とも口唇部内外面の押捺列と重菱形文という2つの要素を共通して持っていることから、この点を最重視してこれら両資料がほぼ同時存在したものと考えられることも不可能ではない。「交互刺突文」といえば、大抵の場合、2条の平行沈線と上下交互に施された刺突というネガの部分重視するが、もしも図25-3、4の製作者も真言館跡資料の製作者も、ポジの部分である「小波状ライン」を作出するために交互刺突文や疑似交互刺突文を施していたとすれば、両資料とも位置や形態、技法は違うものの同じような文様効果が得られていることになる。このように考えると、両資料間の差、即ち「小波状ライン」を施す位置の違いは器形の違いに起因して

いるだけと捉えることが可能となり、同時存在した可能性も十分ありうることになると言えよう。

以上のことから、図25-3、4と真言館跡資料との間に大きな時間差は認めなくても良いと考えられ、図25-3、4は、天王山式期、あるいはその直前の資料と捉えて問題ないであろう。

（木村 高）

第Ⅶ群土器 時期比定困難な土器

本群は縄文時代～弥生時代の所産であると考えられるが、管見の限りでは類例に乏しく詳細な時期に関しては比定が困難であった。今後類例の増加とともに所産時期の決定がなされると思われるため、時期不明の土器群として一括提示する。

図26-1～5は深鉢になると思われる。全て同一個体と思われる。1、4と底部破片と思われる資料を組み合わせて器形復元を試みたものを復元図として提示しているが、接合している資料ではないため器高等に関してはあくまで想定を元にしたものである。全て遺物集中地点から出土している。口縁部は緩やかに外反し、胴部下半に向かって緩やかに膨らむ。胴部最大径は胴下半にあり、そこから底部までほぼ直線的に狭くなる。底部は内面が一部残存しているが、外面は剥離しており残存していない。立ち上がりの部分もきれいに剥離している。地文縄文には単節RLが口縁部付近では横方向、胴部では横～斜方向に施文されている。口唇部下の屈曲部分から胴部最大径付近まで浅い沈線による文様が施されている。胴部には二重沈線で隅丸方形が描かれる。恐らく土器表面を四分分割しているものと思われる。その内部には同じく二重沈線で逆U字状に施文される。胴部最大径付近には同じく二重沈線による波状文が施文される。隅丸方形間の空間には楕円形文が上下に施される。沈線は棒状工具と思われるが、沈線内に細かい筋が施文する方向についていることから、工具の先端は丸くなく、繊維が毛羽立っている状態のものと考えられる。非常に器厚が薄く、胎土は精選されており海綿骨針を多量に含む。胴部は煤けて黒色に変化している部分も存在する。焼成は概ね良好で、堅緻である。内面は横方向のナデ調整が施されている。砂粒の動きが良く観察できる。輪積痕が明瞭で、横方向に一定間隔で割れている。縦方向にも割れ口がそろう部分がある。この傾向は胴部の方に顕著である。割れ口は非常に滑らかで器厚が薄いためか、接合が不十分であった可能性が考えられる。

提示資料はいずれも1/4以下の残存率であったため、器形復元に関しては非常に困難であるが、実物と復元図を元に整理段階で様々な方から御教示をいただいた。その結果、所産時期はⅠ：「弥生時代後期」とする意見とⅡ：「縄文時代中期～後期初頭」とする意見に分かれた。Ⅱに関しては特に大木9～10式並行土器に比定される意見が多かった。Ⅰとする際の根拠としては、器厚が薄く、胎土が非常に精選されていること、文様モチーフや横方向の施文調整が大木9～10式並行土器として違和感があること、内面の調整技法は本遺跡出土弥生時代後期の資料と同じ、横方向のへら状工具を用いたナデ調整であること等が挙げられる。胎土が精選され、接合部分で破損する例は、秋田県鹿角市大地平遺跡に類例が見られると児玉準氏よりご教示をいただいた。文様モチーフで類似するものは壺形土器であるが、青森市螢沢遺跡、岩崎村小儀遺跡、六ヶ所村家ノ前遺跡等に見られるが、決定打に欠けるものである。またⅡに関しては、器形の類似する点、弥生土器とすると沈線文様に違和感を感じる点、器形に関しては青森市三内沢部遺跡に、楕円形文と隅丸方形文に関しては今別町二ツ石遺跡に類似する資料が見られる。等と意見が大きく2分され、まとまりを見ることはなかった。いずれの意見も各属性毎に検討すると確かに該当するものであり、甲乙つけ難い。1つの資料を巡ってここまで意



図21 出土遺物 縄文土器 1 (第 I ~ II 群)

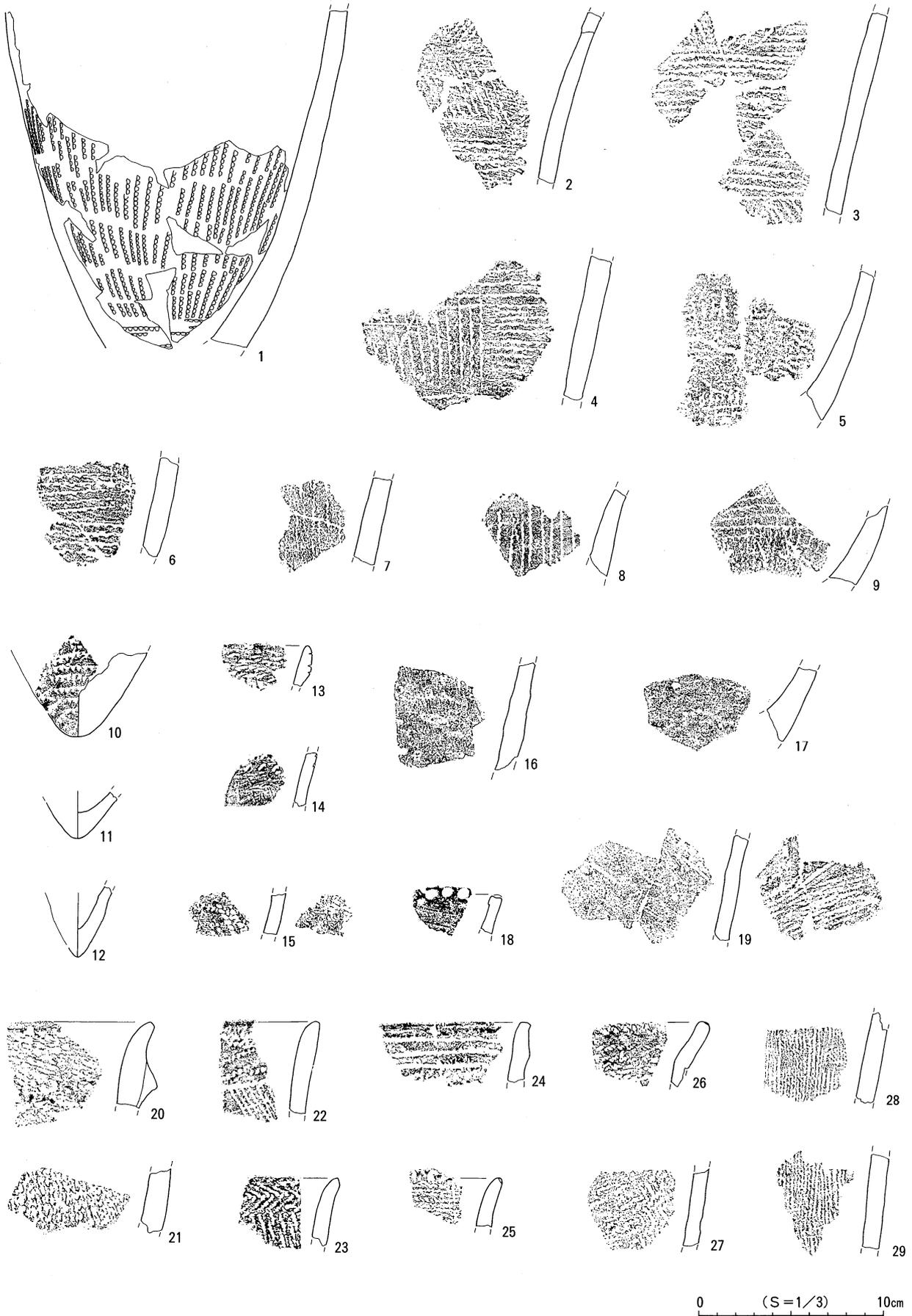


図22 出土遺物 縄文土器 2（第Ⅱ～Ⅲ群）



図23 出土遺物 縄文土器 3 (第Ⅲ群)

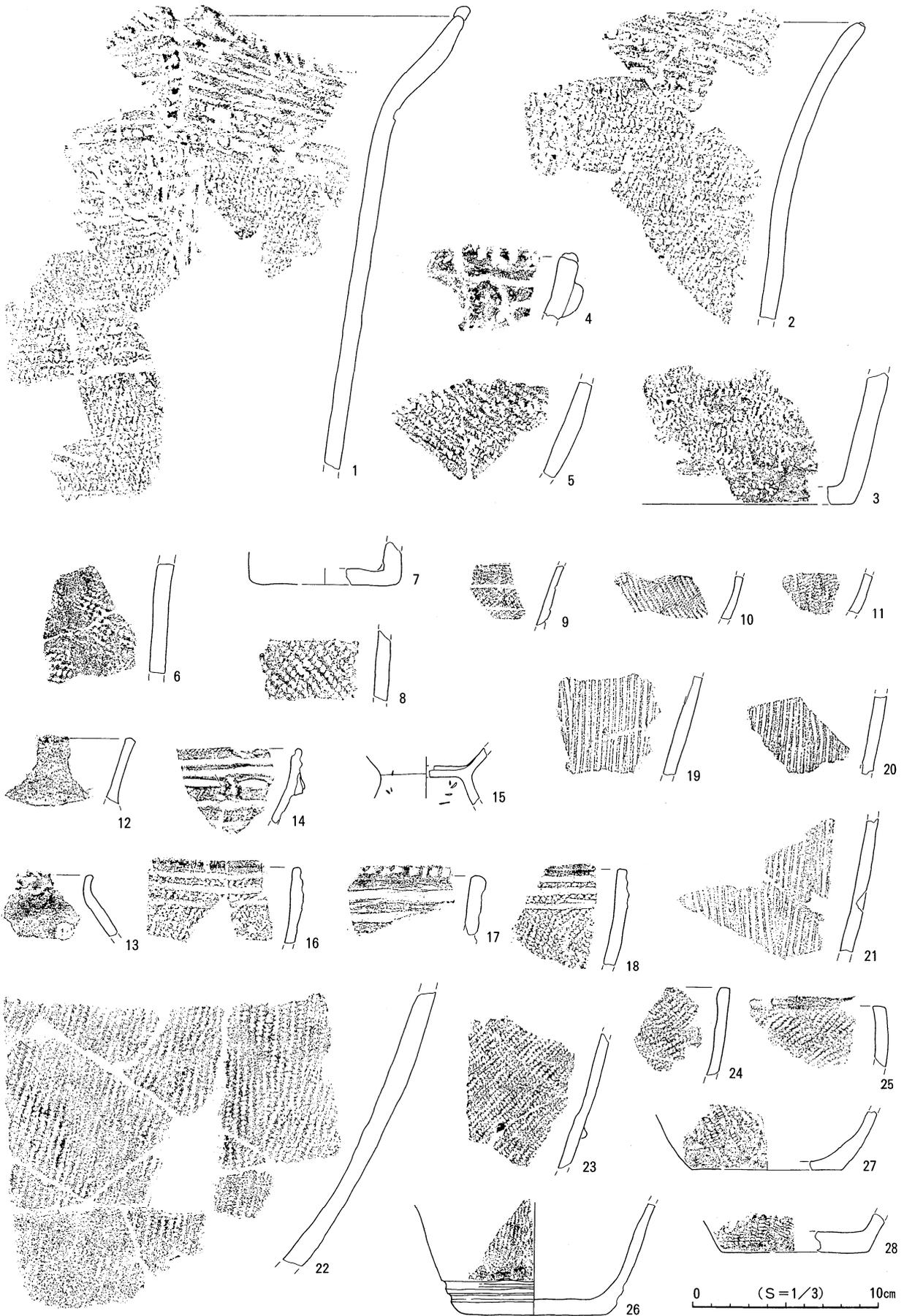


図24 出土遺物 縄文土器 4（第Ⅲ～Ⅴ群）

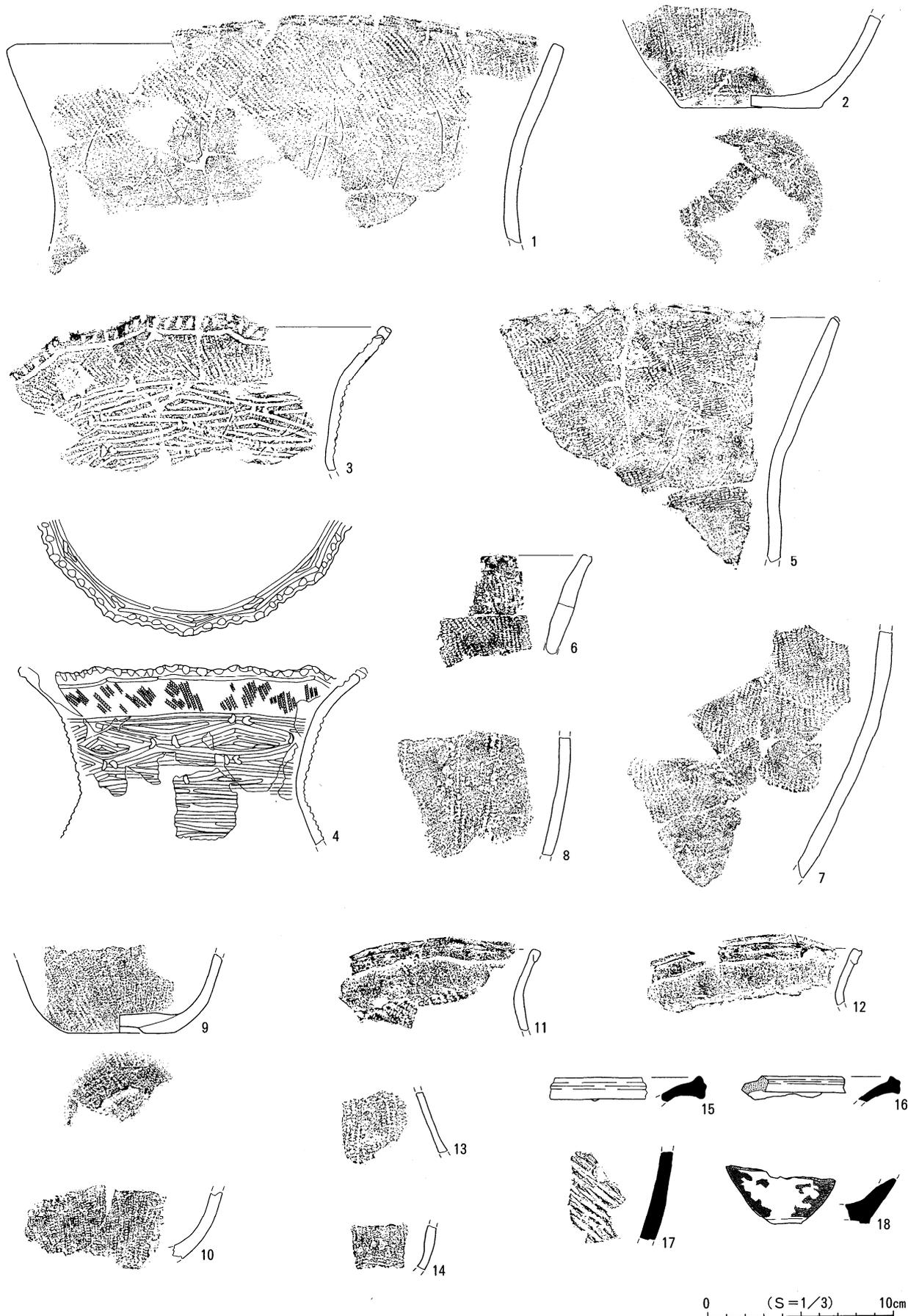


図25 出土遺物 弥生土器（第VI群）・須恵器

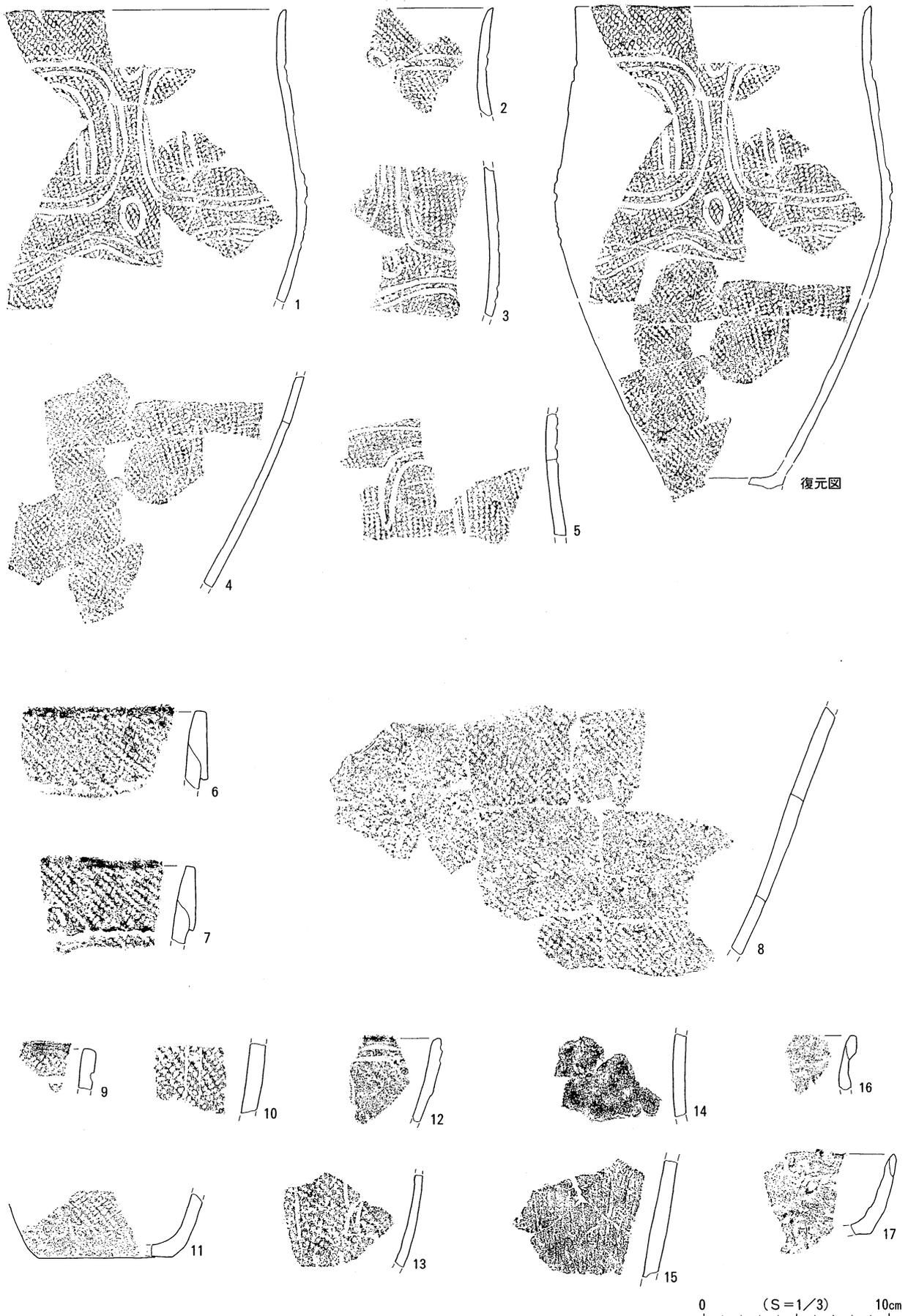


図26 出土遺物 時期不明土器(第Ⅶ群)

見が分かれることは想像していなかったため驚きを隠せないが、その原因は本資料が現在まで構築されてきた、少なくとも北東北3県における土器編年の範疇から外れているためと考えられる。更に規定に当てはまらない出土土器に対して各研究者が属性を検討する際に、それぞれの持ち合わせる各時期の情報量の差が潜在的に存在し、その影響によって判断に差異が生じている可能性も考えられる。いずれにせよ、本資料が作り出された背景に関しては五所川原地域周辺の地域性にあるのか、また偶然イレギュラーなものが作り出されただけなのか、また本遺跡よりも北方に要因が存在するのか、現段階では不明であり、解明に向けては今後の資料増加に期待したい。

6～8は同一個体と思われる。口縁部は折返口縁となっている。口唇部は平坦に作出される。折返部分は下部ほど厚くなる。折返部と胴部に地文として単節RLが横方向に施文される。若干軟質で、内面には弾けが顕著に観察でき、横方向のナデ調整が行われている。縄文時代後期の所産とされるものであるが、胎土の状況や調整が本遺跡出土の弥生時代後期の土器に類似するため、本群にまとめた。9、10は横走、縦走沈線が施文される前に、横方向の単節RLが施文される。文様モチーフは小破片のため確認できない。11は底部資料である。外面に横方向に単節RLが施文され、下部はヘラナデと思われる調整が施されている。内面には弾けが顕著に観察される。胎土は後述する12、13に類似する。12、13は同一個体と思われるが、いずれの資料も胎土が軟質のためか器表面の摩滅が顕著で、沈線による施文が確認されるのみである。12は口唇下に2条の横走沈線、13は縦方向に沈線文が施文される。14は無文で、外面は磨かれている。胎土は図26-1～5と、縄文時代中期末とした図24-6、7の中間に位置する。15は内外面とも縦方向の丁寧なヘラナデが施されている。胎土に繊維が混入している。16、17はミニチュア土器と考えられる。いずれも底部を欠損する小破片のため詳細は不明であるが、折返口縁を呈し、17は粗い調整が施されている。

(浅田)

2 須恵器 (図25-15～18)

平安時代の須恵器は長頸壺4点、甕2点、坏1点の計7点出土している。いずれも小破片である。この内4点を図示した。図25-15、16は長頸壺の口縁部である。縁帯は突帯が巡るように調整されている。胎土は精製されており、海綿骨針が混入する。図25-18は胴部下半から底部にかけて残存しており、長頸壺と思われる。外面には底部まで釉が付着している。底面には菊花文になるとと思われる細かいケズリが観察される。いずれの資料も堅緻に焼き締まっている。図25-17は甕の胴部破片で、胎土に若干小礫が混入する。外面には平行叩目が観察される。叩目内には直交する筋が観察される。内面当具痕は明瞭ではない。ほぼ全ての資料が外面は還元色、内面酸化色になっている。また、提示していないが厚さ2mmの非常に薄い坏と思われる小片にヘラ書きがなされている。今回出土した須恵器は諸特徴から全て五所川原産である可能性が高い。胎土分析の結果も五所川原産である可能性を示している。しかし破片資料のため詳細な所産時期の判断は困難である。また土師器は確認されなかった。

(浅田)

3 石器・石製品

今回の調査で出土した石器・石製品は、遺物集中地点を中心とした遺構外の遺物包含層から出土しており、ほとんどが縄文時代に属するものと考えられる。その内訳は、石鏃8点、石槍1点、トランシェ様石器8点、筥状石器3点、不定形石器9点、磨製石斧1点、敲磨器類19点、石皿3点、石錘1点、剥片を素材とする石器の石質は珪質頁岩が大半である。その他、多量の剥片・石核・礫等が出土しており、検出された石質は15種類に及ぶ。その中で黒曜石は石器が1点、剥片が1点だけ含まれている。

1 石鏃（図27-1～8）

8点出土している。形状の違いにより以下に分類する。

I類：尖基の無茎石鏃。図27-1は基部・先端部共緩やかな膨らみを持つ。基部に比べ先端部が長めに作られている。全体に細かな調整が施される。石質は黒曜石で赤い縞模様が認められる。未分析であるが、北海道産黒曜石の可能性が高い。

II類：凹基の無茎石鏃。図27-2は基部にわずかに抉りが認められる。両面に比較的大きめの剥離調整が施され、先端部の剥離は細くなる。先端部を僅かに欠損する。未製品の可能性も考えられる。石質は珪質頁岩。

III類：未製品。5点出土している。図27-3は一部に自然面を残している。被熱資料である。石質は珪質頁岩で黒色を呈する。図27-4も一部に自然面を残し、大きめの調整が施されている。石質は珪質頁岩。図27-5は平面形が木の葉状を呈し、片面に比較的細かい調整が施される。石質は珪質頁岩。図27-6は比較的小型で側縁及び基部が弧状を呈している。石質は珪質頁岩。図27-7は先端部を欠損する。基部には抉りが認められる。細かな調整は施されていない。石質は珪質頁岩。

IV類：欠損品。1点出土している。図27-8は基部の大部分と先端部を欠損する。残存部はやや膨らみを持つ。石質は珪質頁岩。

2 石槍（図27-9）

未製品が1点出土している。図27-9は厚めの剥片を素材としていて、両面に大きめの剥離が施されている。石質は珪質頁岩で色調は黒色を呈している。

3 トランシェ様石器（図27-10～17）

8点出土している。形状及び刃部の違いにより以下に分類する。

I類：刃部の角度が比較的鋭角なもの。4点出土している。

A. 全体形状が直線的なバチ型を呈し刃部付近が幅広なもの。2点出土している。刃部断面形は片刃状を呈している。図27-10の刃部の微細な剥離は使用痕と思われる。刃部両面に光沢部分が認められる。図27-11の主要剥離面側にバルブ除去の痕跡が認められる。刃部に微細な剥離が認められる。

B. 側縁部が抉れるバチ型を呈するもの。1点出土している。図27-12は全長に比べ刃部幅が比較的広い。刃部断面形は片刃状を呈している。一部にノッチ状の刃部を有する。1次剥離面側に一部自然面を残す。

C. 側縁部がやや膨らみ鼓状を呈するもの。1点出土している。図27-13は基部を欠損する。刃部の剥離は使用痕と思われる。刃部角は前の3点に比べ広いが断面形は片刃状を呈している。刃部1次剥離面側と主要剥離面側に光沢部分が肉眼でも顕著に確認できる。

Ⅱ類：刃部の角度が鈍角なもの。2点出土している。図27-14は比較的小型で全体形状は短冊型を呈し、刃部断面形は蛤状を呈している。図27-15も比較的小型で14と同じ形状をしている。基部に一部自然面を残している。

Ⅲ類：欠損品で刃部の形状が不明のもの。2点出土している。図27-16は折れにより刃部を欠損するが、折れ部を刃部として使用している可能性がある。図27-17は刃部及び基端部を欠損する。

これらの石器は、富樫泰時氏が言われているように横長剥片を素材とし、1次剥離面を刃部として作り出すのに適しているトランシェ様、或いはトランシェ状石器と呼ばれている石器である。トランシェ様石器は、津軽地方では青森市蛸沢遺跡から16点、浪岡町細野遺跡から11点、同松山遺跡から7点、大鰐町砂沢平遺跡から8点、同上牡丹森遺跡から1点、平賀町烏海山遺跡から1点、尾上町李平下安原遺跡から1点、碓ヶ関村永野遺跡から2点出土しており、いずれの遺跡も縄文時代早期の土器に伴って出土している。本遺跡においても縄文時代早期中葉、貝殻腹縁文系の寺の沢式期の土器に伴うものと思われ、遺跡の特徴を表している遺物でもある。石質は全て珪質頁岩でほとんどが横長剥片を素材としている。本石器群の一部には肉眼でも使用痕と思われる光沢部分が刃部付近に観察されるもの（図27-10・13）も見られる。図27-10は実体顕微鏡による観察では、刃部に対し垂直方向の線状痕が主要剥離面側では先端から基部側に比較的幅広く観察され、1次剥離面側では明瞭には観察されなかった（写真15）。おそらく使用による摩擦や抵抗を受ける面積が主要剥離面側では1次剥離面側より多いことを意味し、このことは、丸みを帯びていない1次剥離面側の稜線の観察からも推察される。対象物に対する角度にもよるであろうが、主要剥離面側と1次剥離面側が同じような摩擦・抵抗を受けていたとすれば、光沢部分も同じような幅や面積で観察され、1次剥離面側の稜線部も摩擦・抵抗により丸みを帯びてくるものと推察される。以上のことから10は、水平方向では刃部の主要剥離面側を対象物に対してかなり鋭角に進入させることにより密着面積を広く取り、刃部を先に押し出すようにして使用していた可能性が考えられよう。図27-13は10とは様子が異なり、1次剥離面側と主要剥離面側に同じような幅で光沢部分や線状痕が観察されている（写真16）。また、1次剥離面側の稜線も丸みを帯びていることから両面同じような摩擦・抵抗を受けていたものと推察される。以上のことから13の刃部については、例えば楔の様に対象物に対して垂直方向、或いは10のような状態での表裏交互使用の可能性も考えられよう。なお2点共装着痕をうかがえるような痕跡は基部には看守できなかった。

4 篋状石器（図27-18～20）

3点出土している。形状の違いにより以下に分類する。

I類：全体形状が直線的なバチ型を呈するもの。

1点出土している。図28-18は比較的大型で刃部幅も広い。刃部は片面調整が施され、断面

形は概ね蛤状を呈している。刃部の剥離断面は細かい階段状を呈しており、かなりの頻度の使用痕の可能性も考えられる。石質は珪質頁岩。

Ⅱ類：側縁部が膨らみを持ち、全体形状が鼓状を呈するもの。

2点出土している。図28-19は縦長の剥片を素材としている。比較的大型で厚みもある。刃部は山型に波打っている。刃部主要剥離面側に光沢部分が確認できる。図28-20は主要剥離面に対し急斜度で浅形の刃部剥離調整が施される。刃部両面に使用痕と思われる光沢部分が肉眼でも顕著に確認できる。刃こぼれ状のノッチも確認でき、一部側縁にも刃部調整が施される。背腹両面の稜線部に錆状の付着物が認められる。19に比べると小型で薄手である。石質は2点共珪質頁岩。

5 不定形石器（図28-21～29）

9点出土している。形状及び調整の違いにより以下に分類する。

I類：側縁全体に刃部加工が施されるもの。

1点出土している。図28-21は比較的大型で、全体形状が舌状を呈している。背面の一部に自然面を残している。石質は珪質頁岩。

Ⅱ類：側縁の一部に加工が施されるもの。6点出土している。

A. 図28-22はやや外湾気味の刃部と短めの直線的な刃部を有する。図28-23は直線的な刃部を2辺有する。図28-24はノッチ状の刃部を有する。図28-25はやや内湾気味の刃部を1辺有する。図28-26は刃部の損傷が著しい。図28-27は背面に緩斜度の深形調整が施される。腹面の剥離は使用痕の可能性が高い。石質は全て珪質頁岩。

Ⅲ類：欠損品。2点出土している。

図28-28は基部の大部分を欠損する。刃部は直線により構成される。側面の形態から全体形状はバチ形を呈するものと思われる。一部に自然面を残している。図28-29は比較的厚めの剥片を素材としている。刃部は片面調整が施されている。石質は2点共珪質頁岩。

6 石核（図28-30～32）

3点出土している。図28-30は色調が黒色を呈し、一部に自然面を残している。石質は珪質頁岩。図27-3の石鏃及び図27-9の石槍の母材とも考えられる。図28-31は約半分自然面を残している。残存部からは大型剥片の採取は望めない。石質は珪質頁岩。図28-32は全面に剥離痕を残し、こちらも残存部からは大型剥片の採取は望めない。石質は珪質頁岩。

7 磨製石斧（図28-33）

1点出土している。図28-33は刃部及び基部の末端を欠損する。擦り切りにより作り出され片面に稜を持ち、もう片面は平滑に作られている。側面には横～斜方向の擦痕が認められる。石質は凝灰質砂岩。

8 敲磨器類（図29～31-34～52）

19点出土している。本遺跡から出土した敲磨器類にみられる使用痕跡には磨痕、凹痕、敲打痕、火切り痕の四つがあり、単独やこれらの組み合わせによりⅠ～Ⅵ類に分類した。

I類：磨痕を有するもの。図29-34・35の2点が出土している。34は台形状の長辺の扁平な側面を磨り面として利用している。縦方向の磨り痕が認められる。磨り面の一部及び側面に暗赤紫色

の付着物を有する。35は比較的大型の礫を利用している。磨り面は2面である。石質は2点共凝灰岩。

II類：凹痕・火切り痕をもつもの。図29-36～41・図30-42～44の9点出土している。

- A. 1面に凹痕を有するもの。図29-36・37の2点出土している。石質は全て凝灰岩。
- B. 2面に凹痕を有するもの。図29-38～42の5点出土している。石質は全て凝灰岩。
- C. 凹痕を3面以上有するもの。図30-43が1点出土している。凹痕は4面に確認された。石質は凝灰岩。
- D. 火切り痕を有するもの。図30-44が1点出土している。火切り痕は1箇所確認できた。2面に凹痕を有する。石質は砂岩。

II類：磨痕+凹痕をもつもの。図30-45・46の2点出土している。45は欠損品で凹痕が2面、磨り面が1面認められる。石質は凝灰岩。46は凹痕が2面認められ、扁平な1面を磨り面として利用している。石質は凝灰岩。

III類：磨痕+敲打痕をもつもの。図30-47～49の3点出土している。47は磨り面が1面と端部全面に敲打痕が認められる。石質は凝灰岩で欠損品である。48も欠損品で形状は円礫になるものと思われる。残存部に磨り面が2箇所、敲打痕が1箇所認められる。石質は凝灰岩。49は磨り面が1面と端部全面に敲打痕が認められる。欠損品で石質は凝灰岩。

IV類：凹痕+敲打痕をもつもの。1点出土している。図31-50は2面に凹痕が認められ、敲打痕は側面に1箇所確認できた。石質は凝灰岩。

V類：磨痕+凹痕+敲打痕をもつもの。2点出土している。図31-51は磨り面が1面、凹痕が4面、敲打痕が1箇所に認められる。石質は流紋岩。図31-52は磨り面が1面、凹痕が3面、敲打痕は1箇所認められる。石質は凝灰岩。

9 石皿（図31-53～55）

3点出土している。形状の違いにより以下に分類する。

I類：周縁を作り出しているもの。図31-53・54の2点が出土している。53は比較的小型で硯状を呈している。54は大型で片面に凹痕を有する。石質は2点共凝灰岩。

II類：周縁を作り出さないもの。1点出土している。図31-55は2面に使用痕を有する。石質は凝灰岩

10 石製品（図31-56）

石錘が1点出土している。図31-56は扁平な楕円礫の長軸側の両端部を数回打ち欠いて抉り部を作り出している。一部に磨り痕を残している。石質は凝灰岩。

（笹森）

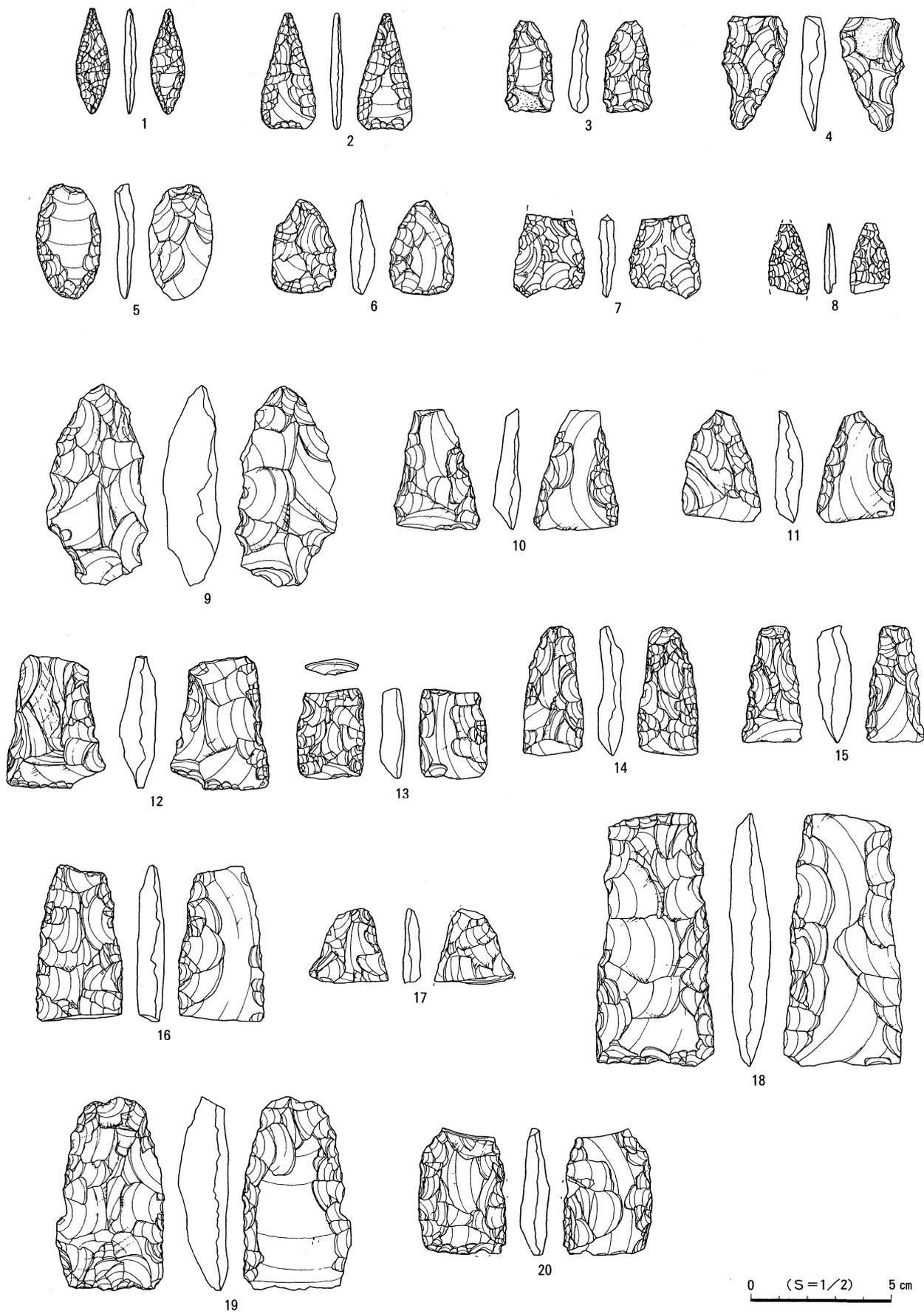


図27 出土遺物 石器 1

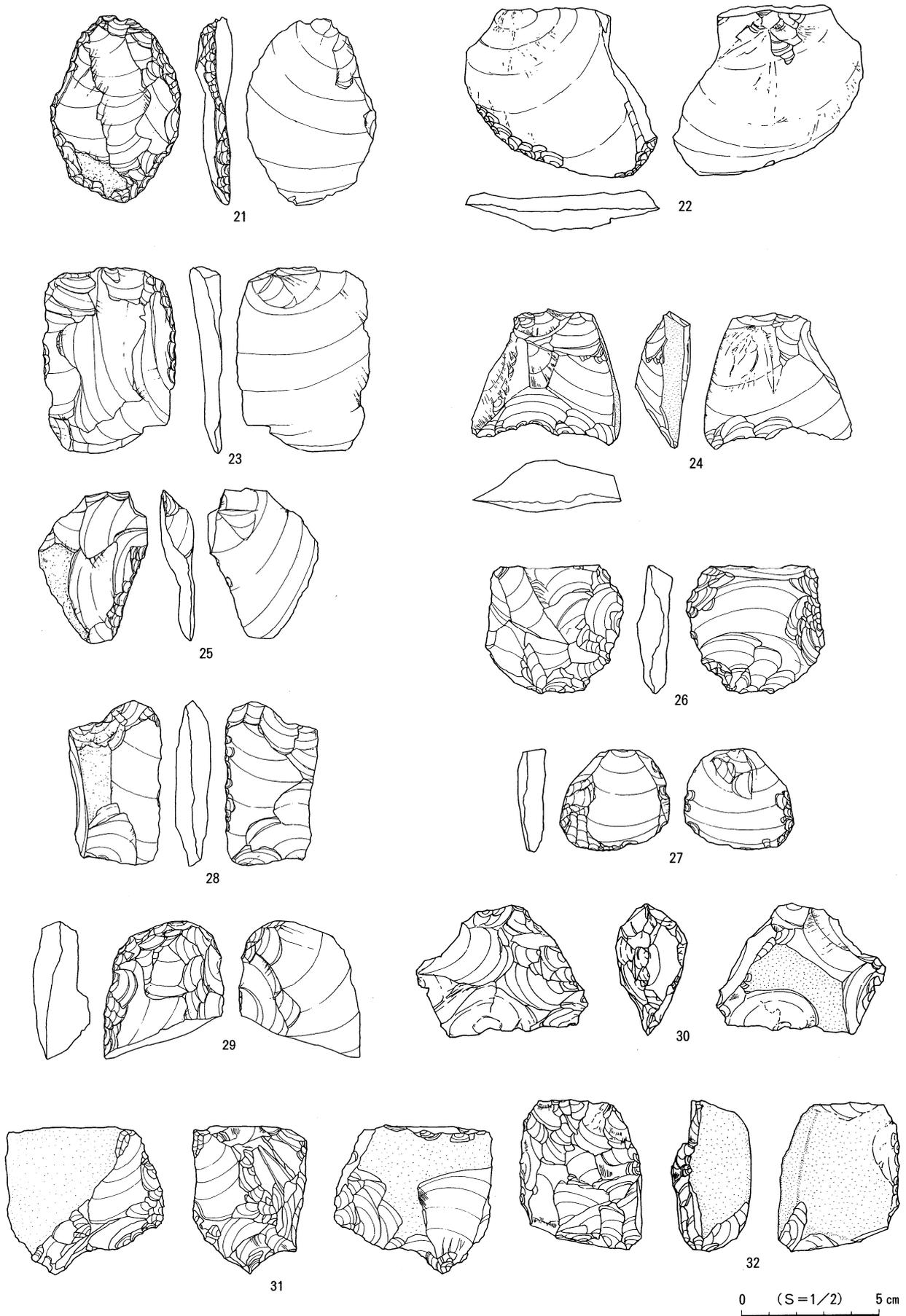


図28 出土遺物 石器 2



図29 出土遺物 石器 3



図30 出土遺物 石器 4

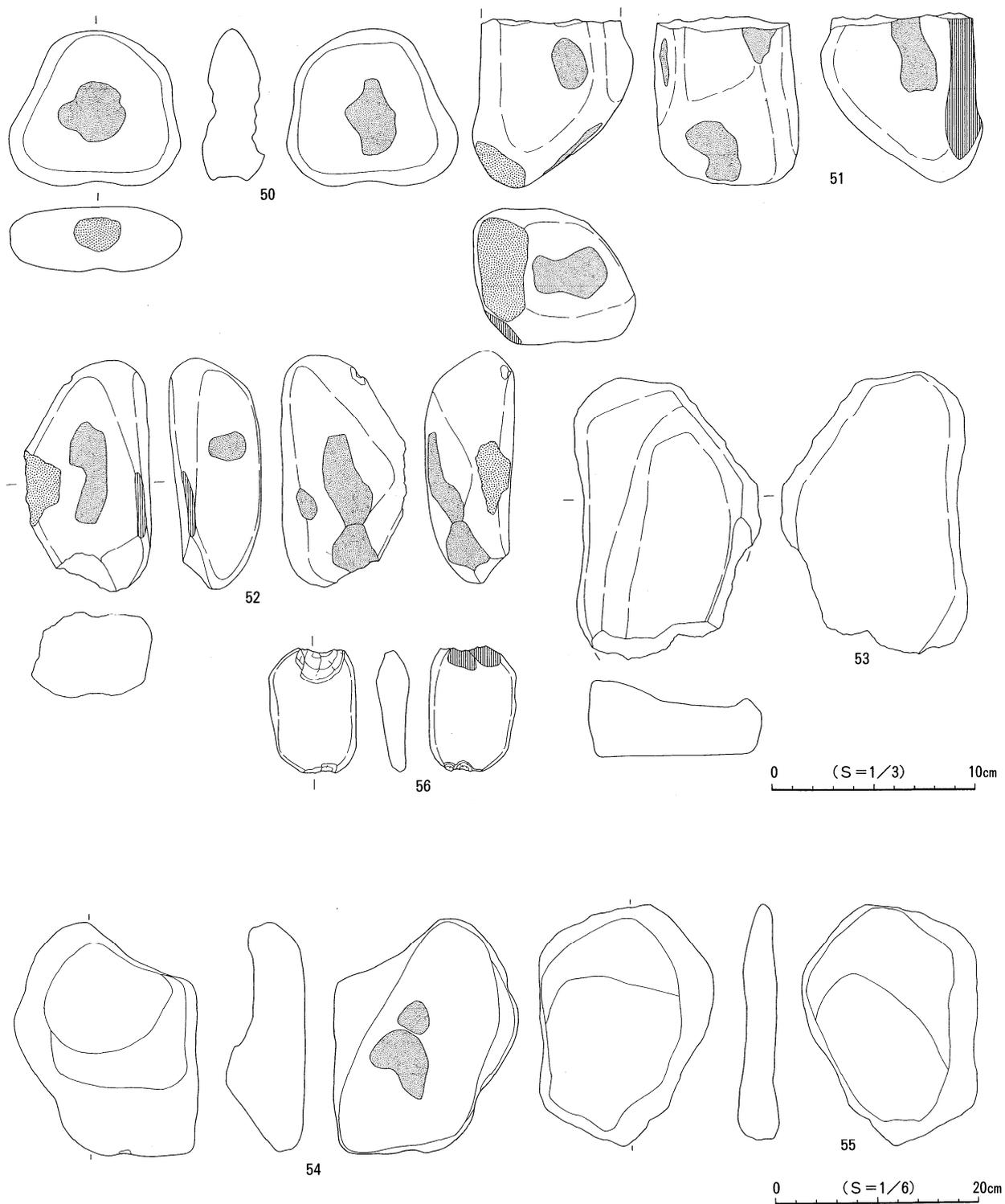


図31 出土遺物 石器 5・石製品

4 金属製品

金属製品は遺構外より蹄鉄、形状不明の鉄製品、鉄砲玉、銭貨、煙管が出土している。以下遺物毎に記述する。

1 蹄鉄 (図32-1)

1点出土している。遺存状態は比較的良好で、釘穴も部分的に認められる。先端部が一部湾曲している。装蹄時のズレを防ぐための返しと思われる。蹄鉄技術は幕末から明治にかけて欧米から伝わり、一般に普及したのは明治以降である。従って1の所産時期も明治以降と考えられよう。蹄鉄は本遺跡に近接する桜ヶ峰(2)遺跡でも、近代道跡の硬化面上から1点出土している。

2 不明鉄製品 (図32-2)

1点出土している。断面形状は片刃状を呈しているが、刃部の有無は確認できなかった。現状では三叉状になっているが、全て端部と思われる部分を欠損するため全体形状も不明である。所産時期は古代以降と考えられるが詳細は不明である。

3 鉄砲玉 (図32-3)

火縄銃の鉄砲玉と思われる丸玉が1点出土している。3の大きさは直径13mm、重さ11.5gで、ほぼ球形を呈している。表面中心にはバリが認められ未使用品と考えられる。色調は灰色を呈し、成分分析は行っていないが材質は鉛、或いは鉛の合金と思われる。同様のものは弘前城三の丸庭園から3点、浪岡町浪岡城跡から6点、平賀町大光寺新城跡から16点、鱈ヶ沢町大平(5)遺跡から8点出土している。所産時期は鉄砲伝来以降、おそらく近世以降と考えられよう。

4 銭貨 (図32-4・5)

寛永通宝が緩斜面部から2点出土している。いずれも無背の新寛永であり、18世紀以降の比較的新しい時期のものと考えられる。

5 煙管 (図32-6 a・b)

同一個体と思われる煙管が出土している。火皿・雁首は、ほぼ完全な形で残っている。首部は1枚の銅板を巻いて製作されている。腐食はそれほど進んでいない。表面は無地で装飾は施されない。吸い口も雁首同様完全な形で残っている。どちらにもラウが一部残存しており、断面観察から材質は竹材の可能性が高い。全体形状から江戸中期以降の所産と考えられる。

(笹森)

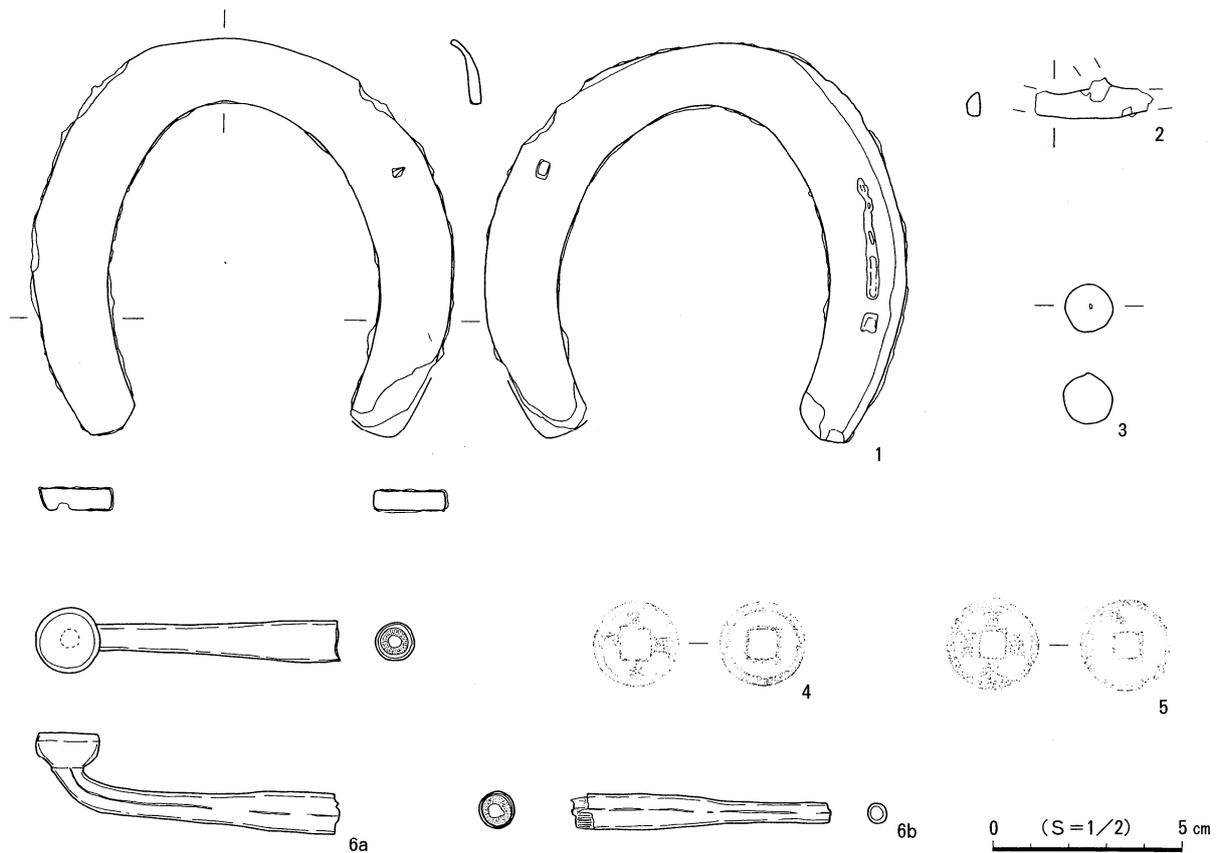


図32 出土遺物 金属製品

土 器 (縄文時代)

内面調整略号：1～ナデ 2～横方向ナデ 3～縦方向ナデ 4～斜方向ナデ 胎土略号：A～石英 B～繊維 C～小礫 D～海綿骨針

図番号	分類	出土地点	層位	器種	部位	外面地文・文様	内面調整	胎土	備考	整理番号
21-1	I	E - 114	II b	鉢?	口	横方向5列右上がり爪形刺突	不明	AC	器表面摩滅、遺存状態不良	241
21-2	II-1	F - 113	II b	深鉢	口	横方向3列刺突、斜方向貝殻腹縁圧痕	1	AC	左右不均等の波状口縁、口唇部B斜方向a	213
21-3	II-1	G - 113	II b	深鉢	口	横方向3列?刺突、斜方向貝殻腹縁圧痕	1	ABC	胎土軟質、左右不均等の波状口縁、口唇部B斜方向a	240
21-4	II-1	E - 117	II b	深鉢	口	横方向3列刺突、斜方向貝殻腹縁圧痕	1	ACD	口唇部B斜方向a	7
21-5	II-1	E - 114	II b	深鉢	口	横方向3列刺突	1	ABC	口唇部B斜方向a	237
21-6	II-1	F - 113他	II b	深鉢	口胴	横方向3列刺突、斜方向貝殻腹縁圧痕	1	AC	左右不均等の波状口縁、口唇部A斜方向a	6
21-7	II-1	-	表探	深鉢	口	横方向2列刺突、斜方向貝殻腹縁圧痕	1	ABC	口唇部A斜方向a、遺存状態不良	235
21-8	II-1	E - 112	II b	深鉢	口	鋭利な横方向2列刺突、横方向貝殻腹縁圧痕	1	AD	口唇部C矢羽状c、補修孔両側穿孔	239
21-9	II-1	E - 123	II b	深鉢	口	横方向3列刺突、斜方向貝殻腹縁圧痕	1	AC	口唇部B斜方向a、胎土軟質	322
21-10	II-1	D - 123	II b	深鉢	口	横方向ナデ、横方向2列刺突	3	ABCD	口唇部A斜方向a	238
21-11	II-1	D - 122	II b	深鉢	口	横方向ナデ、横方向3列刺突	2	ABC	口唇部A斜方向a、胎土軟質	232
21-12	II-1	G - 114	II b	深鉢	胴	鋭利な横方向2列刺突、弱い横方向貝殻腹縁圧痕、斜方向条痕	1	ACD	刺突深く鋭利	233
21-13	II-1	F - 117	II b	深鉢	口	斜方向貝殻腹縁圧痕	不明	ABC	口唇部C斜方向c細かい押圧、胎土軟質、器面摩滅	38
21-14	II-1	E - 113	II b	深鉢	口	斜方向貝殻腹縁圧痕	1	AC	口唇部C斜方向c、胎土軟質	335
21-15	II-1	E - 113	II b	深鉢	口	条痕→横方向貝殻腹縁圧痕	1	ABC	口唇部B斜方向b、焼成良好	234
21-16	II-1	D - 113	II b	深鉢	口	横、斜方向貝殻腹縁圧痕	1	AC	口唇部B斜方向b、焼成良好	236
21-17	II-1	E - 113	II b	深鉢	口	横方向貝殻腹縁圧痕	1	AB	口唇部B斜方向b、焼成良好	231
21-18	II-1	D - 113	II b	深鉢	口	横、縦方向貝殻腹縁圧痕	1	ABC	口唇部B斜方向a	345
21-19	II-1	E - 113	II b	深鉢	口	横、鋸歯状貝殻腹縁圧痕	1	ABC	口唇部C斜方向a	230
21-20	II-2	E - 113	II b	深鉢	口	横方向単軸絡条体圧痕と貝殻腹縁圧痕を交互に施文	1	A	口唇部斜方向単軸絡条体圧痕	30
21-21	II-2	E - 113	II b	深鉢	口	横方向単軸絡条体圧痕	1	ABC	口唇部斜方向単軸絡条体圧痕、口縁波状?	245
21-22	II-2	E - 113	II b	深鉢	口	横方向貝殻腹縁圧痕と単軸絡条体圧痕を交互に施文	1	AC	口唇部斜方向単軸絡条体圧痕	338
21-23	II-3	F - 115	II b	深鉢	口	縦、横方向貝殻腹縁押引	1	ABC	口唇部斜方向貝殻腹縁押引、焼成良好	328
21-24	II-3	E - 124	II b	深鉢	口	横方向貝殻腹縁押引	1?	ABC	口唇部斜方向貝殻腹縁圧痕	137
21-25	II-3	D - 123	II b	深鉢	口	横方向貝殻腹縁押引	1	AC	口唇部斜方向貝殻腹縁押引、石英多量混入	143
21-26	II-3	E - 125	II b	深鉢	口	横方向貝殻腹縁押引	1	AC	口唇部斜方向貝殻腹縁押引	142
21-27	II-3	E - 113	II b	深鉢	口	横方向貝殻腹縁押引	1	ACD	約1cm幅の細かい波状の貝を使用	339
21-28	II-4	D - 114	II b	深鉢	口	2条横走細沈線→斜方向貝殻腹縁圧痕	1	AC	焼成良好	39
22-1	II-1	E - 113他	II b	深鉢	胴	縦方向、下部は横方向貝殻腹縁圧痕	1	ABC	厚手、小礫多量混入、胎土分析№1	1
22-2	II-1	E - 113	II b	深鉢	胴	横、斜方向貝殻腹縁圧痕	1	ABC	焼成良好、堅緻	22
22-3	II-1	E - 114	II b	深鉢	胴	横、斜方向貝殻腹縁圧痕	1	ABC	焼成良好、堅緻	21
22-4	II-1	E - 113	II b	深鉢	胴	縦、横方向貝殻腹縁圧痕	1	ABC	焼成良好、堅緻	23
22-5	II-1	D - 113他	II b	深鉢	胴	縦、横方向貝殻腹縁圧痕	1?	ABC	胎土軟質、小礫多量混入	261
22-6	II-1	E - 114	II b	深鉢	胴	縦、横方向貝殻腹縁圧痕	1	ABC	二次被熱による変色、胎土分析№3	67
22-7	II-1	D - 112	II b	深鉢	胴	横方向貝殻腹縁圧痕	1	ABC	焼成良好	219
22-8	II-1	D - 113	II b	深鉢	胴	縦方向貝殻腹縁圧痕、条痕有	1	ABC	補修孔両側穿孔、小礫多量混入	217
22-9	II-1	E - 123	II b	深鉢	胴下	横→縦方向貝殻腹縁圧痕	1	AC	胎土赤色粒混入、内面器面荒れ	221
22-10	II-5	G - 114	II b	深鉢	底	横方向貝殻腹縁押引	-	ABC	尖底、先端まで施文	3
22-11	II-5	M - 126	II b	深鉢	底	ナデ	1	ABC	尖底	324
22-12	II-5	G - 112	II b	深鉢	底	ケズリ痕明瞭	3	-	尖底、焼成良好、堅緻、酸化鉄粒混入、赤色粒混入	323
22-13	II-6	N - 132他	II b他	深鉢	口	鋭利な工具による5列横方向刺突、下部縦方向刺突	1	AB	第I群と異なり刺突幅細く列が不規則	334
22-14	II-6	P - 133	I	深鉢?	胴	横方向ナデ→右上がり2列爪形刺突	2	ABC	刺突まわりの粘土めくれる	29
22-15	II-7	E - 112	II b	深鉢?	胴	縦方向LR	LR	BC	表裏縄文施文、焼成良好、堅緻	343
22-16	II-8	E - 113	II b	深鉢	胴	縦方向ナデ	3	CD	焼成良好、胎土酸化鉄粒混入、胎土分析№2	325
22-17	II-8	E - 112	II b	深鉢	胴	ナデ	1	ABC	胎土軟質、弾け有	349
22-18	II-9	F - 114	II b	深鉢?	口	斜方向条痕	2	A	口唇部指頭圧痕による連続押圧、小波状口縁	57
22-19	II-9	E - 113	II b	深鉢	胴	斜方向粗い横ナデ	2	AC	内面横方向条痕	177

桜ヶ峰(1)遺跡

図番号	分類	出土地点	層位	器種	部位	外面地文・文様	内面調整	胎土	備考	整理番号
22-20	Ⅲ-1	F - 113	Ⅱb	深鉢	口	横方向結節回転文	2	BD	区画に隆帯貼付、隆帯上側面圧痕	319
22-21	Ⅲ-1	D - 111	Ⅱb	深鉢	胴	縦方向多軸絡条体	1	BD	摩滅顕著、脆い	336
22-22	Ⅲ-2	F - 112	Ⅱb	深鉢	口	単軸絡条体第1A類側面圧痕	ミガキ	BD	胎土軟質、口唇部内削ぎ	244
22-23	Ⅲ-2	D - 112	Ⅱb	深鉢	口	結節第1種RL+LR、斜方向RL	ミガキ	ABD	焼成良好	26
22-24	Ⅲ-2	E - 113	Ⅱb	深鉢	口	口縁部下3条L側面圧痕	ミガキ	AB	口唇部一部平坦、スス付着	24
22-25	Ⅲ-2	N - 125	I	深鉢	口	横方向単軸絡条体第1A類	1	BCD	口唇部縦方向単軸絡条体側面圧痕?	347
22-26	Ⅲ-2	D - 112	Ⅱb	深鉢	口	横方向RL側面圧痕	ミガキ	AD	口唇部斜方向縄側面圧痕	242
22-27	Ⅲ-2	D - 123	Ⅱb	深鉢?	胴	縦方向結節回転文、RL	ミガキ	ABCD	胎土小礫多量混入	243
22-28	Ⅲ-2	N - 128	Ⅱb	深鉢	胴	縦方向単軸絡条体第5類	1?	BCD	弾け有	250
22-29	Ⅲ-2	M - 128	Ⅱb	深鉢	胴	縦方向単軸絡条体第5類	ミガキ	ABD	胎分No5、繊維多量混入	247
23-1	Ⅲ-1	J - 113他	覆土	深鉢	胴底	横~斜方向RL	1	ABCD	土器埋設遺構出土、胎土軟質、上げ底	136
23-2	Ⅲ-1	J - 113他	覆土	深鉢	口	横方向結節回転文、区画隆帯貼付、隆帯上部側面圧痕、胴部横方向RL	2	ABCD	土器埋設遺構出土、胎土軟質、胎土分析No4	132
23-3	Ⅲ-1	J - 113他	覆土	深鉢	胴	横~斜方向RL	3	ABCD	土器埋設遺構出土、胎土軟質	134
23-4	Ⅲ-1	J - 113他	覆土	深鉢	胴	横方向RL	1	ABCD	土器埋設遺構出土、胎土軟質、摩滅顕著	128
23-5	Ⅲ-1	J - 113他	覆土	深鉢	胴	横方向RL	1	ABCD	土器埋設遺構出土、胎土軟質	131
23-6	Ⅲ-1	J - 113他	覆土	深鉢	胴	横方向RL	1	ABCD	土器埋設遺構出土、胎土軟質	129
24-1	Ⅲ-2	E - 112他	Ⅱb	深鉢	口胴	単軸絡条体側面圧痕、頂部から隆帯垂下、上面刻み、角棒状工具連続刺突、縦方向多軸絡条体	2	C	波状口縁、口唇部斜方向縄側面圧痕	342
24-2	Ⅲ-2	F - 112他	Ⅱb	深鉢	口胴	横方向単軸絡条体圧痕、連続刺突、縦方向多軸絡条体、口縁部縦方向隆帯貼付、上部縄圧痕	2	C	口唇部斜方向縄側面圧痕、胎土分析No7	351
24-3	Ⅲ-2	F - 112	Ⅱb	深鉢	底	縦方向多軸絡条体	2	C	弾け有、胎土分析No6	116
24-4	Ⅳ-1	D - 110	Ⅱb	深鉢	口	横方向LR側面圧痕→ボタン状突起貼付	1	ACD	波状口縁、口唇部斜方向縄側面圧痕	42
24-5	Ⅳ-1	E - 113他	Ⅱb	深鉢	胴	横方向結束第1種RL+RL	ミガキ	BD	内面丁寧な縦方向ミガキ	163
24-6	Ⅳ-2	F - 113	Ⅱb	深鉢	胴	縦方向LR	3	ABCD	小礫多量混入	202
24-7	Ⅳ-2	F - 112	Ⅱb	深鉢	底	横方向ミガキ	4	ACD	焼成良好、小礫多量混入	327
24-8	Ⅳ-2	E - 112	Ⅱb	深鉢	胴	横方向RL	2	ACD	二次焼熟による弾け	209
24-9	V-1	J - 108	Ⅱb	鉢?	胴	ミガキ→横走沈線間横方向LR充填	ミガキ	AC	薄手	276
24-10	V-1	F - 112	Ⅱb	鉢	胴	斜方向RL	ミガキ	D	胎土精選、内面黒色	346
24-11	V-1	D - 112	Ⅱb	鉢	胴	斜方向RL	ミガキ	D	胎土精選、内面赤彩	344
24-12	V-1	J - 105	Ⅱb	壺	口	丁寧なナデ	1	AC	口唇部形態隅丸方形	331
24-13	V-1	O - 131	I	壺	口胴	口縁部横ナデ、丁寧なナデ	4	AC	胎土硬質、胎土分析No11	332
24-14	V-1	H - 110	Ⅱb	鉢	口胴	横走沈線、胴部突起貼付	2	CD	口唇内面横走沈線、内面スス付着	286
24-15	V-1	N - 134	Ⅱb他	台付鉢	胴台	ナデ工具痕明瞭	1	AC	台部と脚部で明瞭な剥離、外面スス付着	310
24-16	V-2	M - 104	Ⅱb	深鉢	口	横方向LR→口唇下3条横走沈線	2	AC	弾け有、胎土分析No19と同一個体	287
24-17	V-2	M - 128	Ⅱb	深鉢	口	口唇下2条横走沈線	1	ACD	口唇部半截竹管による連続刺突、内面指頭圧痕	283
24-18	V-2	J - 106	Ⅱb	深鉢	口	横方向LR→口唇下3条横走沈線	2	ACD	胎土分析軟質、口唇部平坦、弾け有	282
24-19	V-2	O - 131	I	深鉢	胴	縦方向条痕文	3	ACD	薄手	316
24-20	V-2	P - 133	I	深鉢	胴	縦方向条痕文	3	AC	薄手、胎土分析No9	318
24-21	V-2	O - 132	Ⅱb	深鉢	胴	縦方向条痕文	3	AC	薄手、内面黒色	317
24-22	V-2	H - 119	Ⅱb	深鉢	胴	斜方向RL	2	ACD	胎土軟質、胎土分析No17と同一個体	112
24-23	V-2	O - 107	Ⅱb	深鉢	胴	横方向LR	2	AC	焼成良好、粘土層付着、内面粗いナデ	125
24-24	V-2	E - 124	Ⅱb	深鉢	口胴	横方向LR	2	AC	軟質	192
24-25	V-2	D - 123	Ⅱb	深鉢	口	横方向LR	2	A	口縁部内傾、口唇部平坦	193
24-26	V-1	N - 128	Ⅱb	深鉢	胴底	斜方向LR、胴下部2条横走沈線	1	ACD	焼成良好、海綿骨針多量混入	281
24-27	V-2	H - 110	Ⅱb	深鉢	底	斜方向LR	2	AC	胎土軟質、弾け有、底面ヘラケズリ	285
24-28	V-2	E - 124	Ⅱb	深鉢	底	横方向LR	2	ACD	胎土軟質	289

土器(弥生時代)

内面調整略号: 1~ナデ 2~横方向ナデ 3~縦方向ナデ 4~斜方向ナデ 胎土略号: A~石英 B~繊維 C~小礫 D~海綿骨針

図番号	分類	出土地点	層位	器種	部位	外面地文・文様	内面調整	胎土	備考	整理番号
25-1	VI	D - 113他	II b	甕	口胴	横方向0段多条、横走細沈線、鋸齒文?	2	AC	口唇部平坦0段多条施文、胎土分析№14と同一個体、外面スス付着	127
25-2	VI	D - 113	II b	甕	底	斜方向RL→底部付近縦方向RL	3	AC	底面ナデだが一部縄文が残る、胎土分析№16、石英多量混入	128
25-3	VI	F - 114他	II b	甕?	口胴	斜方向0段多条、沈線による重菱形文、菱形頂点部分に強い刺突	2	AC	口唇部棒状工具による交互押圧、小波状口縁、口縁内部に沈線文	60
25-4	VI	F - 114	II b	甕?	口胴	横~斜方向0段多条、沈線による重菱形文、菱形頂点部分に強い刺突	2	ACD	小波状口縁、口縁内側に沈線文、口唇部棒状工具による交互押圧、火掛け有、薄手、胎土分析№13	291
25-5	VI	E - 112他	II b	甕	口胴	斜方向0段多条	2	ACD	口唇部連続指頭圧痕、内面弾け、スス多量付着、胎土分析№18	59
25-6	VI	G - 113	II b	甕	口胴	斜方向RL	2,4	ACD	口唇部押圧による外側に捲くれ	104
25-7	VI	G - 113他	II b	甕	胴	斜方向RL	2,4	ACD	内面弾け有、輪痕顕著	284
25-8	VI	E - 114	II b	甕	胴	斜方向粗いナデ→縦走縞縄文	1	AC	スス付着、内外面弾け顕著	180
25-9	VI	F - 114	II b	壺?	胴底	斜方向RL底面まで施文	2	AC	底面中央に窪み、スス付着、胎土硬質、弾け有、胎土分析№20	123
25-10	VI	F - 115	II b	壺?	胴	斜方向RL底面まで施文	2	AC	胎土硬質、弾け有	296
25-11	VI	F - 112	II b	甕?	口胴	口縁部ナデ、胴部横方向RL	2	AC	薄手、焼成良好、堅緻、折返口縁	55
25-12	VI	G - 112	II b	甕?	口胴	口縁部ナデ、胴部横方向RL	2	AC	薄手、焼成良好、堅緻、折返口縁、胎土分析№12	56
25-13	VI	F - 112	II b	甕	胴	横、縦走縞縄文RL	2	AC	胎土軟質	340
25-14	VI	G - 112	II b	甕	胴	斜方向0段多条、下部は横走0段多条	2	C	焼成良好、堅緻	341

土器(時期不明)

内面調整略号: 1~ナデ 2~横方向ナデ 3~縦方向ナデ 4~斜方向ナデ 胎土略号: A~石英 B~繊維 C~小礫 D~海綿骨針

図番号	分類	出土地点	層位	器種	部位	外面地文・文様	内面調整	胎土	備考	整理番号
26-1	VII	D - 112他	II b	深鉢	口胴	横方向RL、波状、隅丸方形、楕円形2条沈線文	2	ACD	薄手、海綿骨針多量混入、胎土分析№15	43
26-2	VII	D - 113	II b	深鉢	口	横方向RL、横走、逆U字2条沈線文	2	AD	薄手、海綿骨針多量混入	47
26-3	VII	D - 113他	II b	深鉢	胴	斜方向RL、波状、隅丸方形2条沈線文	4	ACD	薄手、海綿骨針多量混入	45
26-4	VII	D - 113他	II b	深鉢	胴	斜方向RL	2,3	ACD	薄手、海綿骨針多量混入	103
26-5	VII	E - 113他	II b	深鉢	胴	横方向RL、横走、逆U字2条沈線文	1	ACD	薄手、海綿骨針多量混入、内面ヘラ工具痕明瞭	44
26-6	VII	D - 112他	II b	深鉢	口	横方向RL	1	ACD	折返口縁、口唇部平坦、弾け有	337
26-7	VII	H - 112	II b	深鉢	口	横方向RL	2	ACD	折返口縁、口唇部平坦、弾け有	51
26-8	VII	E - 113他	II b	深鉢	胴	横方向RL	1	ACD	輪痕明瞭、弾け顕著、胎土分析№1	66
26-9	VII	D - 112	II b	深鉢	口	横方向RL→横走沈線	1	ACD	口唇部隅丸、平坦面がキ	350
26-10	VII	D - 112	II b	深鉢	胴	横方向RL→縦方向2条沈線	4	AC	内面調整26-1~5に似る	140
26-11	VII	F - 115	II b	深鉢	底	横方向RL、胴下部ヘラナデ	1	ACD	底面ヘラナデ、内面弾け有、スス付着、胎土軟質	292
26-12	VII	F - 115	II b	深鉢	口胴	横方向RL→口唇下2条横走沈線	1	ACD	胎土軟質、摩滅顕著	288
26-13	VII	F - 115	II b	深鉢	胴	縦方向沈線	1	ACD	胎土軟質、摩滅顕著、内面弾け有、スス付着	61
26-14	VII	D - 111他	II b	深鉢	胴	丁寧なナデ	2	ACD	焼成良好	329
26-15	VII	O - 126	II b	深鉢	胴	縦方向丁寧なナデ	3	ABC	内外面繊維痕多量	167
26-16	VII	D - 111	II b	ミニチュア	口胴	ヘラナデ	2	ACD	折返口縁、口縁部肥厚	294
26-17	VII	D - 113	II b	ミニチュア	口胴	横方向指ナデ	2	AC	折返口縁、輪痕明瞭	326
26-18 復元図	VII	E - 113	II b	深鉢	底	胴部横方向RL	1	ACD	粘土板に積上げた部分が明瞭な剥離、底部外面剥離	348

須恵器(平安時代)

内面調整略号: 1~ロクロナデ

図番号	種類	出土地点	層位	器種	部位	外面調整	内面調整	胎土	備考	計測値 (cm)			整理番号
										口径	最大径	器高	
25-15	須恵器	F - 115	II b	長頸壺	口	ロクロナデ	1	D	内面釉付着、内部酸化焼成、堅緻	-	-	-	321
25-16	須恵器	I - 113	II b	長頸壺	口	ロクロナデ	1	C	内面釉付着、内外面還元焼成、堅緻	-	-	-	320
25-17	須恵器	P - 129	II b	甕	胴	平行叩目	1?	CD	内外面還元焼成、胎土分析№10	-	-	-	15
25-18	須恵器	F - 114	II b	長頸壺	胴底	ロクロナデ	1	D	内外底面釉付着、内部酸化焼成、堅緻	-	-	-	17

桜ヶ峰(1)遺跡

石器・石製品

図版番号	出土位置	層位	遺存度	器種	分類	石質	計測値				備考	整理番号
							長(mm)	幅(mm)	厚(mm)	重(g)		
図-27-1	F-114	IIb	1	石鏃	1-I	黒曜石	38	12	4	1.6		P-374
図-27-2	F-113	IIb	1	石鏃	1-II	珪質頁岩	41	19	4	2.2	未製品?	298-a
図-27-3	G-113	IIb	1	石鏃	1-III	珪質頁岩	40	22	5	5.8	未製品・被熱	851
図-27-4	F-113	IIb	1	石鏃	1-III	珪質頁岩	33	23	8	6.0	未製品	854
図-27-5	E-114	IIb	1	石鏃	1-III	珪質頁岩	32	28	6	4.5	未製品	488
図-27-6	M-106	IIb	1	石鏃	1-III	珪質頁岩	40	21	8	7.1	未製品	74
図-27-7	F-114	IIb	2	石鏃	1-III	珪質頁岩	(30)	(25)	7	(4.9)	未製品・欠損品	523
図-27-8	E-112	IIb	2	石鏃	1-IV	珪質頁岩	(26)	(14)	4	(1.1)	欠損品	105-b
図-27-9	F-114	IIb	1	石槍	2	珪質頁岩	71	35	19	40.0	未製品	542
図-27-10	D-112	IIb	1	トランシェ様	3-I-A	珪質頁岩	43	30	9	14.9	光沢部	40
図-27-11	D-113	IIb	1	トランシェ様	3-I-A	珪質頁岩	38	27	9	10.0		430
図-27-12	F-115	IIb	1	トランシェ様	3-I-B	珪質頁岩	48	35	13	18.2		848
図-27-13	I-110	IIb	2	トランシェ様	3-I-C	珪質頁岩	(31)	24	9	(8.0)	光沢部	267
図-27-14	E-111	IIb	1	トランシェ様	3-II	珪質頁岩	46	21	9	9.5		731-b
図-27-15	D-113	IIb	1	トランシェ様	3-II	珪質頁岩	42	21	11	10.1		813
図-27-16	F-113	IIb	2	トランシェ様	3-III	珪質頁岩	(53)	30	9	(20.0)	光沢部	324-b
図-27-17	F-114	IIb	2	トランシェ様	3-III	珪質頁岩	(26)	(28)	6	(4.6)		530
図-27-18	D-112	IIb	1	篋状	4-I	珪質頁岩	91	42	13	61.5		55
図-27-19	N-106	IIb	1	篋状	4-II	珪質頁岩	68	38	18	44.6		1
図-27-20	M-105	IIb	1	篋状	4-II	珪質頁岩	44	31	9	15.7	光沢部	23
図-28-21	I-118	IIb	1	不定形	5-I	珪質頁岩	68	46	13	30.4	削器	15
図-28-22	E-115	IIb	1	不定形	5-II	珪質頁岩	62	70	15	61.4	削器	661
図-28-23	E-112	IIb	1	不定形	5-II	珪質頁岩	67	48	10	28.8	削器	74-a
図-28-24	G-114	IIb	1	不定形	5-II	珪質頁岩	50	54	19	46.8	ノッチ状刃部	569
図-28-25	E-112	IIb	1	不定形	5-II	珪質頁岩	54	39	12	14.0	削器	120
図-28-26	D-113	IIb	1	不定形	5-II	珪質頁岩	47	49	13	29.0	削器	820
図-28-27	E-112	IIb	1	不定形	5-II	珪質頁岩	36	39	9	13.7	搔器?	132
図-28-28	G-110	IIb	2	不定形	5-III	珪質頁岩	59	(30)	11	(20.0)	削器	800
図-28-29	I-110	IIb	2	不定形	5-III	珪質頁岩	(42)	(42)	19	(13.7)	削器	281
図-28-30	L-108	IIb	1	石核	6	珪質頁岩	48	72	26	59.3		106
図-28-31	I-114	IIb	1	石核	6	珪質頁岩	53	58	41	128.0		314
図-28-32	J-112	IIb	1	石核	6	珪質頁岩	55	44	29	79.2		163
図-29-33	G-113	IIb	2	磨製石斧	7	凝灰質砂岩	(32)	(30)	9	(15.3)	擦り切り	259
図-29-34	I-110	IIb	1	磨	8-I	凝灰岩	107	47	12	90.6	1面	268
図-29-35	J-113	IIb	1	磨	8-I	凝灰岩	136	99	67	797.0	2面	317
図-29-36	E-112	IIb	1	凹	8-II-A	凝灰岩	134	84	63	1012.5	凹1面	78
図-29-37	J-114	IIb	1	凹	8-II-A	凝灰岩	161	158	96	2690.0	凹1面	235
図-29-38	D-112	IIb	1	凹	8-II-B	凝灰岩	106	101	50	538.9	凹2面	38
図-29-39	I-107	IIb	1	凹	8-II-B	凝灰岩	91	54	28	126.7	凹2面	132
図-29-40	E-112	IIb	2	凹	8-II-B	凝灰岩	(98)	93	56	(622.9)	凹2面	113
図-30-41	F-114	IIb	1	凹	8-II-B	凝灰岩	117	68	36	375.1	凹2面	555
図-30-42	I-113	IIb	1	凹	8-II-B	凝灰岩	114	75	42	322.3	凹2面	315
図-30-43	F-116	IIb	1	凹	8-II-C	凝灰岩	100	78	66	568.9	凹4面	653
図-30-44	J-107	IIb	2	火切	8-II-D	砂岩	(82)	57	27	(81.0)	凹2面	150
図-30-45	H-115	IIb	2	磨・凹	8-III	凝灰岩	(92)	73	54	(352.2)	凹2面	601
図-30-46	F-113	IIb	1	磨・凹	8-III	凝灰岩	123	54	27	257.8	凹2面	292
図-30-47	G-115	IIb	2	磨・蔽	8-IV	流紋岩	(110)	74	66	(605.0)	磨1面・端部蔽	616
図-30-48	G-114	IIb	2	磨・蔽	8-IV	凝灰岩	(44)	85	37	(127.3)	磨1面・蔽2箇所	573
図-30-49	K-107	IIb	2	磨・蔽	8-IV	凝灰岩	(67)	60	(42)	(232.6)	磨1面・蔽1箇所	147
図-31-50	D-115	IIb	1	蔽・凹	8-V	凝灰岩	73	87	34	222.4	凹2面・蔽1箇所	681
図-31-51	F-113	IIb	2	磨・蔽・凹	8-VI	流紋岩	(84)	72	80	(508.5)	磨1・蔽1・凹4	302
図-31-52	I-135	I	1	磨・蔽・凹	8-VI	凝灰岩	111	63	47	304.0	磨1・蔽1・凹3	178
図-31-53	H-120	IIb	2	石皿	9-I	凝灰岩	(140)	91	40	(575.5)	1面使用	345
図-31-54	E-112	IIb	1	石皿	9-I	凝灰岩	234	182	78	3180.0	1面使用・凹1面	79
図-31-55	J-113	IIb	1	石皿	9-II	凝灰岩	246	175	40	2212.0	2面使用	319
図-31-56	G-115	IIb	1	石鏟	10	凝灰岩	62	42	15	46.9	一部磨り	628

※遺存度 1完形 2欠損 ()は現存値

金属製品

図番号	種類	出土地点	層位	器種	備考	計測値 (cm)			重量 (g)	整理番号
						長さ	幅	厚さ		
32-1	鉄製品	M - 110	I	蹄鉄	完形 打ち込み釘残存 先端部湾曲	10.7	11.1	0.5	156.1	1
32-2	鉄製品	M - 125	II b	不明	三叉状	3.1	1.0	0.3	2.1	3
32-3	鉛製品	表探	I	鉄砲玉	切り落とした際のバリが残存	1.3	1.3	1.3	11.5	6
32-4	銭貨	M - 114	II b	寛永通宝	新寛永	2.3	2.2	0.1	2.1	4
32-5	銭貨	D - 112	II b	寛永通宝	新寛永	2.5	2.3	0.1	2.7	5
32-6a	銅製品	O - 106	I	煙管	完形 竹製羅字は差込部分のみ残存	7.9	1.7	2.6	12.8	2 a
32-6b				雁首	完形 竹製羅字は差込部分のみ残存	6.3	1.0	0.9	3.9	2 b

第3節 遺物出土状況

1 土器・金属製品

遺構に伴って出土した土器は、土器埋設遺構を除くと覆土内に流入した僅か5点である。それらの遺存状況は良好ではなく、提示に耐えられるものは存在しない。従って今回出土した土器は大半が遺物包含層からの出土となる。中でも丘陵頂部付近に広がる遺物集中地点からは土器、石器ともまとまった量の遺物出土を見た。本項では遺物集中地点での出土状況を中心に記載し、そこから導かれる各該当時期の空間利用状況についても述べていきたい。

図33は出土地点を記録した土器の分布図である。調査区東側の緩斜面地は空白部分が多くなっているが、調査前の利用状況がリング畑で、土地改変を大きく受けている部分である。従って表記以外にも表土層や攪乱等から一括取上を行ったものが存在する。まとまった出土は見られず、全て散漫な出土状況である。この他調査区中央の農道下にあたるE-124グリッド周辺に小規模ながらまとまりが見られる。この部分は農道脇にあたり、調査前の状況ではほぼ平坦面であったが、掘り下げると沢地形のように若干窪んだ状況が確認されており、遺物包含層である基本層序第Ⅱb層がその形状に合わせて残存していた部分である。その他調査区西側の崖線際にあたる部分にも散漫な出土状況が見取れる。

一見してE-113グリッドを中心とした3×3グリッド程の範囲を中心に分布の集中が見取れる。この部分を遺物集中地点と呼称する。この分布状況は礫・剥片のまとまりとほぼ合致している。礫・剥片の出土状況からは石器製作場から出た層の廃棄場所となっており、土器に関しても同様に廃棄場として考えることができる。しかし、出土資料の所産時期は様々であり、一遺物包含層に様々な遺物が混在している状況である。そこで遺物集中地点を中心に調査区内の各時期毎の出土状況と、そこから想定できる各期の空間利用状況について検討を行った。

縄文時代草創期 遺物集中地点から1点のみの出土であった。周辺からは縄文時代早期の土器を中心に出土しており、それらと混在している。八戸市櫛引遺跡では本来の遺物包含層より上層の早期土器廃棄ブロックに混在して出土する例もあることから、本遺跡の土器も何らかの理由で遺物集中地点に混入したものであると思われる。しかし遺物集中地点の下層にあたる第Ⅲ層にトレンチを設定して掘り下げを行ったが、遺物の出土は確認されなかった。また第Ⅲ層上面に第6号性格不明遺構が存在するが、詳細が不明であることが惜まれる。しかし本時期の土器は五所川原市域で初の出土であり、津軽地方で見ても爪形文土器の出土は弘前市独狐遺跡からの1点を見るだけである。前田野目台地における縄文時代の空白期を埋める意味でも、非常に貴重な資料と言えよう。今後周辺の調査事例増加に伴って資料数の増加が期待される。

縄文時代早期 本調査区内から出土した資料では最も多く出土している。出土は遺物集中地点に最も多く見られ、農道下のまとまりにも見られる。また緩斜面からは摩滅した資料が出土している。今回出土した土器は完形に復元されたものは存在せず、一個体の遺存率は非常に低い。図34に示した遺物出土地点の接合状況を見てみると、E-113グリッドを中心に、周囲に散乱している状況である。第1類は胎土等の観察からA～Eに分類したが、相関性を示すものは存在しない。各類毎でも同様である。

斜面の傾斜に沿った南北方向の接合線が比較的大きな動きを示すものも存在することから、これらの土器は出土地点で使用、廃棄されたものではなく、周辺（恐らく調査区北側丘陵頂部周辺）で使用後、調査区内に廃棄、流入したものと考えられる。これまでに前田野目台地上の縄文時代早期の土器は隈無（2）遺跡、隈無（4）遺跡、隈無（6）遺跡、隠川（2）遺跡外、隠川（4）遺跡、隠川（11）遺跡で出土しているが、この中で貝殻腹縁圧痕文が出土した遺跡は、いずれも沢や崖線際に立地する。いずれも遺構外からの出土であり、出土数も少ない。本群土器は五所川原地域においては初出となるものが大半である。本遺跡出土資料は比較的まとまった資料として貴重な資料であり、今後も前田野目台地地域において資料数の増加が期待される。

縄文時代前期 良好な資料として第1号埋設土器遺構に使用された円筒下層b式土器が1個体出土している。完全な復元はできなかったが、丘陵頂部から若干下った部分に設置されていることから、縄文時代早期とは異なる空間利用だったと考えられる。また、遺物集中地点からも破片が出土しているが出土数は非常に少ない。周辺遺跡の出土数から比べれば非常に少ない状況にあるが、摩滅や剥離は少なく、比較的遺存状況は良いものと思われる。従って丘陵上で何らかの活動が行われていた可能性が高い。また円筒下層d式も遺物集中地点からの出土を見ている。図24-1～3は遺物集中地点からまとめて出土している。接合分布はF-112、113グリッドを中心にみられ、早期とは異なった分布を示しているが、いずれも廃棄されたものと思われる。

縄文時代中期 円筒上層a式に比定される土器が遺物集中地点から出土している。しかし出土量が少なく、詳細は不明である。また、中期末かと思われる土器も遺物集中地点から出土しているが、時期不明土器との関連もあり、詳細は不明である。

縄文時代晩期 この時期の資料は若干丘陵上から出土しているが、多くは農道下の緩斜面から出土している。東側に隣接する桜ヶ峰（2）遺跡では遺構外出土だが本時期所産土器が最も多く出土しており、この時期の活動が本調査区と桜ヶ峰（2）遺跡間の沢部分に中心を置いていたと推察される。

弥生時代後期 該当資料は全て遺物集中地点から出土している。図36で示されるように、D-113、F-114、G-113に比較的まとまっており、縄文土器と異なった分布状況を示す。接合関係に大きな動きが見られるのは図25-1であるが、これらは小破片に壊れており、移動しやすい状況であったと考えられる。その他の資料も大きな動きをするものは小破片であり、後の影響によるものと思われる。このことから、これらの土器は遺物集中地点で廃棄され、その状態が比較的良好に保たれていた可能性が高い。弥生土器は前田野目台地上でも若干確認されているが小破片で、いずれも遺物包含層からの出土となっている。本遺跡も、遺構からの出土は確認されなかった。その中で弥生時代後期所産の土器は数が限定されるが、隣接する桜ヶ峰（2）遺跡から弥生時代後期に比定される撚糸文施文土器と、後北C1式に比定される土器が1点ではあるが出土している。また、南側に存在する真言館跡からは図25-3、4に類似する資料が認められる。遺構は確認されていないため詳細な内容に関しては不明であるが、本遺跡周辺において、該当時期前後に何らかの活動の存在が認められる。

時期不明土器 図37に出土状況を示した。図26-1～5がD-112、113グリッドを中心に南東方向に向かって破片が散乱しており、それらと接合するものが多い。このグリッドには弥生土器の出土が集中しており分布が重なる。そして図35の縄文時代前～晩期の出土分布状況とは異なる様相を示す。しかし、弥生土器がまとまりが強い傾向が見られるのに対して、若干動きが大きい。このことは弥生土器

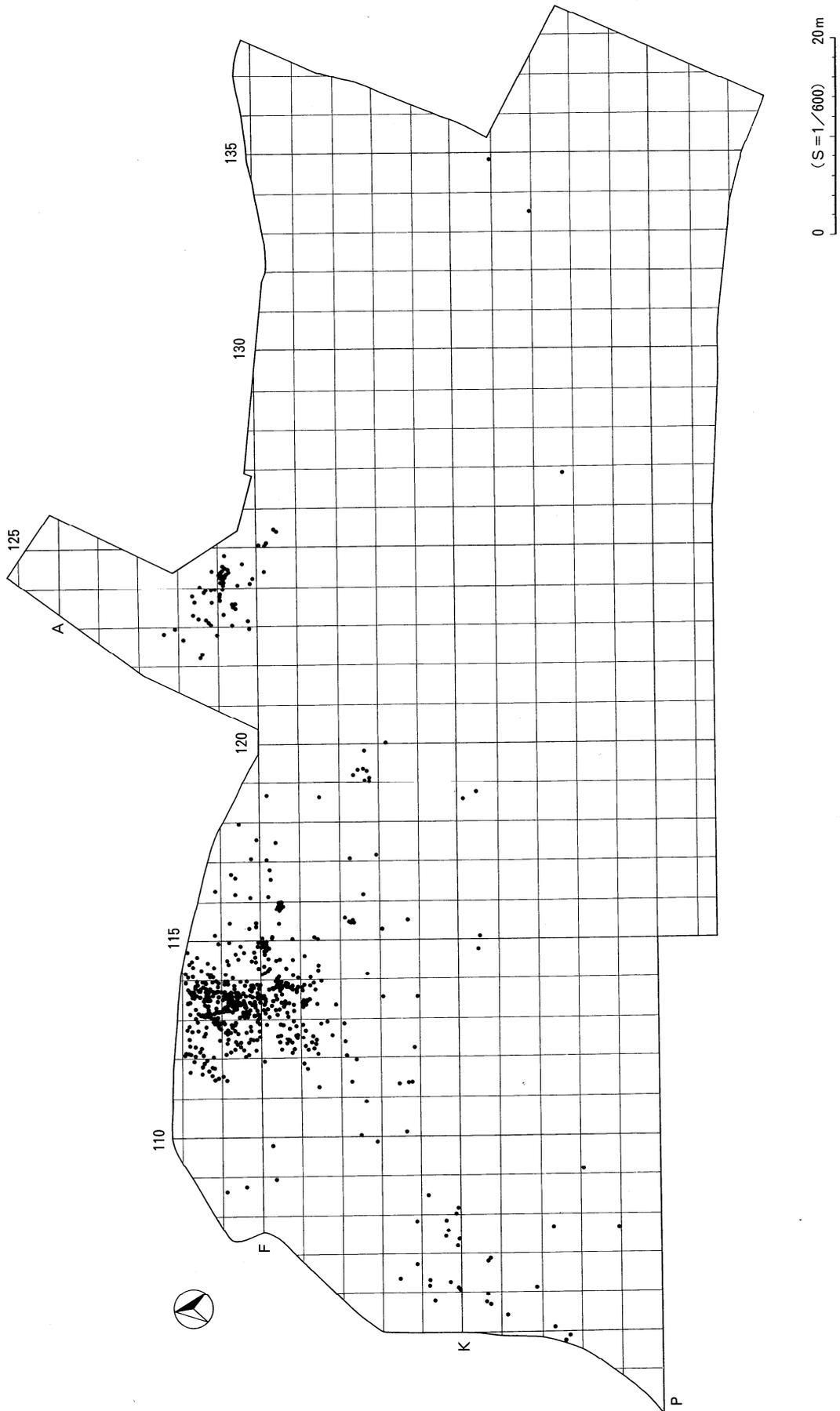


图33 土器出土分布状况

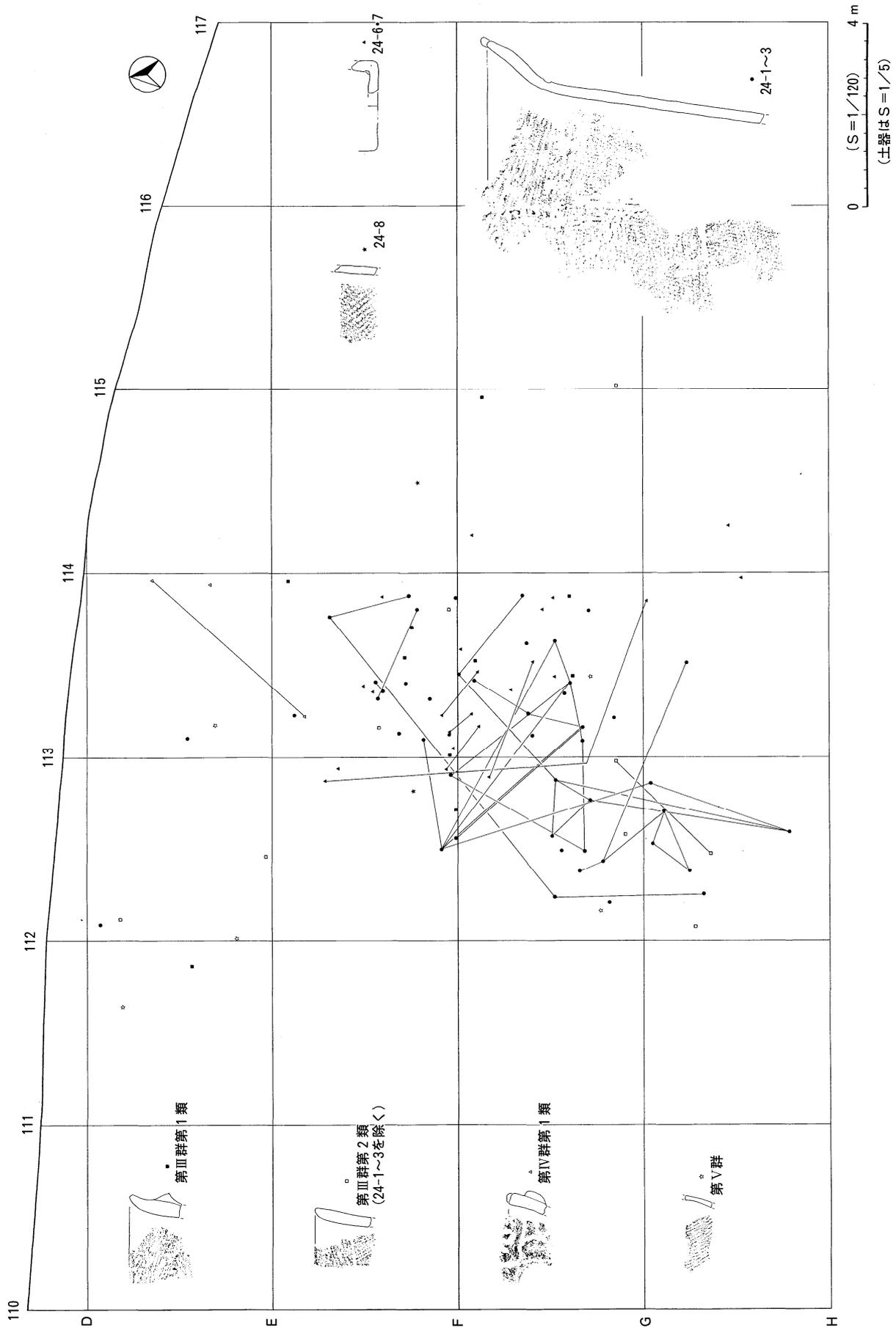


図35 遺物集中地点 第三～V群土器出土状況

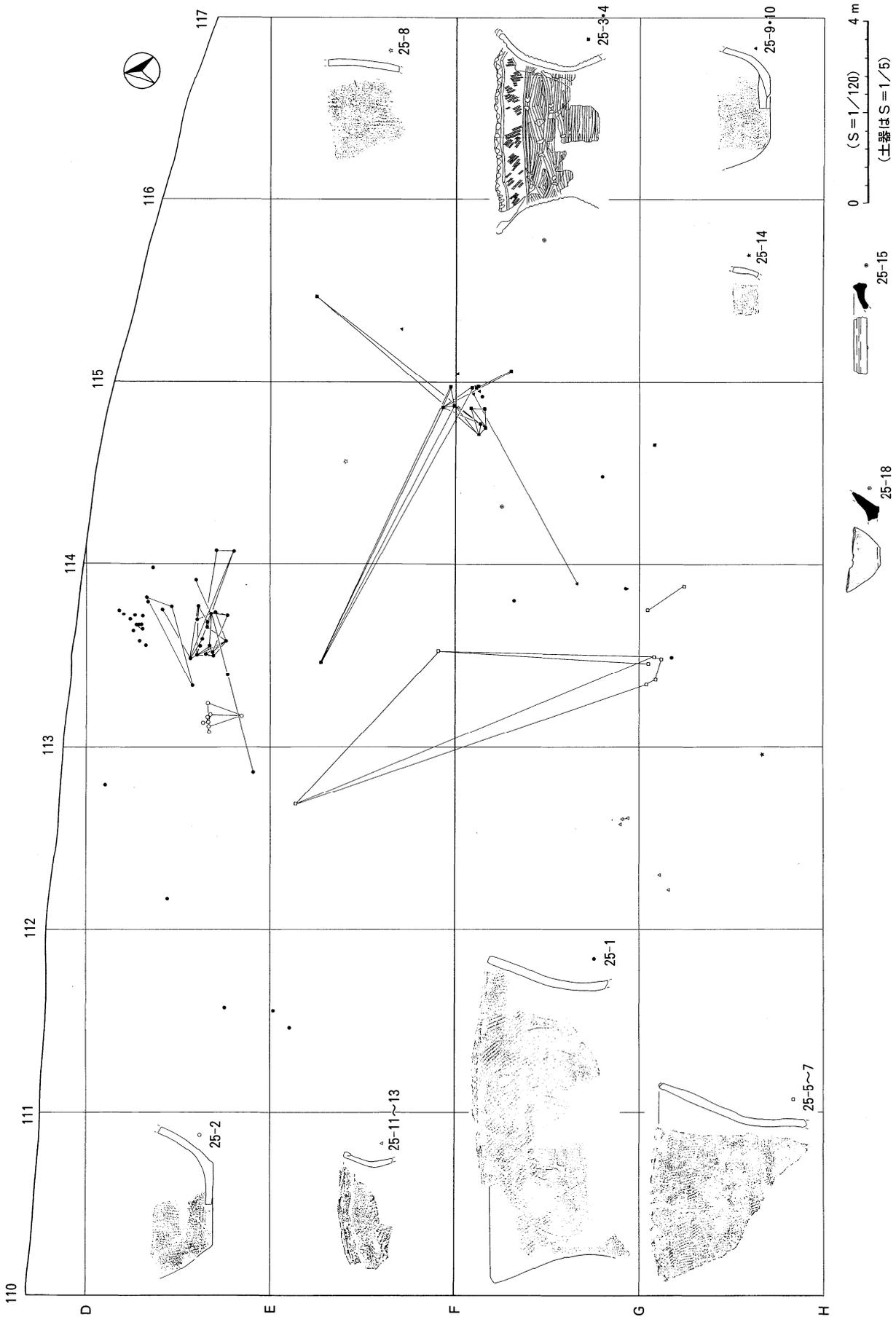


図36 遺物集中地点 第IV群土器・須恵器出土状況

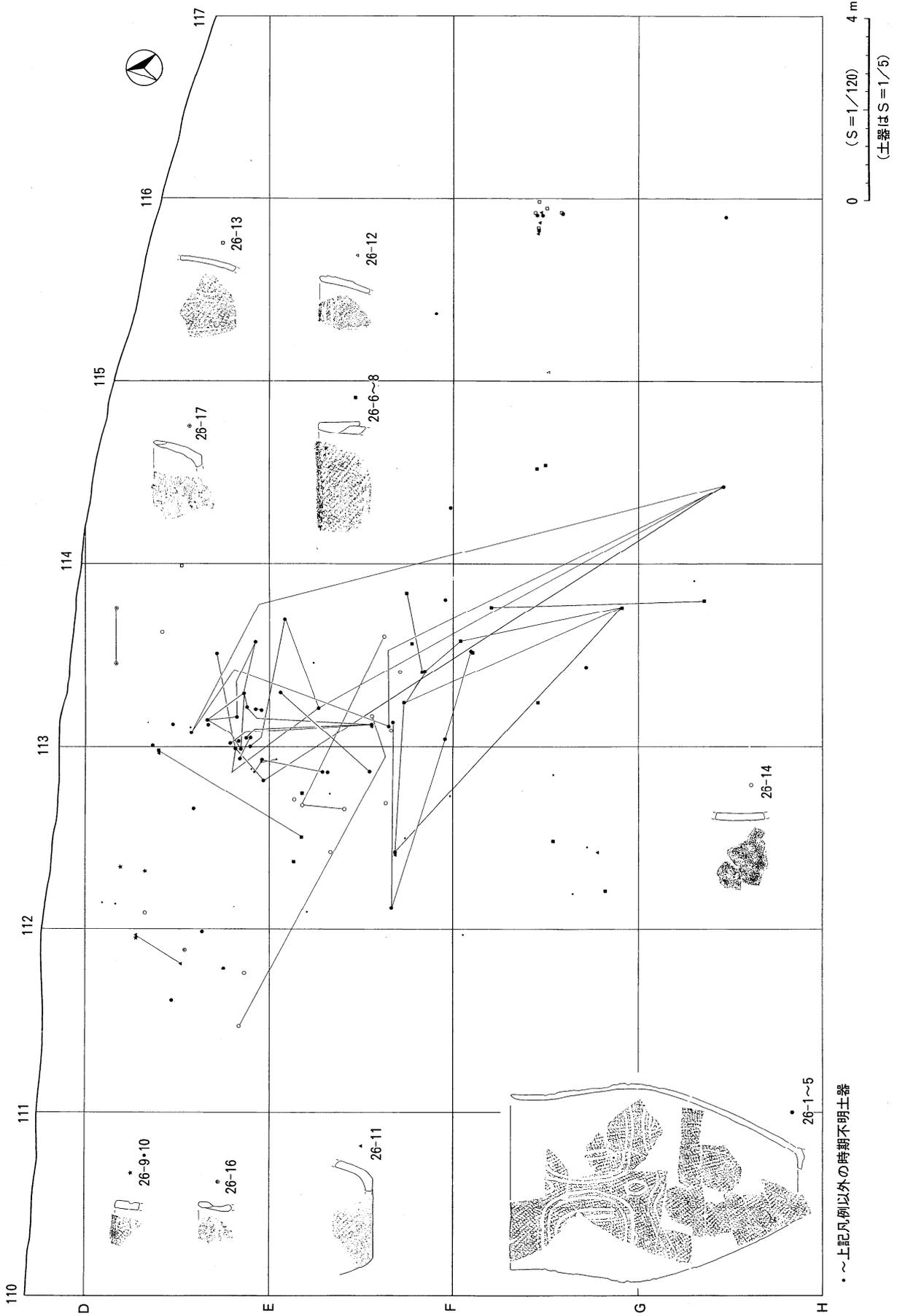


図37 遺物集中地点 第Ⅶ群土器出土状況

と若干廃棄状況が異なることを示しているものと思われる。しかし、縄文時代前～晩期、特に中期末とした資料にはまとまりが見られず、南東方向に大きく動く様相とも異なるものである。この土器群に関しては出土分布状況に関しても判断が困難である。また、F-115グリッドに小規模のまとまりが見られるが、接合するものも無く、性格的には不明である。

平安時代 現在の遺跡登録では同一遺跡内となるが、本調査区の北側に桜ヶ峰窯跡が存在している。昭和48年に故新谷武氏によって調査が行われており、本書に付編として再掲載している。このことから調査開始当初から古代に関する遺構・遺物の検出・出土を想定していたが、結果は前述の通り非常に少なかった。出土位置にもまとまりは無く、これといった傾向も見られない。接合関係も見られなかった。該当時期の周辺遺跡の状況を見てみると、東接する桜ヶ峰（2）遺跡では須恵器5点、土師器2点を確認するにとどまっている。また南接する真言館跡では1点も確認されていない。桜ヶ峰窯跡に関しても多くの出土遺物を見ないことから少数回数の焼成しか行われていなかったとされており、本調査区の状況はこれらと一致するものである。したがって本調査区周辺では該当時期の活動が希薄であった可能性が高い。

中世以降 本調査において陶磁器等明確な時期を示すものは出土しておらず、金属製品において近世以降の若干の情報を得られるのみである。いずれも出土状況に規則性は無く、状況は不明である。本調査区の南側に真言館跡が存在するが、試掘調査の結果では良好な情報は得られていない。しかし多くの道跡と第1・2号性格不明遺構が示すように、調査以前の状況である山林が形成される以前に、何らかの活動が行われていたことは事実である。調査区内を通る道路は現在リング畑への往来に使用される農道となっているが、浜街道、通称「ハマミチ」と呼ばれている。現在は西側には前田野目川沿い、東側には谷地形の底部に幹線道路が整備されているが、両方の整備以前はこの道路で浪岡町大釈迦方面に抜けていたとの話を聞いており、ある程度の往来は想定できる。蹄鉄の起源は近代になってからであり、また東側に隣接する桜ヶ峰（2）遺跡では蹄鉄痕が検出された道跡が確認されていることから、少なくとも近代以降には何らかの活動がなされていたものと思われる。

また、風呂釜がM-127グリッドから出土した。調査時点ではそれほど気にしていなかったものだが、前土地所有者より、祖父の代まで使用していたものと教えていただいた。当時内風呂がある家庭はそれほど無かったようで、その後改築の際に廃棄する際に、肥溜めとして風呂釜付の風呂桶を畑内に設置したとの事であった。調査時の遺存状況は不良で、風呂桶自体は消失しており、タガであるワイヤーと釜だけが残存していた。釜自体も腐食が激しく、今回提示することはできなかった。刻印など商品の情報が得られるものは確認されなかった。

(浅田)

2 石器・石製品

本遺跡から出土した石器・石製品は、前述したように石鏃8点、石槍1点、トランシェ様石器8点、籠状石器3点、不定形石器9点、磨製石斧1点、敲磨器類19点、石皿3点、石錘1点である。その他、多量の剥片・礫、少量の石核等が出土している。これらは全て遺物集中地点と呼称した場所を含めた遺物包含層中から出土している。ここでは、各石器毎の分布・出土状況から若干の検討を加えてみた

い。なお、整理期間中時間の許す限り出土遺物の接合を試みた結果、表皮を残す剥片や、確実に折れと判明する欠損部の接合が数件見られた他には、製品（未製品）・剥片・石核間の接合は確認できなかった。しかし、調査時を含めた時間的制約から土壌のサンプリングやウォーターセパレーションを行うことができなかったため、微細剥片については見落としている点も多く、接合に関しての整理作業も十分とは言えなかったことを始めにお断りしておく。

石鏃 8点の石鏃は遺物集中地点、D～F-112～114グリッドの範囲及び比較的遺物の集中しているM-106グリッドから出土している。8点の内3点は完形或いは欠損品で、5点が未製品である。完形品の1点は黒曜石製で、先端部の比較的長い尖基の無茎石鏃。もう1点の完形品は凹基の無茎石鏃で、平面形態は二等辺三角形を呈し形態的にも前者とは異なっている。未製品の可能性も考えられる遺物でもある。5点の未製品は、残存部の形態から見ると凹基の無茎石鏃、或いはそれに類するものを製作する途中だったものと推察される。以上の点から、尖基の無茎石鏃と凹基の無茎石鏃・未製品との間には形態的に差異が認められる。また、出土状況から前者は石器を道具として使用中、或いは使用中に欠損したものを廃棄した可能性が高く、後者は石器製作中に何らかの理由で中断・廃棄した可能性が高いものと推定される。空間的に見れば両者が出土している地点は同じように廃棄の場として捉えられるが、前者については使用域の範囲、或いは捨て場という空間に廃棄した可能性がより強く、後者については遺物間の接合は見られなかったが、周辺から出土している剥片の個体数からみても、捨て場という空間も含んではいないが、石器製作空間としての要素を前者より多く含んでいるものと考えられる。完成品がほとんどないことから使用された区域と考えるより、本遺跡で消費する量を含め他の遺跡（人々）への完成品の生産・供給地としての空間が想定されよう。

北海道産と思われる黒曜石で作られた尖基無茎石鏃に関しては、出土地点及びその周辺から同一素材の剥片等の出土は見られず、今回の調査区から出土した他の黒曜石も、D-112グリッドから本県産と思われる気泡を含み灰色の縞模様が確認できる剥片1点にすぎないことから、おそらく別の場所で作られたものがこの地に持ち込まれた可能性が高いものと考えられる。時間的に見ればG・H-116・117グリッドから検出された陥し穴と思われる溝状土坑との関連も考えられる遺物であり、空間的にはキャンプサイトやハンティングキャンプ地的な意味合いをも持つものと考えられよう。

石槍 石槍は未製品が1点、遺物集中地点であるF-114グリッドから出土している。石質は黒色の珪質頁岩で、母材と考えられる石核がI-114グリッドから出土している。F-114及びI-114グリッドを比較すると同一母材からと考えられる剥片はF-114グリッドから多く出土している。遺物間の接合は認められなかったが、F-114グリッド付近において石槍を製作途中、何らかの理由により製作を中止し廃棄した可能性が考えられる。

トランシェ様石器 トランシェ様石器は8点全てが遺物集中地点、D～I-110～115グリッドの範囲内からある程度まとまりを持って出土している。定形石器の中では石鏃と並んで最も出土量が多い器種であり、本遺跡の器種組成を特徴付けているものでもある。表面観察からは使用痕と思われる刃部の剥離や光沢部分が認められるものが多く、8点全て使用中、或いは使用中に欠損したものを廃棄したものと推察される。調査区内からは他に未製品や主な素材となるような大きさの横長剥片の出土はほとんど見られず、遺物間接合も石鏃・石槍同様1例も確認できなかった。このことからトランシェ様

石器に関しては、まず、この場で製作されたものとするならば、母材から供給された素材となる剥片からは失敗品がほとんどなかった結果が想定され、同じく、製品の他にも素材としての剥片を他の遺跡（人々）へ供給する場としての性格が強く感じられるところである。また、顕著に認められる使用痕からは使用頻度の点からも製作されてからある程度の時間経過が想定される場所である。次に、別の場所から持ち込まれたものとするならば、周辺から出土している剥片類はトランシェ様石器以外の石器、おそらくは石鏃・石槍製作の痕跡ということが想定され、そこからもある程度の時間経過が考えられよう。もちろん時間経過を含めても、トランシェ様石器を使用していた人々と他の定形石器を製作をしていたであろう人々の同時性、或いは異時性を肯定も否定もするものではない。近接した同異器種の垂直分布からみても明確な差は確認できず、時間差の有無を判断することはできなかった。

篋状石器 篋状石器は遺物集中地点、D-112グリッドから1点、調査区南西緩斜面上のM-105グリッドから1点、同N-106グリッドから1点の計3点出土している。平面的には遺物集中地点から出土しているⅠ類と緩斜面上から出土しているⅡ類との間に、直線距離で約46m程の空間が認められる遺物である。Ⅱ類が遺物集中地点から時間を経て自然作用によって、或いは耕作等に伴う人為作用によって流れ込んだ可能性も考えられるが、遺物包含層の堆積状況や丘陵の傾斜から考えると否定的にならざるをえない。また、使用した場所で廃棄したものなのかについても不明であるが、顕著に認められる刃部の光沢部分から、形状による遺物間の時間差や使用形態・使用空間について考える上でも示唆に富む遺物の出土状況と言えよう。

不定形石器 不定形石器は計9点、遺物集中地点を中心に出土しているが、剥片がある程度まとまって出土している範囲からも出土している。不定形とした石器は表面観察からは、定形石器を製作する途中と考えられるものは認められなかった。刃部には光沢部分が認められるものもあり、おそらく全て搔器・削器として使用していたものや使用されようとしていたものを廃棄、或いは遺棄したものと思われる。こちらも周辺から出土している剥片との接合を試みたが、前述の定形石器同様接合は認められなかった。また、分布状況からは出土地点での器種の偏りといったものも認められなかった。石鏃未製品やトランシェ様石器等に近接して出土しているものも確認されているが、こちらも特定の偏りといったことは認められなかった。垂直分布からは図28-27が他の周辺遺物とかなりの比高差を持ちながら出土している。そこからは明確な時間差を捉えることができ、他の遺物に先行するものと考えられる出土状況を示している。

剥片類・石核 調査区内から出土している剥片類・石核の個体数及び重量は、珪質頁岩が最も多く455点で6,736.9g、次いで玉髓が13点で246.2g、水晶が1点で31.6g、チャートが1点で13.1g、黒曜石が2点で8.4g、瑪瑙が1点で2.0gである。個体数・重量共に珪質頁岩が突出しており、それ以外の剥片の素材となりうる石材が極めて少ない。仮に珪質頁岩以外の素材から石器、或いは石製品が作られていたとしても、製品の数は極少数だったものと思われ、珪質頁岩の多さは本遺跡から出土している珪質頁岩を母材としている剥片石器の個体数に比例している。また、珪質頁岩製石器の分布は、珪質頁岩の剥片類の分布にほとんど重複している。その他、明確に石核と認識できるものは3点出土しており、こちらの石質もまた全て珪質頁岩である。

剥片は前述したようにほぼ遺物集中地点を中心とした剥片石器の周辺に拡がりをもって分布してい

る。各グリッド毎の剥片の個体数や重量は図40にまとめているが、未製品を含めた剥片石器との接合関係も認められず、それらが集中する場所でのどのような行為が行われているのかについても明確に捉えることはできなかった。一方石核はほとんどが丘陵中位の比較的緩やかな斜面上から出土している。石核の残存形態が比較的丸みを帯び、剥片に比べ重量も重いことから廃棄時、自然作用により斜面上方から下方へ移動した可能性も考えられる出土状況と言えよう。

以上、剥片・剥片石器等の分布・出土状況から検討を加えてみた。資料の大半を占める剥片類については、接合や個体別の資料分析などの詳細な観察・分析は時間的にも困難であったため、同一母材からの剥片の拡がりや剥離技術・石器製作技術を明確に捉えることができなかった。そのため現段階での観察・分析により看守できた傾向について述べる。

平面的には篋状石器のように同一器種の形態の違いにより、分布状況に偏りが認められたものも確認されたが、それらに多少なりとも時間差、或いは使用空間に差があったものかについては明確にはわからなかった。また、トランシェ様石器もある程度まとまって検出されている傾向が認められたが、その場所がそれらが使用された空間であったかどうかについても明確な判断はできなかった。

垂直分布からは1点の不定形石器と他の定形石器や剥片との間に明確な比高差が確認され、ある程度の時間差があったことが推察される。

本遺跡を特徴付ける遺物として、石器製作に関連すると思われる剥片類が土器片などと共に多量に出土している。現状で考えられる石器製作に必要なとされる要素を工程順に想定すると、①母材となる原石や石核の存在、②剥片類の存在、③製作途中での欠損品・未製品の存在、④完成品の有無、⑤副産物（剥片等）の廃棄といったことが挙げられよう。これらの要素から見ると、剥片との接合関係は認められていないが、未製品の石鏃と石槍は①～③・⑤の要素を満たしているのに対し、トランシェ様石器と篋状石器は③を伴わず、完形品の尖基無茎石鏃においては①～③・⑤が伴わない。また、トランシェ様石器に関しては素材となりうるような大きさの横長剥片がほとんど検出されないことから②も欠落していることとなる。④の完成品の有無について、石鏃・石槍の完成品がほとんど見られないことは、石器を使用、或いは収納しておく空間が石器製作空間と一致しないことを想定すれば当然のことであろう。また、一番重要な要素となりうる未製品を完成品にするために生じる微細剥片については検出資料不足のため明確なことは言えないが、以上の点から推定すると、未製品の石鏃と石槍については遺物集中地点、或いはその周辺においてある程度連続した石器製作工程が行われていた可能性が高く、トランシェ様石器、篋状石器、尖基無茎石鏃については製品として持ち込まれたものが、使用された後に廃棄された可能性が高いものと思われる。言い換えれば前者は生産活動に伴い、後者は消費活動に伴う結果とも言えよう。

調査区が道路幅と限られていたこともあり、遺物集中地点に関しても調査できた範囲は一部分に過ぎない。遺跡の全体像を把握することができなかったこともあるが、遺物集中地点については、石器（未製品・欠損品を含む）や剥片類の出土状況から見ても場所を特定することはできなかったが、石鏃・石槍製作に関連する空間であった可能性が高いものと思われる。もちろん縄文時代草創期から弥生時代までの土器片や礫・礫石器も多量に出土しており、その分布は平面的にも概ね一致している。石器の未製品や剥片も必要のないもの、或いは危険なものとして一括廃棄した捨て場として認識すべき要素が多く認められることも事実であり、逆に言えば石器製作における最終工程の場としての要素

が強い空間であったとも考えられよう。

今回調査した遺物集中地点は、時間的に見ても一元的な場所ではなく多元的な空間であったものと推察される。また、資料的には剥片類を詳細に観察・分析し、剥離技術・石器製作技術を明確に捉えることができれば、垂直分布からも明確には判明しなかった同異器種間の時間差の有無も、ある程度捉えることができるものと考えられるが、筆者の力量不足の故そこまでには至らなかった。今後の課題としたい。

(笹森)

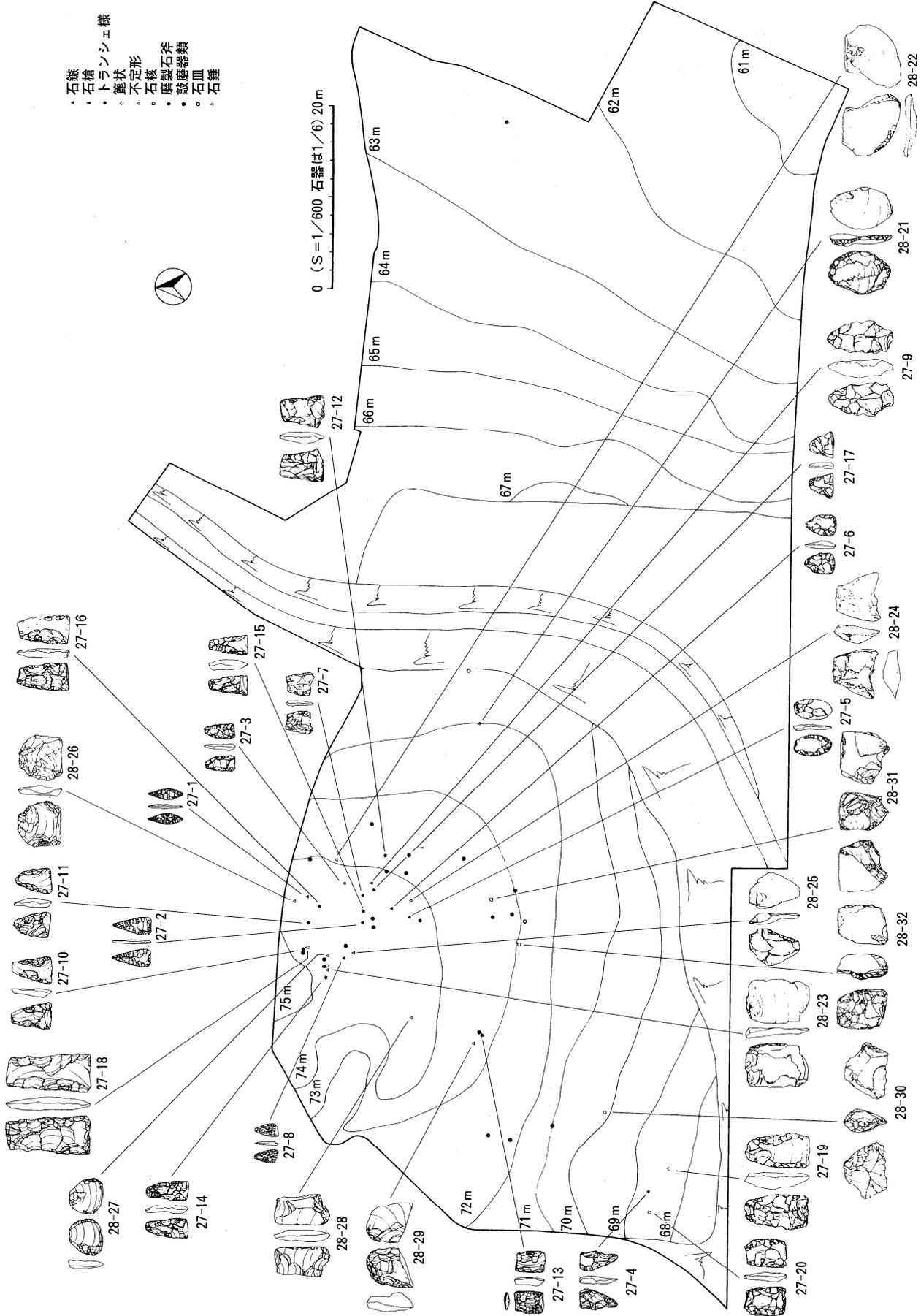
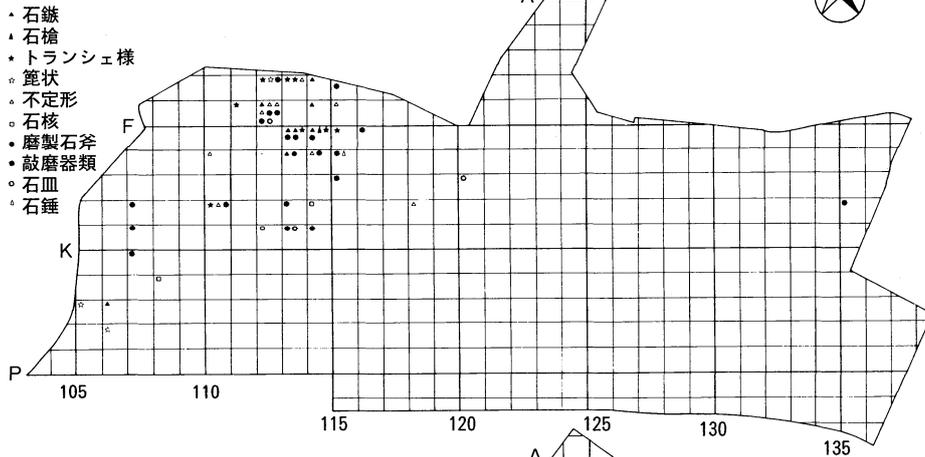
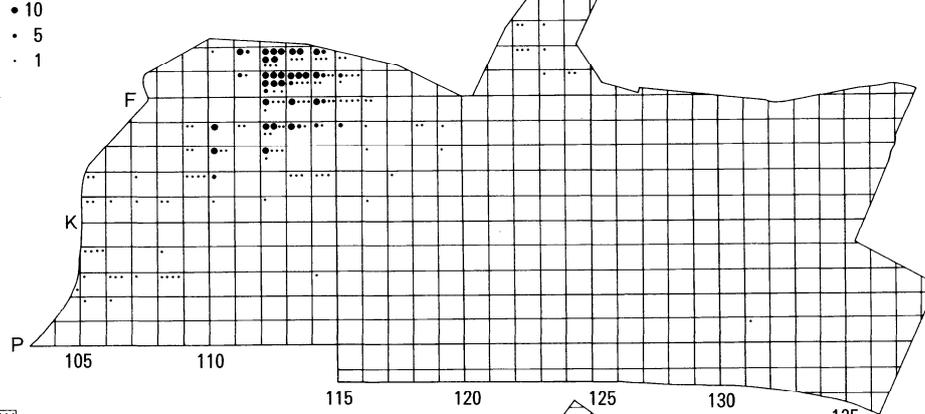


図39 遺物出土状況 石器 2

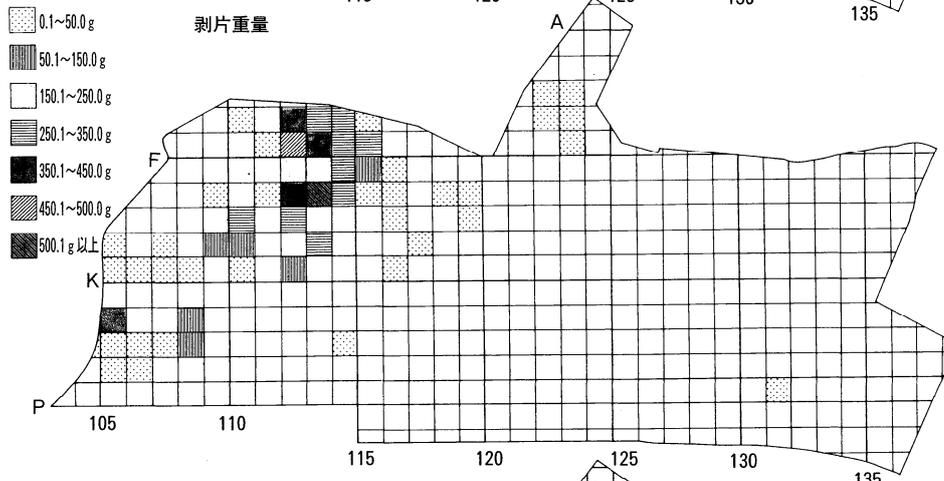
石器・石製品分布図



剥片分布図



剥片重量



礫分布図

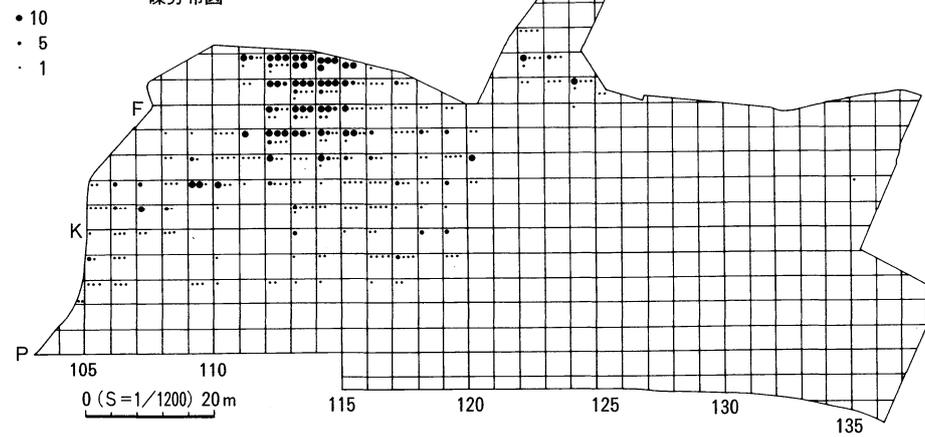


図40 グリッド別遺物分布図 石器等

第V章 出土土器の蛍光X線分析

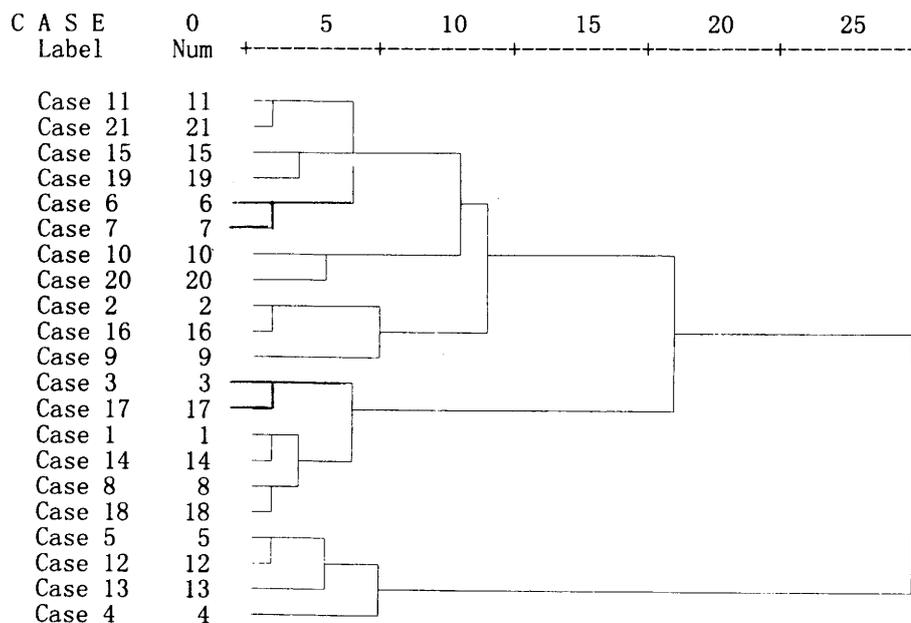
奈良教育大学教授 三 辻 利 一

縄文土器、弥生土器、土師器などの窯跡が残っていない土器についてはどの程度集中性をもって生産されていたのかについての情報はほとんどない。これらの生産地が残されていない土器の胎土研究の中心課題の一つに土器生産の実体を探ることが含まれている。この問題の解決には一つの遺跡から多数の試料を採取して、粘土を比較することが必要である。また、近辺の遺跡から出土する土器胎土との比較も必要である。このような視点からみれば、今回の試料のサンプリングの方法は適切とはいえないが、とりあえず、K、Ca、Rb、Srの4因子を使ってクラスター分析を試みた。デンドログラムは図1に示されている。一見して、集中してグルーピングされている群が一つもないことがわかる。強いて上げればNo.11~No.7が一つの集団を作るように見える。しかし、この中でNo.6、7は縄文前期の土器であるが、No.19は縄文晩期の土器、No.15は弥生土器、No.11は縄文後~晩期の土器という具合に年代が異なる。集中生産が行われたとすると、同じ時期で胎土が同じ土器が多数見つかるはずである。この点からみると、同じグループに分類されたNo.6、7の縄文前期の土器は同じところで製作されたものと推定できる。

同じようにして、土器の推定年代が同じで、胎土が類似するものはNo.3、17（縄文早期と縄文）が挙げられる。他のものは同じ樹の小枝に結び付けられても、年代が異なるので、同じところで生産されたかどうかは不明である。

なお、須恵器については、No.10の甕はK、Ca、Rb、SrのみならずFe因子からみても五所川原窯産と推定される。

今後、縄文土器、弥生土器、土師器のサンプリングについては注意を要する。



第1図 デンドログラム

桜ヶ峰(1)遺跡

分析番号	図版番号	整理番号	時期	種別・器種	K	Ca	Fe	Rb	Sr	Na
1	図22-1	12-2638	縄文早期	貝殻文深鉢	0.306	0.625	3.19	0.353	0.760	0.334
2	図22-16	12-2639	//	無文深鉢	0.354	0.253	2.37	0.534	0.566	0.229
3	図22-6	12-2640	//	貝殻文深鉢	0.259	0.699	5.03	0.255	0.616	0.314
4	図23-2	12-2641	縄文前期	深鉢	0.197	0.111	3.84	0.241	0.206	0.084
5	図22-29	12-2642	//	深鉢	0.207	0.224	2.82	0.184	0.343	0.117
6	図24-3	12-2643	//	深鉢	0.435	0.482	3.77	0.359	0.570	0.360
7	図24-2	12-2644	//	深鉢	0.407	0.475	3.39	0.444	0.569	0.357
8	図26-8	12-2645	時期不明	深鉢	0.272	0.499	1.42	0.211	0.822	0.289
9	図24-20	12-2646	縄文晩期	条痕深鉢	0.465	0.369	1.30	0.624	0.550	0.295
10	図25-17	12-2647	平安	須恵器・甕	0.292	0.277	3.85	0.355	0.320	0.201
11	図24-13	12-2648	縄文晩期?	壺	0.255	0.459	2.11	0.287	0.484	0.222
12	図25-12	12-2649	弥生後期	甕?	0.124	0.184	3.11	0.131	0.343	0.164
13	図25-4	12-2650	弥生後期	甕?	0.313	0.230	3.46	0.205	0.403	0.175
14	図25-1	12-2651	弥生後期	甕	0.283	0.559	2.04	0.326	0.702	0.291
15	図26-1	12-2652	時期不明	深鉢?	0.276	0.350	1.46	0.298	0.643	0.261
16	図25-2	12-2653	弥生後期	甕	0.278	0.291	1.52	0.480	0.573	0.179
17	図24-22と同一	12-2654	縄文晩期	粗製深鉢	0.302	0.662	2.22	0.218	0.698	0.320
18	図25-5	12-2655	弥生後期	甕	0.258	0.586	2.80	0.254	0.786	0.347
19	図24-16	12-2656	縄文晩期	粗製深鉢	0.398	0.347	2.53	0.277	0.569	0.216
20	図25-9	12-2657	弥生後期	壺?	0.416	0.289	3.06	0.388	0.439	0.247
21	岩ノ沢平遺跡	12-2658	平安	須恵器・大甕	0.269	0.491	2.77	0.321	0.543	0.238

第1表 分析データ

第VI章 まとめ

1 遺跡の立地

本遺跡は前田野目川から東へ約300m離れた前田野目台地と、大釈迦丘陵の境に位置している。調査区は丘陵地の斜面及び緩斜面地がほとんどで、西側は前田野目川の侵食により急崖となっている。標高は61～75mである。本遺跡の周辺には桜ヶ峰（2）遺跡、桜ヶ峰窯跡、真言館跡、前田野目川を挟んだ対岸には隠川遺跡群など、縄文・古代・中世の遺跡が数多く立地している。

2 検出遺構

縄文時代前期の土器埋設遺構が1基、溝状土坑が2基、古代或いは古代以降と考えられる溝跡が6条、土坑2基、道跡、性格不明遺構5基、時期不明の土坑3基が検出された。

3 出土遺物

縄文時代の遺物は草創期～晩期の土器が遺物集中地点を中心に、丘陵部からまとめて出土している。特に、草創期の爪形文土器は現在のところ津軽地方では2例目となる。また、貝殻腹縁圧痕文土器を含む縄文時代早期の土器も五所川原市内では出土例が少なく、これらは津軽地方の縄文草創期～早期の遺跡の立地条件を考える上でも貴重な資料と言えよう。石器では、縄文早期の土器に伴うと考えられるトランシェ様石器もまとめて出土している。これらは他の石器や土器同様丘陵頂部の遺物集中地点から多量の剥片等と共に出土しており、その場所で石器製作・使用、或いはそれに準ずる行為を行っていた可能性が考えられる。

弥生時代では、後期の土器が比較的まとめて出土している。天王山式のメルクマールである交互刺突文は1点も確認されていないが、諸特徴から天王山式並行の所産と考えられる。これらも五所川原市内では出土例が少なく、貴重な資料と言えよう。

平安時代の遺物は須恵器片が少量検出されただけで、土師器は出土していない。周辺には須恵器窯の存在も確認されているが、平安時代の遺物が少ない傾向は近接する桜ヶ峰（2）遺跡でも確認されている。また、真言館跡に関連するような中世の遺物も今回の調査区からは検出されなかった。

近世以降の遺物は全て遺構外から蹄鉄、形状不明の鉄製品、鉄砲玉、煙管、銭貨（寛永通宝）が出土している。いずれも、この周辺を生業の場としていた人々の行動に起因するものと思われる。

4 まとめ

今回の調査で検出された遺構・遺物の中で特筆すべきものとして、前述した縄文時代草創期の爪形文土器が挙げられよう。津軽地方での爪形文土器の出土例は、弘前市の独狐遺跡の1例が知られているが、口縁部資料としては本遺跡が初めての出土例となる。遺跡の立地としては、独狐遺跡が微高地であるのに対し、本遺跡は丘陵頂部付近と対照的な地形をしているのが特徴的である。縄文時代草創期の人々の暮らしや行動を知る上でも貴重な資料であり、次に続く縄文時代早期の遺物の出土量から見ても、当該時期の居住域は本調査区の周辺に存在していた可能性が高い。

（笹森・浅田）

付編 桜ヶ峰窯跡調査概要

今回調査した桜ヶ峰（1）遺跡は、広範囲な遺跡の中の1地点である。遺跡内には今回の調査地点の外にも遺物散布地が多数認められ、古代須恵器窯の存在も確認されている。県立浪岡高等学校校長で平成6年に在任中に亡くなられた故新谷武氏が、昭和48年9月に調査を行った桜ヶ峰窯跡がそれである。ここに、当時は謄写版刷りのため一般には知られていなかった新谷氏の報告による「桜ヶ峰窯跡調査概要」を、付編として再掲載することとする。

桜ヶ峰窯跡調査概要

昭和48年9月8日県遺跡分布調査のため、五所川原市大字前田野目字桜ヶ峰周辺を踏査した際ブルドーザーによって表土面の剥れている部分を発見、調査した結果、須恵器窯跡の残存していることが判明した。そこで残存遺構を記録に残し、今後の研究資料とするため、9月9日に実態調査を行った。その結果当初想像したよりも残存部分が多く後の研究に役立つ貴重な成果を得ることができた。ここにその成果を報告したい。

本遺跡は五所川原市大字前田野目字桜ヶ峰に所在し、五所川原市南東部に位置する。津軽半島を南北に縦走する梵珠山系に源を発する前田野目川の流域は本川に沿って細長く平野が開けている。

この平野東側は標高約50m～60mまで一部にやや峻峭な傾斜面をみるが、この標高を超えると全般的に緩やかな台地を形成し、リング畑として利用されている。

本窯跡はこの台地中にあり、同村佐々木克己氏所有の畑地に存在する。一般に前田野目窯跡群はこの東側傾斜面を利用して構築したものが多く、標高50m～60mの線に沿って分布している。又この地方のベースは粘土層に恵まれ、所々にその部分が露出している。現在7基の窯跡が発見されているが、今後開発が進むにつれて数多くの窯跡が発見されるものと思われる。

桜ヶ峰窯跡は東に面する傾斜面を利用して構築され、主軸をN-30°-Wとする半地下式無段登り窯構造である。

残存遺構は全長6.67m（燃焼部1.17m、焼成部4.5m）で、その窯幅は窯尻より1mの部分で1.3m、2.7mの部分で2m、4.3mの部分で1.8mを有し、燃焼部は窯尻より6mの部分で1.5m、6.6mの部分で1.7mを計った。

窯壁は破壊された部分が多く、左側壁面は窯尻より2mに至る地点から焚口部まで10～20cmの厚さで残存していたが、極めて脆く、明確に把握することは困難な状態であった。右側壁面は窯尻より3mの地点より残存していたが、左側壁面同様脆くなっており確証を把握するには至らなかった。焼成部より窯壁と思われる一塊を発見したが、約8cmの厚さをもっていた。

天井部は壊れ、焼成部、燃焼部に落下して残存していた。これによると厚さは13cmあり、スサが入った壁面同様のものである。窯底の勾配は平均20度であるが、燃焼部の勾配は35度の傾斜をもっている。焼成部には砂がみられ、さらにその上部に須恵器甕と思われる破片が敷かれていた。燃焼部と焼成部

の境界は段落により明確に識別することができた。煙出し部分は破壊されており、明確にすることは困難であった。

又灰原（捨て場）もブルドーザーにより表面土が除去され、剥れた土層に木炭が少量混り、失敗したと思われる遺物も又僅少であった。

出土遺物は、須恵器破片のみであって、総量は小袋1ヶ分であった。

須恵器は長頸壺、甕、坏、小型広口壺の4種が認められ、壺類と坏はロクロ使用の痕跡がみられた。又甕は外面にタタキ目が窺われ、大型品の傾向が強い。

長頸壺、坏の底部は篋起しと糸切りの2種が認められた。

桜ヶ峰の須恵器窯跡の概要は以上の如くであるが、それにより明らかにされた事柄について概括してみたい。

- ① 窯の構造は、半地下式無段登窯の類であって、前々回、及び前回、発掘調査した前田野目鞠ノ沢、及び砂田、持子沢隠れ川の構造と近似している。
- ② 出土した甕類破片は窯底に敷かれていたもので、本窯で製成されたものではない。
- ③ 本窯灰原の木炭量が少量であることより1回焼成窯と推定される。
- ④ 又破片量が僅少である事より失敗物は少なかったのではないか。
- ⑤ 立正大、坂詰秀一氏によると前田野目、持子沢地区の製品は平安末期より鎌倉時にかけてのものだと云う。本窯製品はこれに近似している事より、当時代のものではなからうか。
- ⑥ 一般に前田野目及び持子沢地区の窯跡は旧道または街道に沿って分布している。今回発見された桜ヶ峰窯跡は、浪岡吉野田より大釈迦に至る旧街道より東側に20mの地に所在していた。今後この街道沿いに多くの窯跡が発見されるものと思う。
- ⑦ 本窯跡より南西約800mの地に前田野目館と云われる広大な遺跡地があり、当館地には多数の須恵器、土師器が散布している。

本窯はこの館と関係があるものと思われ、今後の問題である。

以上

調査者

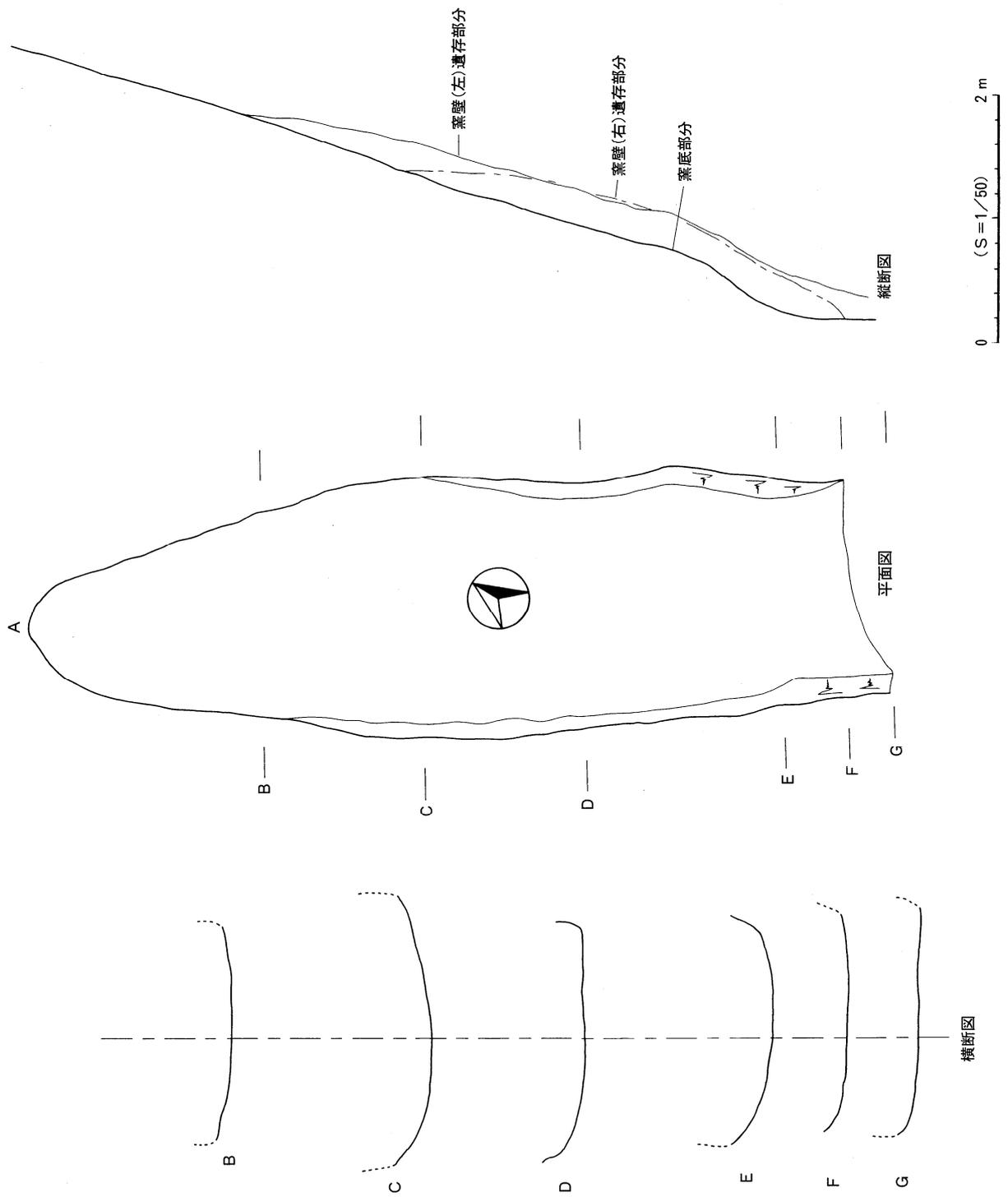
県立五所川原農林高等学校

教諭

新谷 武

桜ヶ峰（1）遺跡内に所在する桜ヶ峰窯の発掘調査概要を、故新谷武氏のご遺族のご了解を得て付編として再掲載させて頂いた。故人は生前より須恵器・須恵器窯に大変造詣の深い方であり、ご自分で山野を踏査し、桜ヶ峰窯に関しても、開発行為により消滅する寸前に調査をされたと伺っております。本書に掲載された本文・実測図等が五所川原市の新たな歴史解明や、古代須恵器窯研究の一助となれば幸いに思います。

最後に、故人のご冥福をお祈りすると共に、本文並びに実測図掲載に際して、快くご了解を頂いたご遺族の方々にも記して感謝の意を表す次第であります。



第2図 桜ヶ峰窯跡実測図

桜ヶ峰窯跡出土資料

本資料は、1999年11月五所川原市教育委員会によって行われた桜ヶ峰窯跡の確認調査の際に、1973年報告の窯跡と思われる部分から採集された資料である。1999年10月の磁気探査の際発見されたもので、磁気探査で新規確認された窯跡から約4～5m程離れている。大きく削平された部分の壁面を精査したところ、窯断面が確認された。その断面に本資料が刺さっており、採集されたとの事である。今回再掲載された窯跡との直接的な関係は不明であるが、参考資料として提示した。

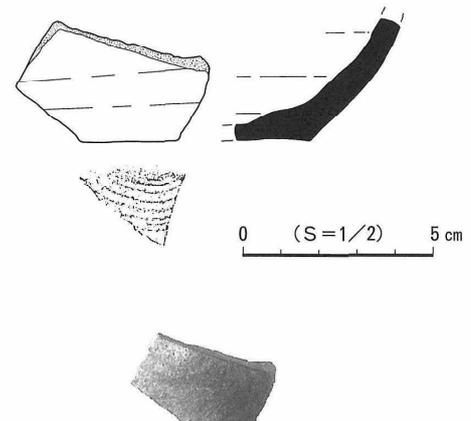
資料は1点で鉢と思われ、胴部下半から底部にかけて残存している。小破片であるため器形の復元は困難である。内外面ともロクロナデ調整である。外面体部下半には不規則なナデが観察される。底面は回転糸切痕が明瞭に残る。胎土には石英粒や海綿骨針が混入するが極少量である。焼成は還元硬質であるが、断面内面は酸化色が強い。

なお、遺物の実見、写真の提供に際し、五所川原市教育委員会にご協力、ご教示をいただいた。厚く御礼申し上げます。

(笹森・浅田)



(写真中央ピンポール部分が窯跡)



第3図 桜ヶ峰窯跡関連資料実測図・写真

引用・参考文献

- 青森県教育委員会 1976 『千歳（13）遺跡』青森県埋蔵文化財調査報告書第27集
- 青森県教育委員会 1976 『鳥海山遺跡』青森県埋蔵文化財調査報告書第32集
- 青森県教育委員会 1977 『熊沢遺跡』青森県埋蔵文化財調査報告書第38集
- 青森県教育委員会 1978 『源常平遺跡発掘調査報告書』青森県埋蔵文化財調査報告書第39集
- 青森県教育委員会 1978 『三内沢部遺跡発掘調査報告書』青森県埋蔵文化財調査報告書第41集
- 青森県教育委員会 1979 『砂沢平遺跡』青森県埋蔵文化財調査報告書第53集
- 青森県教育委員会 1979 『永野遺跡』青森県埋蔵文化財調査報告書第56集
- 青森県教育委員会 1981 『表館遺跡発掘調査報告書』青森県埋蔵文化財調査報告書第61集
- 青森県教育委員会 1983 『鴨平（2）遺跡発掘調査報告書』青森県埋蔵文化財調査報告書第73集
- 青森県教育委員会 1985 『大石平遺跡』青森県埋蔵文化財調査報告書第90集
- 青森県教育委員会 1987 『大石平遺跡Ⅲ』青森県埋蔵文化財調査報告書第103集
- 青森県教育委員会 1987 『李平下安原遺跡』青森県埋蔵文化財調査報告書第111集
- 青森県教育委員会 1988 『上尾駁（2）遺跡』青森県埋蔵文化財調査報告書第114集
- 青森県教育委員会 1989 『二ツ石遺跡』青森県埋蔵文化財調査報告書第117集
- 青森県教育委員会 1988 『鶴ヶ鼻遺跡』青森県埋蔵文化財調査報告書第122集
- 青森県教育委員会 1994 『家ノ前遺跡Ⅱ・鷹架遺跡Ⅱ』青森県埋蔵文化財調査報告書第160集
- 青森県教育委員会 1994 『松山・羽黒平（1）遺跡』青森県埋蔵文化財調査報告書第170集
- 青森県教育委員会 1996 『大平（5）遺跡・草薙（1）遺跡・湯ヶ森（2）遺跡』青森県埋蔵文化財調査報告書第199集
- 青森県教育委員会 1997 『実吉遺跡』青森県埋蔵文化財調査報告書第207集
- 青森県教育委員会 1997 『桜ヶ峰（2）遺跡』青森県埋蔵文化財調査報告書第208集
- 青森県教育委員会 1997 『隈無（4）遺跡』青森県埋蔵文化財調査報告書第209集
- 青森県教育委員会 1997 『隠川（3）遺跡』青森県埋蔵文化財調査報告書第210集
- 青森県教育委員会 1997 『垂柳遺跡・五輪野遺跡』青森県埋蔵文化財調査報告書第219集
- 青森県教育委員会 1998 『幸畑（4）遺跡・幸畑（1）遺跡』青森県埋蔵文化財調査報告書第236集
- 青森県教育委員会 1998 『隈無（1）遺跡・隈無（2）遺跡・隈無（6）遺跡』青森県埋蔵文化財調査報告書第237集
- 青森県教育委員会 1998 『隠川（4）遺跡・隠川（12）遺跡Ⅰ』青森県埋蔵文化財調査報告書第244集
- 青森県教育委員会 1999 『隠川（11）遺跡Ⅱ・隠川（12）遺跡Ⅱ』青森県埋蔵文化財調査報告書第260集
- 青森県教育委員会 1999 『櫛引遺跡』青森県埋蔵文化財調査報告書第263集
- 青森県教育委員会 2000 『モダシ平遺跡』青森県埋蔵文化財調査報告書第271集
- 青森県教育委員会 2000 『新町野遺跡Ⅱ』青森県埋蔵文化財調査報告書第275集
- 青森県教育委員会 2001 『隠川（11）遺跡Ⅱ』青森県埋蔵文化財調査報告書第299集
- 青森県立郷土館 2000 『東北町長者久保遺跡・木造町丸山遺跡』青森県立郷土館調査報告第44集 考古-12
- 青森市蛭沢遺跡発掘調査団 1979 『蛭沢遺跡』
- 青森山田高等学校考古学研究会 1990 『青森市小牧野遺跡調査報告』
- 弘前市教育委員会 1984 『三の丸庭園発掘調査報告書（Ⅳ）』
- 弘前市教育委員会 1998 『独狐遺跡発掘調査報告書Ⅱ』

- 五所川原市 1993 『五所川原市史 資料編 1』
- 五所川原市教育委員会 1996 『真言館跡』五所川原市埋蔵文化財調査報告書第19集
- 五所川原市教育委員会 1999 『犬走須恵器窯跡発掘調査報告書』五所川原市埋蔵文化財調査報告書第21集
- 五所川原市教育委員会 2000 『隠川(2)外遺跡 発掘調査報告書』五所川原市埋蔵文化財調査報告書第22集
- 浪岡町教育委員会 1983 『浪岡城V』昭和56年度浪岡城跡発掘調査報告書
- 浪岡町教育委員会 1984 『浪岡城VI』昭和57年度浪岡城跡発掘調査報告書
- 浪岡町教育委員会 1985 『浪岡城VII』昭和58年度浪岡城跡発掘調査報告書
- 浪岡町教育委員会 1988 『浪岡城IX』昭和60年度浪岡城跡発掘調査報告書
- 尾上町教育委員会 1981 『高木遺跡発掘調査報告書』調査報告書3, 考古3
- 平賀町教育委員会 1983 『木戸口遺跡』平賀町埋蔵文化財報告書12
- 平賀町教育委員会 1990 『大光寺新城跡遺跡(第2次)発掘調査報告書』平賀町埋蔵文化財報告書
- 平賀町教育委員会 1997 『大光寺新城跡遺跡発掘調査報告書』平賀町埋蔵文化財報告書
- 大鰐町教育委員会 1986 『上牡丹森遺跡』大鰐町文化財調査報告書1
- 三沢市教育委員会 1985 『根井沼(1)遺跡』三沢市埋蔵文化財調査報告書第2集
- 三沢市教育委員会 1988 『根井沼(1)遺跡緊急発掘調査報告書Ⅱ』三沢市埋蔵文化財調査報告書第4集
- 三沢市教育委員会 1988 『根井沼(1)遺跡発掘調査報告書Ⅲ』三沢市埋蔵文化財調査報告書第5集
- 三沢市教育委員会 1992 『小田内沼(1)・(4)遺跡発掘調査報告書』三沢市埋蔵文化財調査報告書第10集
- 階上町教育委員会 2000 『滝端遺跡発掘調査報告書』
- 秋田県教育委員会 1981 「鳶ヶ長根IV遺跡」『国道103号線バイパス工事関係遺跡』秋田県埋蔵文化財調査報告書第84集
- 秋田県教育委員会 1990 『はりま館遺跡発掘調査報告書』秋田県埋蔵文化財調査報告書第192集
- 秋田県教育委員会 1981 「大地平遺跡」『東北縦貫自動車道発掘調査報告書Ⅰ』秋田県埋蔵文化財調査報告書第78集
- 米沢市教育委員会 1988 『矢子大日向遺跡』米沢市埋蔵文化財調査報告書第22集
- 米沢市教育委員会 1991 『一ノ坂遺跡発掘調査概報第1集』米沢市埋蔵文化財調査報告書第30集
- 米沢市教育委員会 1992 『一ノ坂遺跡発掘調査概報第2集』米沢市埋蔵文化財調査報告書第35集
- 米沢市教育委員会 1993 『一ノ坂遺跡発掘調査概報第3集』米沢市埋蔵文化財調査報告書第38集
- 米沢市教育委員会 1994 『一ノ坂遺跡発掘調査概報第4集』米沢市埋蔵文化財調査報告書第40集
- 東京都埋蔵文化財センター 2000 『夕留遺跡Ⅱ』
- 日野市落川土地区画整理組合 1998 『おちかわ』日野市落川土地区画整理事業に伴う発掘調査報告書
- 財団法人千葉県文化財センター 1993 『千葉県文化財センター 研究紀要 14』
- 財団法人印旛郡市文化財センター 1999 『財団法人印旛郡市文化財センター年報 14 佐倉市端山越遺跡』
- 阿子島 香 1989 「石器の使用痕」『考古学ライブラリー 56』ニューサイエンス社
- 新谷 武 1973 「桜ヶ峰窯跡調査概要」
- 上野 晃 1974 「高岡市頭川遺跡」『大鏡』5
- 杉山 武・福田友之 1984 「青森県浪岡町細野遺跡出土の早期貝殻文土器・石器」『奥南』3
- 須藤 隆 1998 『東北日本先史時代文化変化・社会変動の研究－縄文から弥生へ－』纂修堂
- 富樫 泰時 1976 「トランシェ様石器について」『東北考古学の諸問題』東北考古学会編
- 福田友之・太田原慶子 1997 『浪岡町細野遺跡発掘調査報告』青森県立郷土館調査研究年報第21集

報告書抄録

ふりがな	さくらがみね(1) いせき							
書名	桜ヶ峰(1) 遺跡							
副書名	国道101号浪岡五所川原道路建設事業に伴う遺跡発掘調査報告							
巻次								
シリーズ名	青森県埋蔵文化財調査報告書							
シリーズ番号	第299集							
編著者名	相馬良仁・浅田智晴・笹森一朗							
編集機関	青森県埋蔵文化財調査センター							
所在地	〒038-0042 青森市新城字天田内152-15 TEL 017-788-5701							
発行機関	青森県教育委員会							
発行年月日	2001年3月16日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 m ²	調査原因
		市町村	遺跡番号					
さくらがみね(1) 桜ヶ峰(1) いせき 遺跡	あおもりけんごしよがわらしおお 青森県五所川原市大 あざまえたのめあざさくらがみね 字前田野目字桜ヶ峰 ほか 86、外	02205	05009	40° 45' 03"	140° 32' 14"	19990419) 19990831	6,650	国道101号 浪岡五所川 原道路建設 事業に伴う 調査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
桜ヶ峰(1) 遺跡	工房跡 墓域 狩猟場 散布地 散布地 道跡	縄文 弥生 平安 古代以降 時期不明	遺物集中地点 土器埋設遺構 溝状土坑 性格不明遺構 土坑 溝跡 道跡(畝間?) 性格不明遺構 土坑	1箇所 1基 2基 2基 2基 6条 3基 3基	縄文土器(草創期~晩期) ・石器(石鎌・石槍・ト ランシェ様石器・筒状石 器・不定形・礫石器等)・ 石製品・埋設土器(前期) 弥生土器(後期) 須恵器(五所川原産・桜 ヶ峰窯産?) 銭貨・煙管・鉄砲玉・蹄 鉄	丘陵頂部の遺物集中地 点から1000点を超える 土器片、石器、剥片等 が出土している。縄文 時代草創期の爪形文土 器や早期の貝殻腹縁文 土器、トランシェ様石 器、弥生時代後期の土 器は五所川原市内及び 津軽地方でも発見例が 少なく、貴重な資料と なる。		

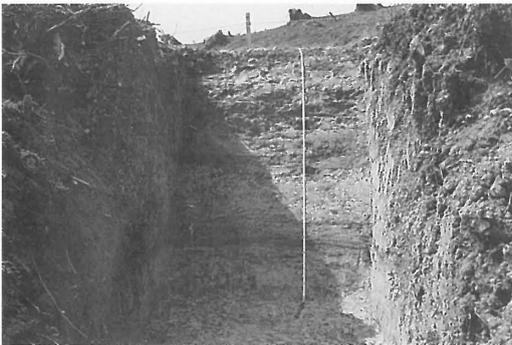
写真図版



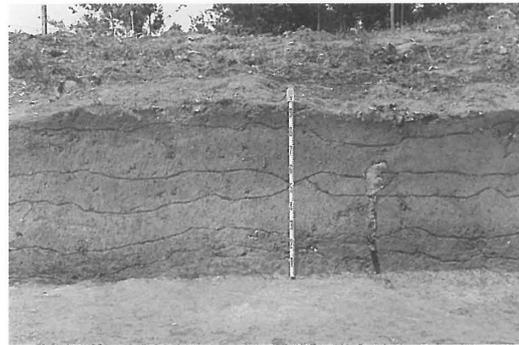
調査前風景 (S→)



調査前風景 (E→)



基本層序A (E→)



基本層序B (S→)



基本層序C (N→)



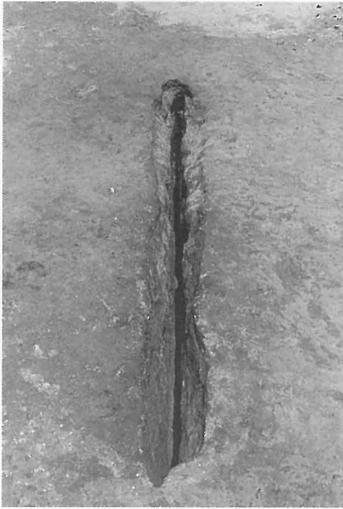
第1号土器埋設遺構 (NW→)



第1号埋設土器口縁部 (NW→)



第1号土器埋設遺構掘り方セクション (SW→)



第1号溝状土坑完掘（S→）



第2号溝状土坑完掘（S→）



第1・2号溝状土坑完掘（S→）



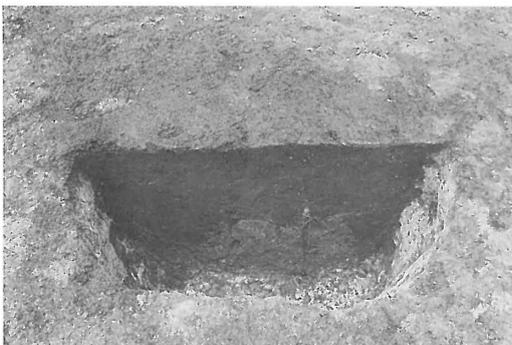
第1号土坑セクション（E→）



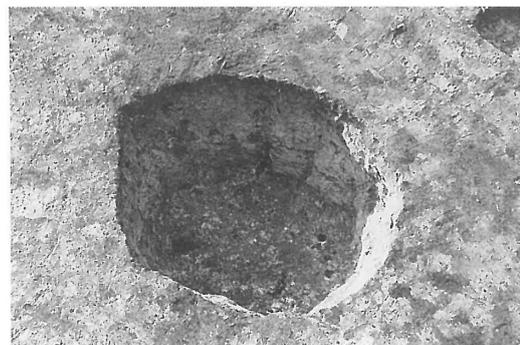
第1号土坑炭化材出土状況（E→）



第1号土坑完掘（E→）



第2号土坑セクション（SE→）



第2号土坑完掘（SE→）



第1号溝跡完掘 (S→)



第1号溝跡完掘 (S→)



第1号溝跡セクション (S→)



第1号溝跡セクション (S→)



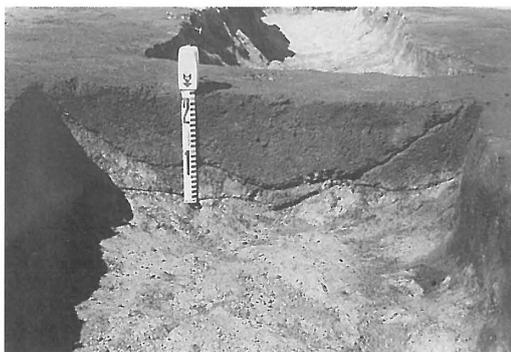
第2号溝跡検出状況 (W→)



第2号溝跡完掘 (NW→)



第2号溝跡完掘 (SE→)



第2号溝跡セクション (S→)

桜ヶ峰（1）遺跡



第1・3・4号溝跡完掘（S→）



第1・3・4号溝跡完掘（S→）



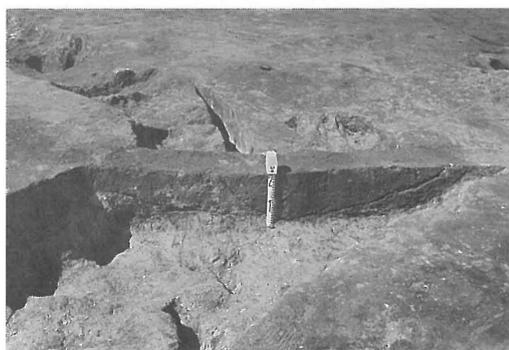
第2・5・6号溝跡完掘（SE→）



第1・2・5・6号溝跡完掘（W→）



第1・2・4・6号溝跡完掘（NE→）



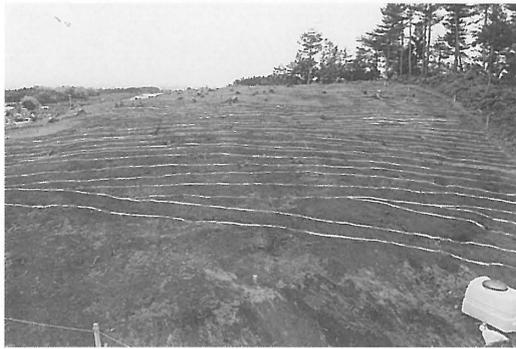
第2・6号溝跡セクション（SE→）



第3号溝跡セクション（S→）



第2・5号溝跡セクション（S→）



道跡検出状況 (E→)



道跡完掘 (S→)



道跡完掘 (N→)



道跡完掘 (N→)



道跡完掘 (NE→)



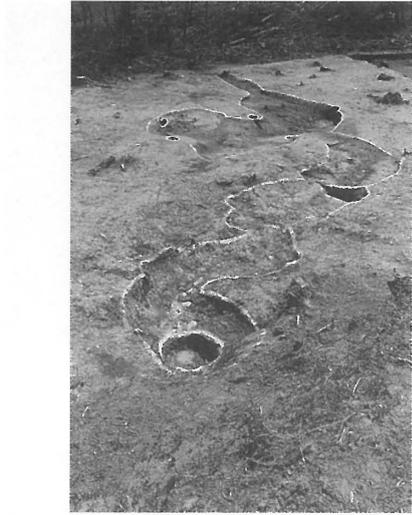
道跡セクション (SW→)



第1号性格不明遺構 (SW→)



第1号性格不明遺構 (N→)



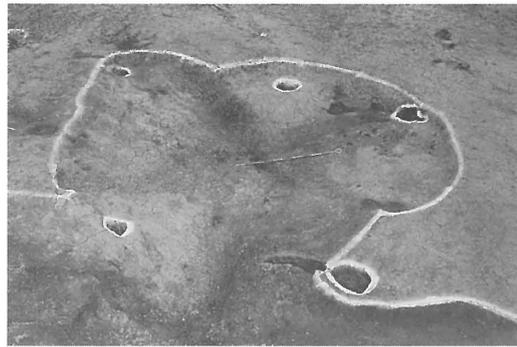
第1・2号性格不明遺構（NE→）



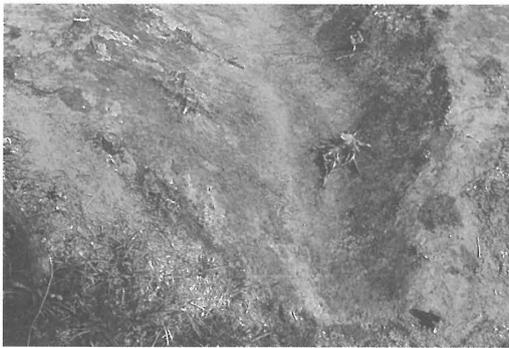
第2号性格不明遺構セクション（N→）



第5号性格不明遺構セクション（E→）



第2号性格不明遺構完掘（W→）



第5号性格不明遺構完掘（NW→）



第5号性格不明遺構セクション（N→）



第5号性格不明遺構完掘（W→）



第5号性格不明遺構完掘（NW→）



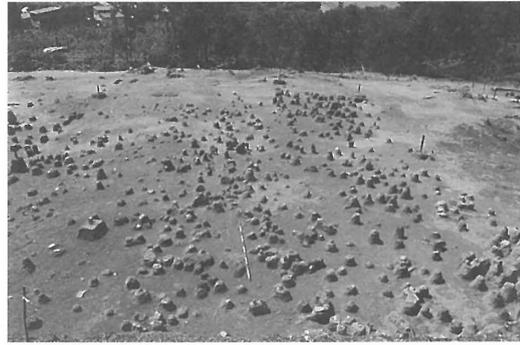
第6号性格不明遺構完掘 (S→)



第7号性格不明遺構 (E→)



遺物集中地点遺物出土状況 (W→)



遺物集中地点遺物出土状況 (N→)



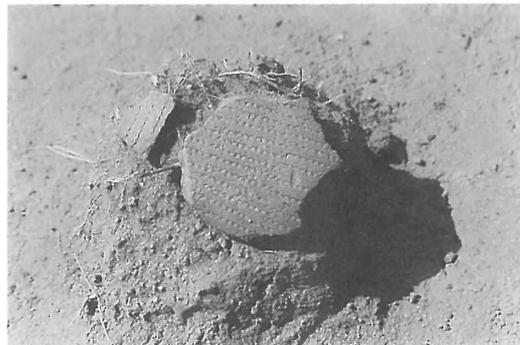
遺物集中地点遺物出土状況 (S→)



遺物集中地点遺物出土状況 (W→)

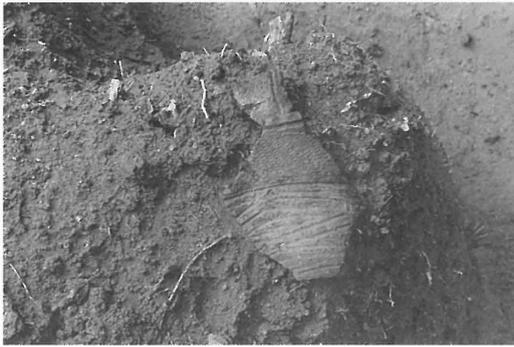


遺物集中地点遺物出土状況 (NW→)



遺物集中地点遺物出土状況 (N→)

桜ヶ峰（1）遺跡



遺物集中地点遺物出土状況（S→）



遺物集中地点遺物出土状況（E→）



遺物集中地点遺物出土状況（N→）



遺物集中地点遺物出土状況（E→）



遺物出土状況（N→）



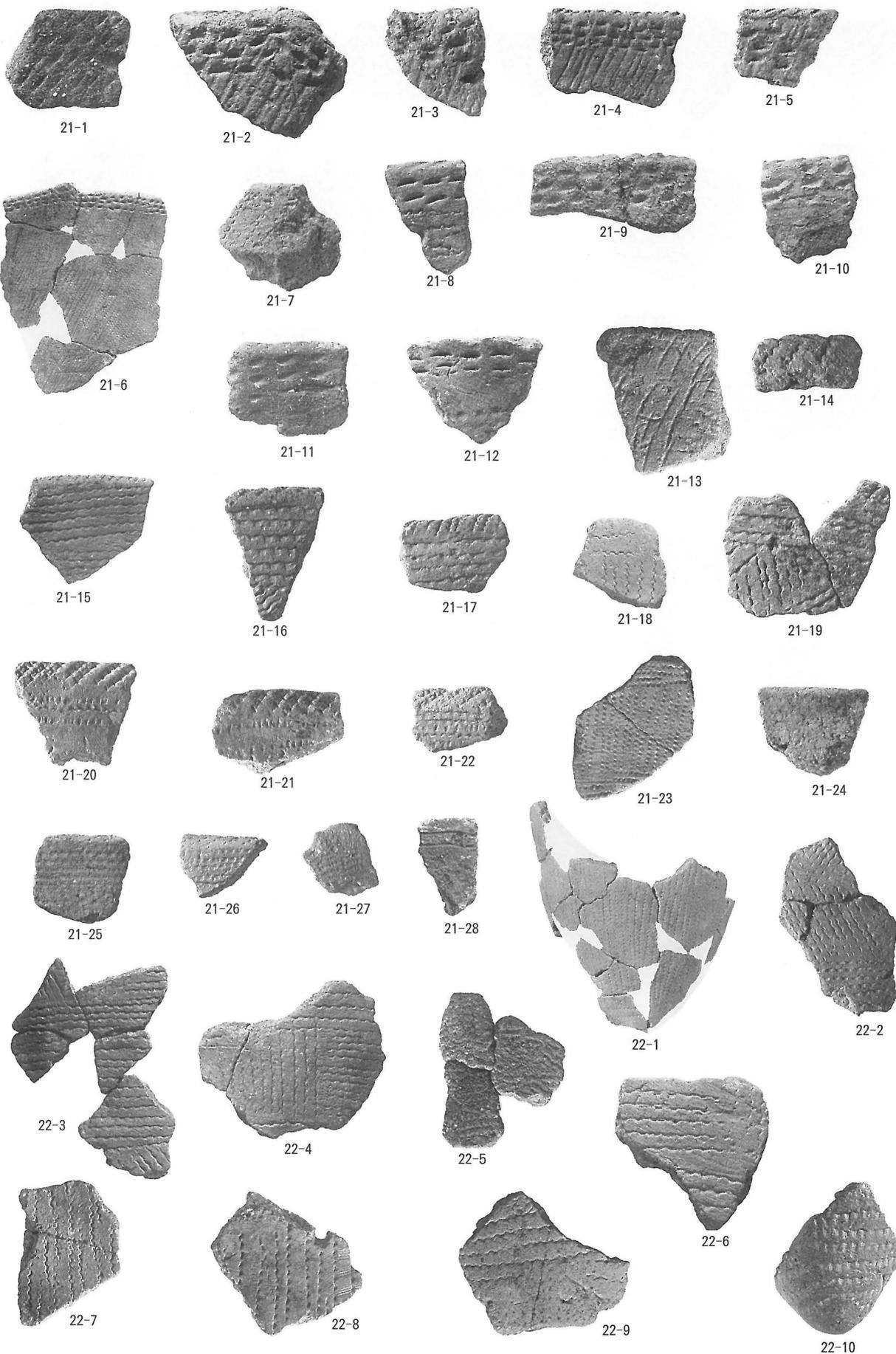
作業風景（W→）



調査終了1（SW→）



調査終了2（E→）



桜ヶ峰（1）遺跡

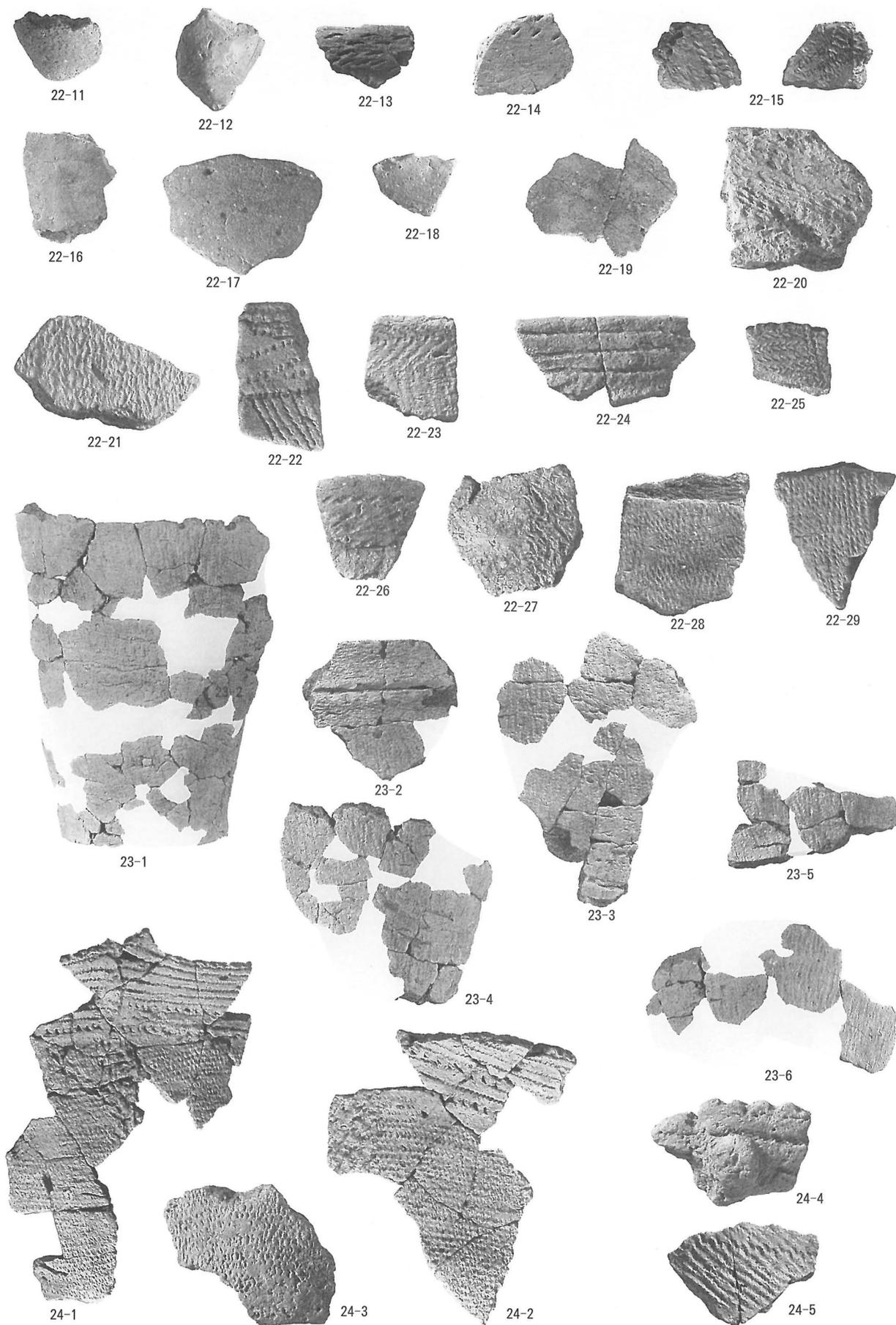
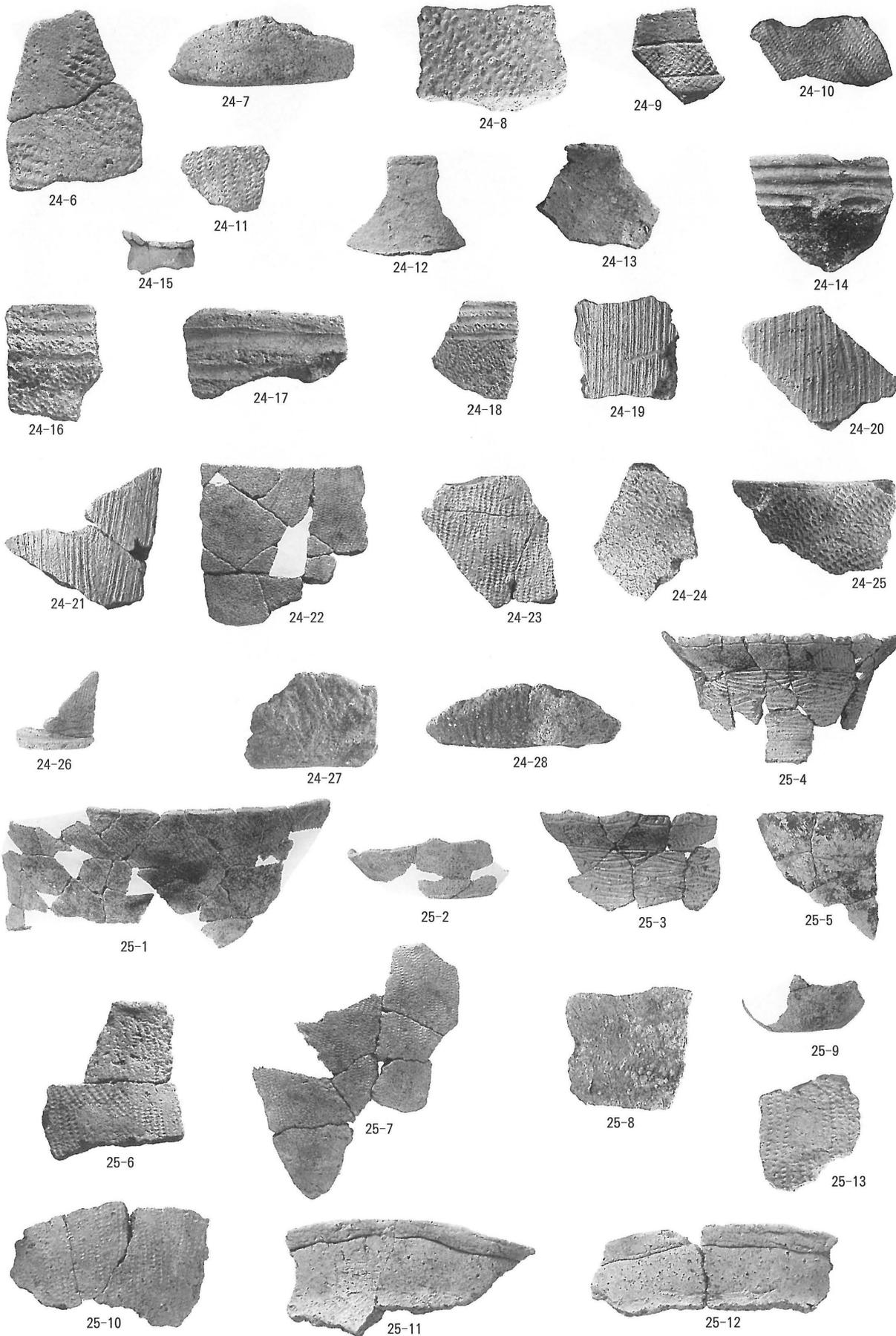


写真10



桜ヶ峰（1）遺跡

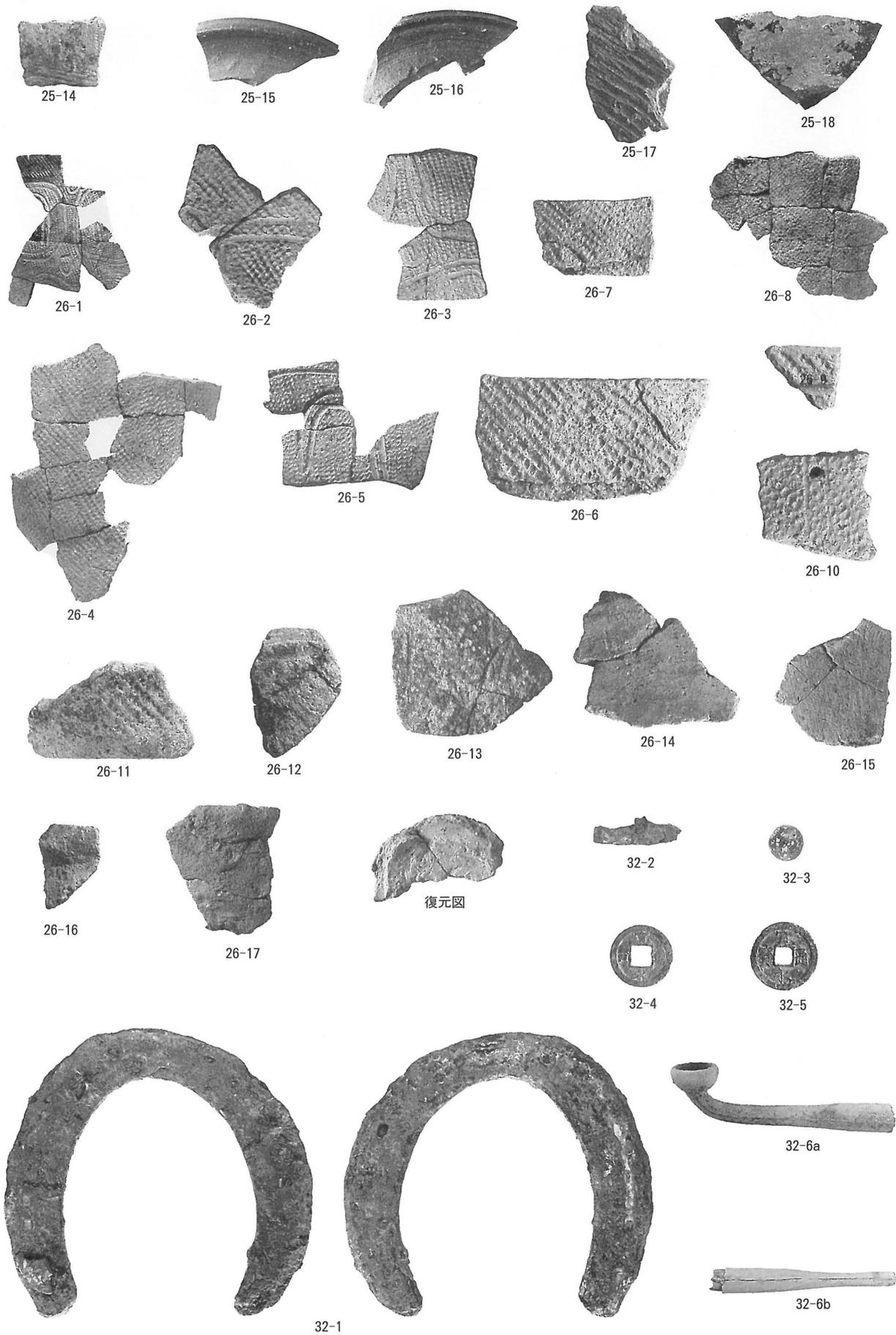
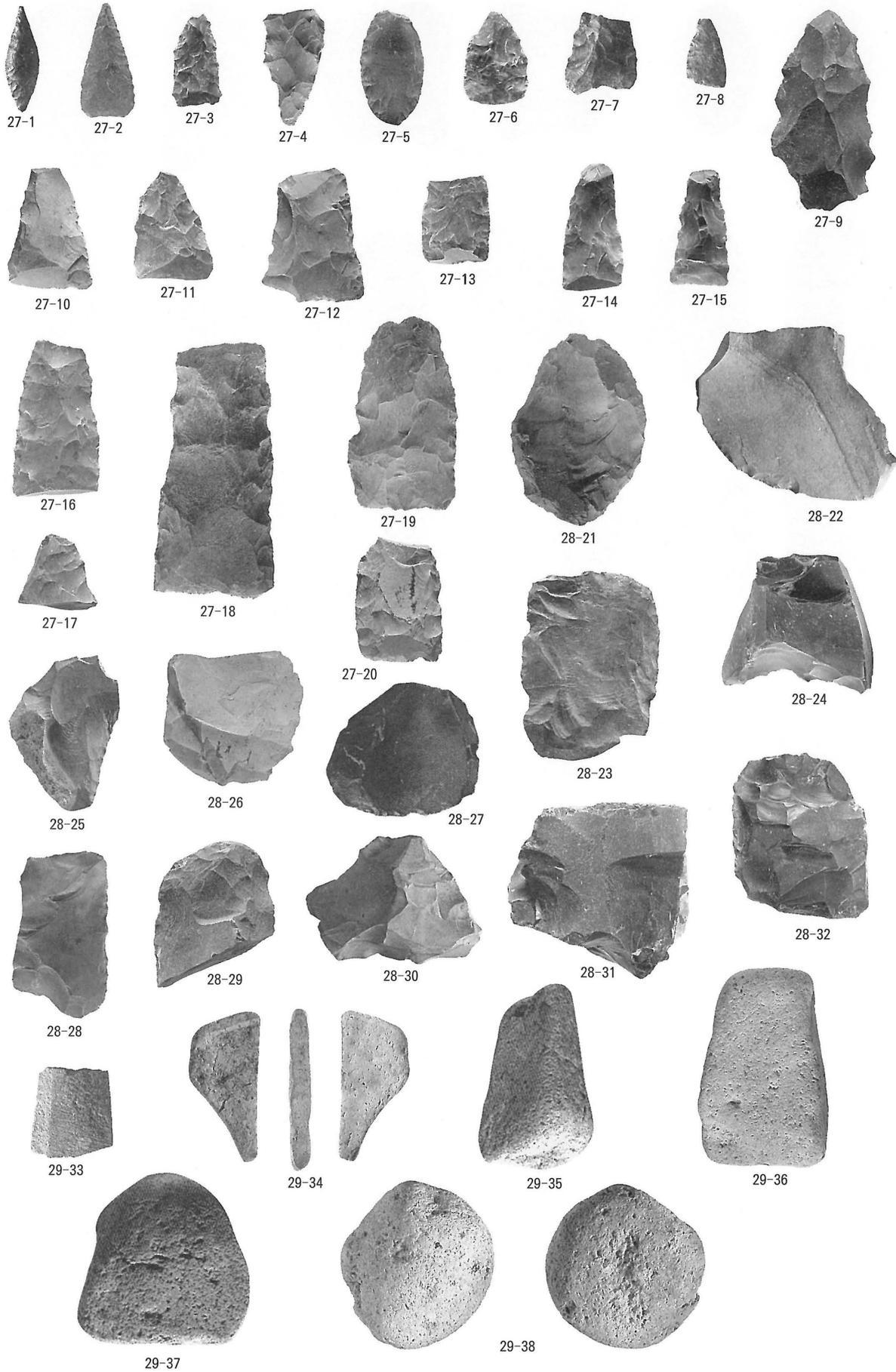


写真12



桜ヶ峰（1）遺跡



29-39



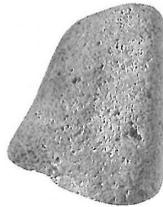
29-40



30-41



30-42



30-43



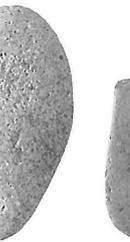
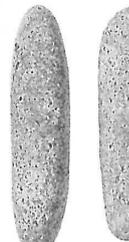
30-44



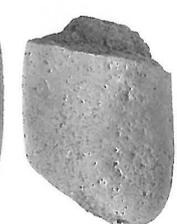
30-45



30-46



30-47



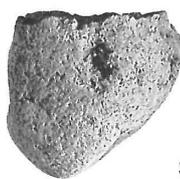
30-48



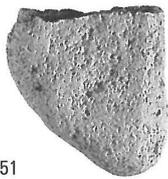
30-49



31-50



31-51



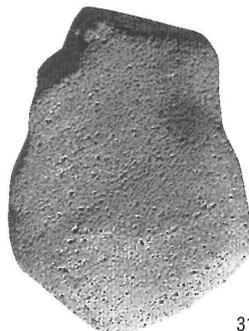
31-52



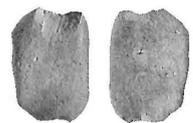
31-53



31-54



31-55



31-56



● 光沢部分を有する石器の出土グリッド

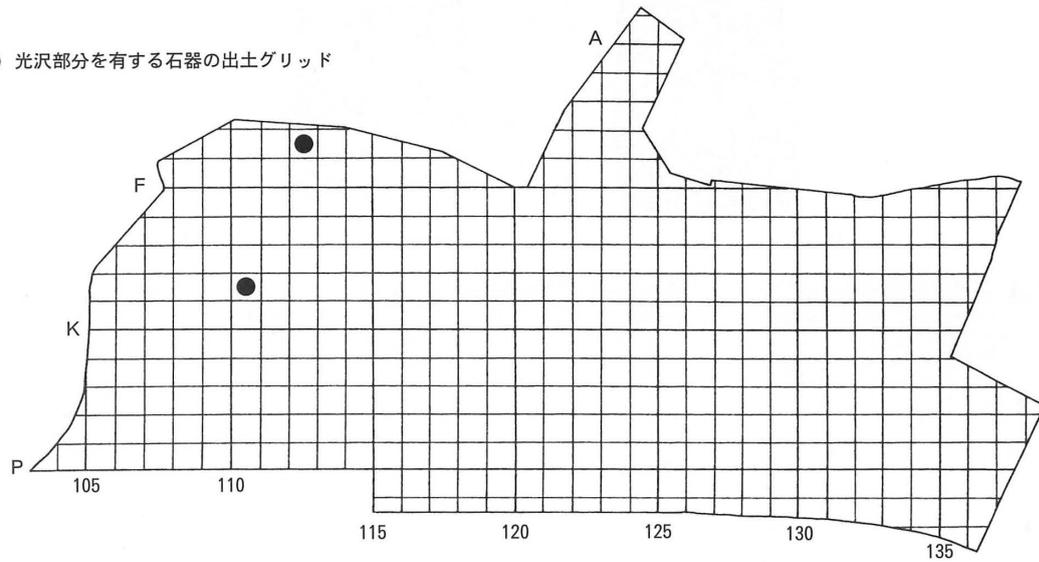
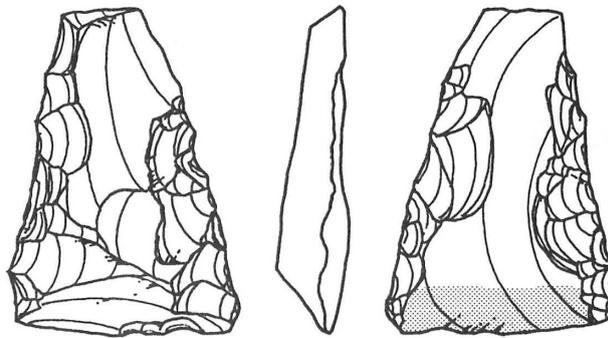


図27-10
(D-112Gr)

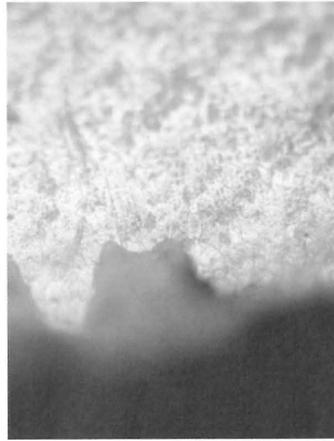


スクリーントーンは光沢部分

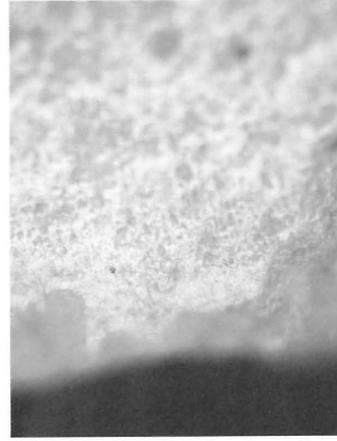
実測図1/1 写真×200



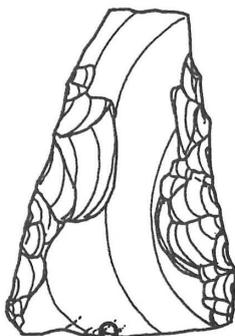
a



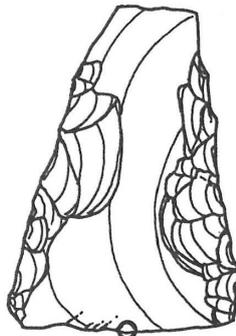
b



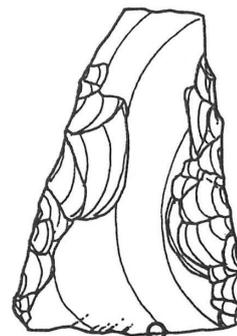
c



a



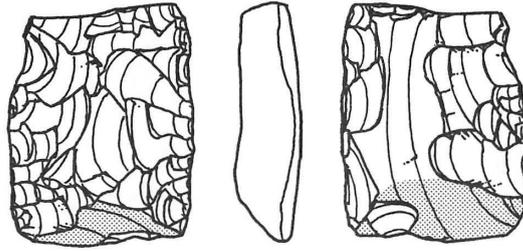
b



c

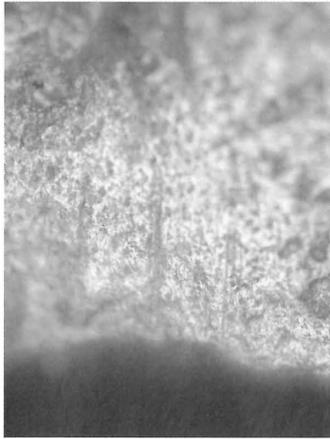
写真15 出土石器の使用痕 1

図27-13
(I-110Gr)



スクリーントーンは光沢部分

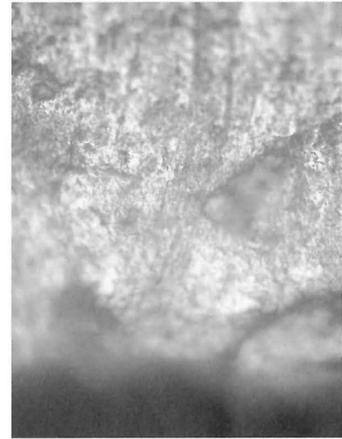
実測図1/1 写真×200



a



b



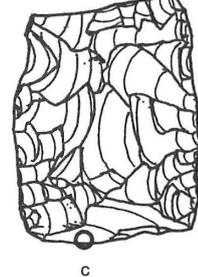
c



a



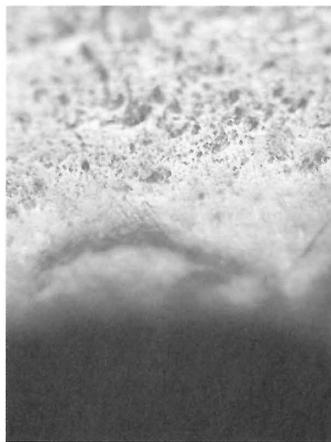
b



c



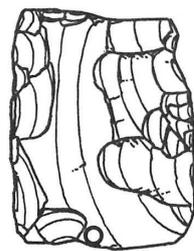
d



e



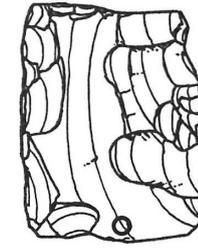
f



d



e



f

写真16 出土石器の使用痕 2

青森県埋蔵文化財調査報告書第299集

桜ヶ峰(1)遺跡

—国道101号浪岡五所川原道路建設事業に伴う遺跡発掘調査報告—

発行年月日 平成13年3月16日

発行 青森県教育委員会

〒030-8540 青森市新町二丁目3-1

編集 青森県埋蔵文化財調査センター

〒038-0042 青森市新城字天田内152-15

TEL 017-788-5701、FAX 017-788-5702

印刷所 東奥印刷株式会社

〒030-0862 青森市古川2丁目17-5

TEL 017-776-5361、FAX 017-776-5363



活彩あおもり

— 輝くあおもり新時代 —